

新隊員：酒場佳子

後菊院

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もう少しだけ、より良い未来のために。

目次

| | | |
|------|--------|-----|
| 第一話 | 酒場佳子 | 1 |
| 第二話 | 酒場佳子② | 13 |
| 第三話 | 酒場佳子③ | 21 |
| 第四話 | 酒場佳子④ | 30 |
| 第五話 | 酒場佳子⑤ | 41 |
| 第六話 | 酒場佳子⑥ | 55 |
| 第七話 | 酒場佳子⑦ | 66 |
| 第八話 | 大規模侵攻① | 74 |
| 第九話 | 大規模侵攻② | 87 |
| 第十話 | 大規模侵攻③ | 112 |
| 第十一話 | 酒場佳子⑧ | 123 |

第一話 酒場佳子

1

三門市立第一高等学校には多くのボーダー隊員が在籍している。ボーダーA級七位部隊を率いる隊長、三輪秀次みわしゅうじもまたこの高校の生徒だ。クラスは二年D組。教室内での三輪は、その険しい表情と近寄りたがたい雰囲気から若干浮いている。決して爪弾きにされているわけではないが（クラス内には同じボーダー正隊員である仁礼光や三浦雄太もいて、彼らが橋渡しの役を担ってくれることがよくある）、これといって仲の良い友達もない。だから「転入生が来るらしい」という情報が三輪の耳に入ったのは一時間目が始まる直前だった。前の席でクラスメイトたちが話しているのが漏れ聞こえたのだ。

チャイムが鳴り、一時間目が始まる——その前に、担任がどこかとの前の扉を開けて教室に入ってくる。「えー、もうなんか知れ渡ってるみたいだが、今日このクラスに転入生が来る」とお決まりの言葉を述べた。「まじか。男？ 女？」仁礼光にれひかりが立ち上がって担任に問う。「女」と担任が答えると、一部の男子がわざとらしくざわつき、一部の女子も「へえ、どんな人？」と興味ありげにがやがやする。

担任は扉の方に向かって二度ほど素早く手招きした。みな視線がそちらに注がれる。興味がないので、三輪はふいと窓の方に敢えて視線を送ったが、これはこれで子供っぽいと思いき、扉の方に視線を戻す——と、その頃には転入生は既に姿を見せていて、担任の隣に立つと教室内を物珍しそうに見渡していた。

一目、美人だった。黒髪ショートヘアのボーイッシュな女子高生。烏丸京介からすまきよすけを女にして髪をストレートにしたらこんな感じになるだろうか。ただ、目つきはあのイケメンよりも鋭い。刺すような彼女の視線が三輪と重なり、三輪は目を他所へずらす。

「サカバさん、自己紹介」

「ああそうか。そうだった」

ぼそりと促す担任に言われてはつと首を動かす転入生。彼女は黒板を振り返り、一瞬首を左右に小さく振ってチョークを見つけるとそれを握り、カツカツと良い音を立てて黒板に何事かを書いていった。淀みのない手つきだったが、正直そんなに字は上手くない。まあそれでも「酒場 佳子」という名前を読み取るのに支障はなかった。

「酒場佳子。出身は東京。これからよろしくお願いします」

彼女は特に表情を変えることなくそう言うと、ペこりと軽く頭を下げた。

「ええと席は……あそこだな。あそこが空いてるから」

そう言って担任が指差したのは三輪の隣。確かにそこは教室の角で、余った机が一つ置いてある。三輪は思わず眉をひそめた。隣のいない一人席の特権が失われることになるからだ。

「よろしく」

そんな三輪の心中を知ってか知らずか、転入生は三輪に軽く一声かけると、手に持っていた鞆を机の横にかける。

「じゃあ、山田先生お願いします」

担任は一時間目の担当の教師に一声かけると姿を消す。それから普通に授業が始まった。

2

「なあなあ、東京のどこ出身？」

休み時間になると酒場の机を数人の女子が取り囲み、酒場に色々質問をする。音頭をとっているのは仁礼光だった。

「八王子の方だ。一応東京だが、三門より田舎だな」

酒場は無表情で答える。無愛想な顔をしているが、受け答えは至って普通。気持ちがあまり顔に出ないタイプなのだろうか。

いずれにせよ、興味のない話をすぐ隣でされるのは三輪にとって苦痛だった。屋上にでも行こうと席を立ち上がりかけた時、「この街にはボーダーという組織があるらしいな」と酒場が言う。

「おつ、ボーダーに興味あんのか？」

光が食いつく。彼女はボーダーの正隊員だ。B級二位、影浦隊かげうらのオペレーター。豪放磊落な彼女の性格は、影浦隊の雰囲気を表すものでもある。

「ああ。入隊希望だ」と酒場が言う。

「なら、わかんないことがあったらアタシに訊けな。アタシはボーダーの隊員だから」

光はドンと胸を叩いて言った。すると酒場は少し驚いたようで、今一度しげしげと光を見る。

「仁礼さんはボーダー隊員なのか」

「おう。オペレーターやってる。ウチの男衆はアタシがいねーと何もできねーんだよ」

「そうなのか」

「そうだ」

胸を張る光。酒場はそれを大真面目な顔で見ている。

「ボーダー隊員なら他にもいるよー。三浦君みづらもだし、三輪君もそうでしょ？」光の隣に立っていた女子がそう言つて三輪の方を振り返った。

「そうなのか？」酒場も三輪の方を見る。期待の色が幾分か眼差しに混じっていた。

「……悪いが、俺は忙しい」

それだけ言つて、三輪は席を立つ。教室から出た。「あいつなんかよりアタシを頼れ！ なー」という光の声。酒場は三輪の後ろ姿を目で追っていたが、それほどの興味はなさそうで、またすぐ光たちに視線を戻した。

ボーダー入隊にあたっては、基礎体力試験と基礎学力試験、そして短時間の面接が行われる。定期的に行われる入隊試験であり、毎回的人数は十人程度の時もあれば百人を超える時も稀にある。今月は二十数名がボーダー本部まで入隊試験を受けに来ていた。試験は滞り

なく進み、午後四時には全ての試験が予定通りに終了する。「本日はこれで解散となります。みなさん、お疲れ様でした」——試験管の言葉を受けて、受験生たちはばらばらと帰宅していった。

人事部が置かれる一室で、ボーダーの人事部長である水沼誠二みずぬませいじは、部下から送られてきた受験生たちのデータをチェックしていく。その中の一人、酒場佳子という少女の試験結果を見て、彼ははたと手を止めた。

「この子はトリオン量が大きいな」

「ええ。サイドエフェクトが現れていてもおかしくない数値です」

隣のデスクの部下が答える。ボーダーが独自に設定した単位を使って彼女のトリオン量を表すのであれば、8.52。なかなかの有望株である。少なくとも、今期の受験生の内では頭抜けている。

水沼は彼女の経歴欄に目を向けた。それによれば、彼女はつい先月に三門第一高校に転入してきたらしい。家族構成は母が一人。離婚して家を出たというところか、などと水沼は邪推する。それにしてもよりによって三門市に越してくるとは。近界民の影響で地価が下がり、家賃等にも影響があったのが決め手だろうか？

「何にせよ、この子には是非ともボーダーに入ってもらいたいものだね」

そう呟くと、水沼は他の受験生たちのデータに目を移した——その時、ウインと人事部の扉が開き、誰かが入ってくる。

「失礼します」

知った声が響き、水沼はそちらを振り返った。青いジャージを着流し、特殊なデザインのサングラスをかけた青年と目が合う。「水沼さん、ちよつとよろしいですか？」——迅悠一じんゆういちは、いつもより真剣な顔で水沼に声をかけてきた。

「ああ構わないが……どうしたんだい？」

「今、廊下で入隊希望の子たちとすれ違ったんですが……ちよつと彼らの名簿を見せていただけませんかね」

迅はボーダー設立当初から隊員として活躍する古株だ。信頼は篤く、断る理由などない。「今ちようど彼らの試験結果を見ていたとこ

ろだよ。これがそうだと、モニター前のスペースを迅のために半分開ける。

「誰か気にかかる子でもいたのかい？」

「ええ……確か高校生くらいの子です。髪が短くて」

その特徴に当てはまる人物を、水沼はすぐに思いついた。「じゃあ酒場さんかな？　ちようど僕たちも彼女について話していたんだよ。トリオン量の数値が優秀でね——」カチカチとマウスを操作し、酒場のデータをモニターに出す。「ふむ、改めて見ると、基礎体力試験の方も満点なんだね。大したものだ」

「……」

迅はじつとモニターを見続けていた。「どうしたんですか迅さん、その娘に惚れちゃったりしちゃいましたか？」と、横の人事部員が茶々を入れる。

「いやあ、そうじゃないんですけど」

迅は複雑そうな表情をしながら答える。水沼の見る限りでは、迅の視線にそのような感情は乗っていないかった。

水沼は問う。「何かを『視た』のだね？」

「……はい」

迅は重く頷いた。

迅は限定的な予知能力者である。ある人物を見る時、その人物の少し先の未来を視ることができるといふ稀有な能力を持つ。それは戦闘でも使えるし、もっと大きな事件に影響を与えることもできる。

「彼女、配属先を玉狛にしていただけですか？」

迅は水沼の方を見るとそう言った。

4

帰りのHR直後、三浦雄太が支度をして教室の外に出ると、「三浦先輩」と誰かに呼び止められた。振り返ると烏丸京介がいた。

「あれ、とりまる君。珍しいね。どうしたの？」

雄太もとりまるも共にボーダー隊員だ。雄太は同じ隊の香取葉子

に気があるのだが、葉子は京介を彼氏にするべく狙っている。いわば雄太から見てとりまるは恋敵にあたるわけだが、両者の関係は良好である。

とりまるは開いている扉から教室の中を覗きつつ、「酒場先輩ってもう帰っちゃいましたか？」と雄太に問う。

「酒場さん？ いやまだいると思うけど……ほらあそこ」

雄太は教室隅の机に座って光と喋っている少女を指差す。「あそこで光ちゃんと喋ってるよ」

「ありがとうございます」

京介は雄太に礼を言っていると教室に足を踏み入れていった。そういえば酒場さんもボーダーに入るって言ってたなあというようなことを思い出しつつ、少しの間京介の後ろ姿を見送る。だがすぐ本日これから防衛任務が入っていたことを思い出し、酒場と京介が何を話すのか気になりつつも、教室を後にした。

「——けどな？ 芙三步つてのは実は藤井に惚れてたらしくてその記憶を自分で消してるとかなんとかそんな感じらしいんだよ。わけわかんねーだろ？」

「そうだな。だがそのヒロインが物語の鍵なんだろう？ 同じ顔の人間が二人だとか三人だとかの話もあったしな……ん、君は誰だ？」

何だかよくわからない、漫画か何かの話をしていた光と酒場だったが、近寄ってくる京介に酒場が気づき、光もそちらに顔を向ける。

「ようとりまる、珍しいな。どした？ アタシになんか用か？ デートなら受けるぞ」

「いえ、ヒカリ先輩には用はなくて」光の冗談を軽く流し、京介は酒場の方を見る。酒場は自分を指差して「私か？」と訊いた。

「はい。酒場先輩を玉狛まで案内するよう言われて来ました……メールが送られてると思うんですけど」

「ああ。そういえばそうだった」

酒場はそう言うと、椅子から立ち上がって荷物を抱える。「あれは今日だったな。忘れてた」

「おいおい何の話だよ。アタシは何も聞いてねーぞ」光はばんばんば

んと軽く机を叩きながら言った。「なんだよ、酒ちゃん玉狛に行くのか？」

「そうらしい。玉狛支部たまごま所属だとか何とか、合格通知に書いてあった」

「なーんだよ、ウチの隊に誘えねーじゃんか」

どでかいたため息をつく光。「……じゃあ、行きましようか」と、京介は酒場を促す。「ふむ、わかった。すまん光。またな」

「ああまたな。気が向いたら本部に顔出せよ。うちの部屋コタツあるから」

5

「玉狛支部にようこそー！」

わーと手を広げ、玉狛支部の建物に入ってきた酒場を笑顔で迎え入れる少女の名は宇佐美うさみしおり。玉狛が誇る敏腕眼鏡オペレーターである。

「アタシ宇佐美。よろしくねー！」

「酒場佳子です。これからよろしくお願いします」

酒場はぺこりと頭を下げた——頭を上げた後、宇佐美の横でカピバラに乗っている子供が気になるのかちらちらと視線を送る。

「……しんいりか」

視線に気づいた子供は感情がいまいち読めない顔で言った。

「こっちは陽太郎やうたろうね。で、この子は雷神丸」宇佐美が紹介する。だが正直そう紹介されても、酒場はよくわかっていなさそうだった。

入り口で出迎えたのは宇佐美と陽太郎、そして雷神丸というカピバラだけだったが、三階の居間には玉狛の隊員たちが揃っていた。

「アンタが迅の言ってた新人ね、ふうん。あたしは小南こなみきりえ桐絵」

小南と名乗った明るい髪色の少女は、あからさまじろじろと酒場を観察する。その態度は警戒心からと言うよりは好奇心から来るものだった。「よろしくお願いします」と酒場が手を差し出すと、小南は逡巡したが、結局は握手に応じる。「あたし弱い奴とは馴れ合いたくないの」くらいは言いそうな雰囲気を出していたが、そこまで冷たい人間ではなさそうだ。

「あなたも、よろしくお願いします」

小南と握手をしながら、酒場は隣に立つ大男にも頭を下げる。

「木崎レイジだ。こちらこそよろしく頼む」

レイジが自己紹介した直後、入り口からさらに二人、隊員らしき青年と背広姿の男性が姿を見せる。

「おつ、もう来たのか新隊員——酒場佳子さん」

変わったなデザインのスングラスに青いジャージが特徴的な青年が言う。「おれは迅。で、こっちがうちのボス。林藤匠支部長」

「よろしく」と林藤が言った。

「よろしくお願いします。これからお世話になります」

「うん——あれ？ クローニンとゆりは？」

林藤が部屋を見渡して尋ねる。それには小南が答えた。

「クローニンは徹夜明けらしくて部屋で寝てる。ゆりさんはさつき、歓迎会用のお菓子がなかったから、買いに行くって言って出たって」
「なっ、そうだったのか？ 俺に言ってくれば……」レイジが頭を抱えつつぼやく。「さつき来る時買ってきたやえばよかったですね」と

京介。

「あー、ぼんち揚ならあるけど」

「ぼんち揚で歓迎会はできないでしょ」

支部のメンバーが喋っている間、酒場は微妙に所在なさげにしていた。それに気づいた宇佐美が「じゃあ早速トリガーを進呈しちやおうか！」と言い、机の上に数本の訓練用トリガーを並べていく。

「さあ勇者よ、どれでも好きなものを選びたまえ」

「好きなと言われても……どう違うんですか？」

酒場は机に置かれたトリガーを見比べながら困惑して言う。当然の反応だった。「あははそりゃそうだよね。えっと確か、酒場さんはアタッカー適正が高いって聞いているから、ここにあるのは全部アタッカーが持つ武器。ああアタッカーっていうのは剣みたいな武器でガンガン斬り合う人たちのことね。で、酒場さんから見て右から順番にスコープオン、弧月、レイガストって名前がついてるんだけど、うん、とりあえずお試しで使ってみてから決めた方が良さそうかな？」

「そう……ですね」

顎に手を当てながら慎重にうなづく酒場。「じゃあ訓練室にレッツゴー！」と宇佐美は景気よく言って立ち上がる。そして皆に問いかけた「酒場さんの相手になつてくれる人々?」。玉狛の隊員たちはお互いに視線を合わせて誰がその役を担うか決める。「……じゃあ俺が」と京介が言いかけた時、「おれがやるよ」と立候補した者がいた。迅だった。

6

「お前が手を挙げるなんて、意外だな」

地下のモニターの前にいるレイジが、訓練室内にいる迅に向かって言った。

「いやあ、期待の新人さんの実力がどんなものか、興味あつてね」

スピーカー越しに迅が答える。

「期待の新人つて、それトリオン量の話でしょ？ 剣の腕は素人じゃないの？」小南は不思議そうにしていた。京介も宇佐美も内心では小南と同じことを思っている。

「それがそうでもないって感じなんだよ。おれのサイドエフェクトがそう言ってる——なあ、酒場さん?」

「……そうですね。一応、多少の心得はあります」

訓練室内で迅と相對している酒場が応答する。手にはアタッカー用トリガー、日本刀の形状に近い「弧月」を持っている。

「へえ、すごい！ それは前途有望だね」宇佐美が驚嘆した。

「剣道とかやってたんですかね」「ああ、はい。父親が剣術を齧っていまして、それで私も色々仕込まれて」「ほうほう。生駒さんみたいな」「イコさん?」「あ、おじいさんの家が居合の道場だつていう隊員がボーダーにいるのね。その人みたいって言ったの」「酒場さんとは全然タイプ違いますけどね」

迅もトリガーを起動する。ただしそれは迅が普段使っている「風刃」ではなく、スピード型のアタッカーが好んで使うトリガー、「ス

コピーオン」。さすがに、本気で相手をするわけではないようだ。「まあ最初はお試しだから、好きなタイミングで斬りかかってきていいよ」

右手にブレードを持ったまま迅が言う。自然体の構え。「……では」と呟き、酒場は弧月を下段気味の構えから幾分切っ先を上げ、前に持ってきた。それでも一般的な中段の構えよりはかなり低い。そんな構えがあるのか——と考えていたら、酒場は一息に突っ込んでくる未来が見え、次の瞬間その通りになった。

突っ込んできたというか、酒場は迅を飛び越えて反対側の地面に着地した。表情を見ると酒場は自分でも驚いている。トリオン体の運動能力とのギャップがあったのだろう。「結構動けるだろ。トリオン体」と、迅は声をかけた。

「はい。これはすごいですね」

酒場はその場で軽く飛んだり跳ねたりする。トントんとリズムよく片足で動き、ついで軽く弧月を振る。それからくると空中で縦に一回転。着地の時、前のめりになってしまっていた。勢いにつきすぎたらしい。

「うん……なるほど」

酒場は呟いた。とりあえず、運動能力のギャップはわかったらしい。再び迅を見据えると、弧月を低く構えた。

そこで迅は未来を視る。酒場は迅から見て左に一度スライドし、斜めから袈裟斬り気味に斬り込んでくる。数秒後、酒場はほぼ予備動作なしで動き出し、迅の予知した通りの軌道を辿って仕掛けてきた。

「やるな」

戦況をモニター越しに見ていたレイジが言う。確かにそれは鋭い攻撃だった。ただ、迅には不意打ちが通用しない。タイミングよく一歩引かれて難なく受けられる。しかし酒場は初太刀を防がれた後のことも想定していたようだった。刃を翻して一発。弧月を横なぎに一閃。それは牽制の意味合いがある。迅はさらに一歩下がり、酒場の次なる行動を読む。

「うおっ」

てつきり仕切り直すかと思っていたが、酒場は迷うことなくさらに深く突っ込んできた。鋭い刺突。スコープオンはブレードの変形が可能とはいえ、リーチでは基本的に弧月に分がある。迅はそれを横に跳んで躲した。予知によれば、防げば二段目、三段目の刺突に嵌まって討ち取られる可能性があった。三段突き……新撰組じゃないんだからと迅は心の中で苦笑する。

ここからは迅が攻めるターンになった。突きの後隙にスコープオンの軽さを生かした速い斬撃を入れる。あくまでも酒場が弧月の使い心地を試すための戦いなので、それほど本気ではなく、軽めのを数発。酒場はこれを危なげなく防いだ。ならばと迅は半歩距離を詰め、より鋭い攻撃を立て続けに二発。そして一瞬の間を置いた後に、ふわりと不意を突く三撃目を入れる。だがそれらも酒場はそれを難無く凌いでカウンターを狙う。ガキンと互いの刃がかち合った。

「ねえあいつ本当に初めてなの？」

モニターを覗きながら、小南が疑わしげに宇佐美に訊く。「その筈……だと思うけど……」宇佐美は自信がなさそうだ。

「相当な猛者ですね」

京介が言った。そもそも迅とまともに斬り結べる人間なんて、ポーター内でも数えるほどしかいない。今の迅にそれほど攻めつ気がなく、ほどほどの反撃しかしていないということを加味しても、酒場の剣の腕には目を見張るものがあった。

数秒後、ピーツという音がして戦闘が終了する。迅の仮想のトリオン体が壊れたらしい。つまりは酒場が迅を斬ったということだった。「いやあ強い強い。これならあつという間にB級まで上がれそうだな」

迅が訓練室から出てくる。最後、受け太刀を置かず酒場に敢えて斬らせたのは、誰が見ても明白だった。斬り心地も体感させたかったのだろう。

「弧月の使い心地はどうだった？」

迅に続いて部屋から出てきた酒場に、宇佐美が質問する。「そうですね、トリオンの体に慣れていなかったというのもあるのですが

……、あまり特徴らしい特徴が見えませんでした」

「そこが弧月の良いところだ。欠点らしい欠点がなく、使いやすい。アタツカーのトリガーでは一番人気な所以だ」

レイジが言う。「そうなのですか」と酒場。

「次はどつちを試す？ レイガストは防御よりの剣、スコープオンは迅さんが使ってたやつで、軽さが売りの剣だけど」

宇佐美に言われた後、酒場は一瞬顎に手を当て、「じゃあ、次はレイガストで」と言ってそちらのトリガーを取った。

「よしよし。じゃあ今度はおれももう少し攻めっ気を出すから、絶品の凌ぎを見せてくれ」

「やってみます」

迅の言葉に、酒場は糞真面目に頷いた。

第二話 酒場佳子②

1

三雲修みくもおさむが酒場佳子に出会ったのは十二月の上旬、空閑遊真くがゆうま、雨取千佳あまとりちかとともに、迅悠一に連れられて玉狛支部に初めて足を踏み入れた時だった。

酒場は空閑や千佳たちと同じ、仮入隊員。一月八日の入隊式を控えている。年は修の二つ上で、現在高校二年生。今年の十月末に三門市に越してきたらしい。迅や空閑と同じスコープイオンの使い手。どことなく木虎に似た、険しい目つきの美人だが、その性格はかなりゆるめだ。

「ほうほうそうか、私に後輩ができたか」

修たちが玉狛でチームを組むという話を聞いた彼女は、そう言う嬉しそうに笑っていた。

「わからないことがあったら何でも相談しろよ。私にもわかることだったら教えてやるし、私でもわからないことだったら、レイジかとりまるか宇佐美か光に回してやるからな」

頼りになるんだかならないんだかわからない言葉を吐いてどんと胸を叩く酒場。修は「はあ……」と言う他なかった。

「こう見えて酒ちゃんサケ（玉狛支部における酒場の愛称は『酒ちゃん』で統一されたようだ）は強いよ。トリガーに触ってまだ一週間くらいなのに、もうこなみと良い勝負してるし」

宇佐美がそう紹介すると、小南が「いや別にそんな良い勝負してないし」と言いながら恨めしそうな目で酒場を見る。良い勝負をしているらしい。酒場は『こう見えて』……と宇佐美のセリフを反芻してフリーズしていた。軽いショックを受けたらしい。

小南は空閑に九対一で勝ち越した実力者だ。その小南と「良い勝負」をする酒場の実力はいかほどか——それはすぐにわかった。「さげちゃん先輩とも戦ってみたいな」という空閑の申し出を、彼女が受

けたのだ。

「ほう、良いだろう。言っておくが私はこなみのような無様は晒さないからな。心してかかってこい」

「何よ無様って!?! 遊真! いいからこいつをボッコボコにしてやりなさい!」

「了解。こなみ先輩」

そう言って空閑はブースに入る。酒場も「ふふふ」と不敵な笑みを伴って空閑に続いた。

十戦やった結果、こちらも九対一で空閑が敗北した。空閑が酒場に対して勝利を収めたのはこれまた小南戦と同じ、最後の勝負。「ありえない……この私が……?」と、ついさつき聞いたような台詞をぶつぶつ呟きながら、酒場は部屋から出てきた。

「ふむ。つよいな」

これまたさつき見たようなボンバーヘッドを直しながら空閑が呟く。

(酒場先輩も空閑相手に九一……。まだ空閑がボーダーのトリガーに慣れていないとはいえ、玉狛の隊員のレベルが高いつていうのは本当なんだな……。)と、先ほど自身をフルボッコにした烏丸京介も含めて、修はそう実感した。

見た目こそ知的な印象を持たせる酒場だが、実際のところ戦闘面以外では小南か、あるいは空閑と同じ匂いがした。それを象徴するエピソードの一つに、こんなものがある。

修が玉狛支部所属になってから数日後、酒場が駄菓子屋で瓶詰のコーラを買ってきた。それは良いのだが、あるうことか彼女はスコールピオンで瓶の口をぶった切って瓶を開封した。「蓋開けが見つからなかった」らしい。それでよくそんな解決法にたどり着いたなど呆れてしまいそうになるが、彼女は大真面目のようだった。

「蓋開けはここですよ」と京介がキッチンの引き出しを開けて酒場に教える。「ああ、そんなところに」酒場は感心したように腕を組みながら何度も頷いていた。彼女はとりまるに礼を言うと言うと蓋開けを借り、もはや蓋の意味を為していない王冠と瓶の口をそれで分離させる。

「これでよし」

彼女は満足そうだった。

ズレている。空閑とはまた違う方向に浮世離れしている。空閑のそれは彼が異文化圏に長らく住んでいたことが理由だが、酒場にはそのようなもつともらしい理由がない。おそらく天然だ。天然ものの変人である。

「三雲、お前も飲むか？」

ごくごくと美味そうに喉を鳴らしながらコーラを飲む酒場の様子をじつと観察していると、彼女は自分が修の視線に当てられていることに気づいた。そして修もコーラを飲みたいのだと勘違いしたらしい。飲みかけのコーラを修に差し出してくる。「あ、いや。ぼくは……」「切り口に気をつけろよ。鋭いからな」本人にとつては無理やり押し付けているつもりなど毛ほどもないのだろうから、尚更始末が悪い。修も一応は思春期真っ盛りの中学三年生だ、異性の先輩の飲みかけコーラをくれると言われて、完全な平常心は保てない……いや、別に酒場が好きとかそういうわけではないのだが。

「ん？もしかして炭酸は苦手か？」

酒場は言った。「いや、そういうわけじゃないんですが……」酒場の頭にクエスチョンマークが浮かび上がる。「遠慮なんかしないでいいぞ。金を取るうなんて魂胆はない」当たり前だ。そんな心配していない。

「修が遠慮するならおれが貰いたい」

しどろもどろになっていると、横から空閑がひよいと現れて酒場にコーラをねだった。彼は酒場の持つ瓶の中の黒い液体に興味津々である。

「切り口に気をつけろよ」

酒場から瓶を受け取った遊馬は、目を光らせて瓶内部の液体を一通り観察したのち、切り口に口をつけてまず一口飲んだ。「んっ？」炭酸の刺激に驚いたらしい。すぐに口を離す。

「なんだこれ、毒か？」

「毒じゃない。コーラだ」

酒場が教える。

「コーラ？」

酒場はこくと頷いた。

「アメリカ人の飲み物だ。奴らの体の60パーセントはハンバーガーとこれできている」

「ふむ、そうなのか？」

本当なのかという表情で空閑が修の方を見る。「いや、冗談だ」とフォロー。「なに!? 冗談だったのか!?」と、なぜか酒場が驚愕の声をあげた。本気で言っていたらしい。

「おい小南! あれは冗談らしいぞ! またとりまるに騙された!」

「ええっ!」

向こうのソファに座っていた小南が振り向く。

「ちよつとりまる!?! 昨日データとか統計とか使ってもっともらしいこと言ってたじゃない?! あれ嘘だったの!?!」

「すみません嘘です」

小南と一緒に騒ぐ酒場。最初は少し近寄りがたい年上の先輩という印象だったが、次第に、戦闘では頼りになるが基本的には抜けた人という判定が修の中で酒場に下された。

2

「ホンツトーにありえない……!」

朝九時半、玉狛支部。

例によってぶつぶつ呟きながら訓練室から出てきた小南は、机に置いてあった水筒をとってヤケクソ気味にあおる。「うはは。辛いだろうがこれが現実だ。甘んじて受け止めるのだな小南」遅れて訓練室から出てきた酒場が勝ち誇った顔で言った。

此度の十本勝負、勝率は小南が4で酒場が6。酒場が小南に勝ち越したのだった。

「おー、酒ちゃんとうとうやったねー。こなみは攻撃手ランク三位なんだよ?」

モニターで様子を見ていた宇佐美がゆるく称賛の言葉をかける。

「そうなのか？ この前一位だとか言っていたが」

「ああそうだね……強さって複雑だから」宇佐美は適当にざっくりまとめて言った。このタイミングで小南の素晴らしき実績を語っても微妙に格好がつかない。当の小南はソファにダイブしてクッションに顔を埋めていた。

酒場の成長速度は異常だ。

成長速度というか、もともと剣の実力があって、トリオン体によく慣れてきたと見た方が正確だろうか。それにしても、彼女が初めてトリガーを起動したのは二週間ほど前のことだ。強い。強すぎる。不自然なほどに。

「さて良い汗かいたことだし、ひとつ風呂浴びてくるかな——」

「待ちなさい！」

ジジ臭いセリフを放ちながら階段の方に歩き出した酒場の服の裾を、小南が掴んで止める。それで襟元がつまったらしく、酒場は「ぐえっ」と変な声を上げながら二歩ほど後ろに戻った。「勝ち逃げなんて許さないから！ もう十戦よ、もう十戦！」

すると酒場はにやりと悪く笑ってこう言った。「うーんどうしようかなあ。もう何回やっても結果は同じだと思うからなあ。お願いしますとか言われたら考えてみないこともないのだが」

そしてちらっちらっ和小南を見る。外見的には超然とした雰囲気を持つ酒場だが、意外にも根は俗っぽい。

「というか普通に性格が悪かった。」

「調子に乗りおって……！」

びきりと額に青筋を浮かべる小南。だが結局はプライドよりも再戦の欲の方が勝つたらしく、もう十戦お願いしますと酒場に頭を下げた。二人は再び十度の死闘を繰り広げ、今度は五対五で引き分けた。勝負はそれで終わらず、「これじゃ納得できない」と二人ともが主張してさらにもう十戦。お互いに一步も引かなかったが、これはロクヨンで小南が制した。

「もう一勝負お願いします……！」

今度は酒場がうぐぐと謎の音を出しながら小南に頭を下げる。「仕方ないわねえ♪」と、勝ち誇った笑みを浮かべながら小南はそれを了承した。

勝負は延々続く。一時間ほど経って空閑が支部に顔を出した時、二人はまだ十本勝負を繰り返していた。

「おはよう遊真くん」

「おはようしおりちゃん……お、先客がいる」

一応、空閑は小南の弟子だ。今日も十本勝負をやりに来たのだろう。酒場と小南の此度の十戦は……5対4で酒場がリードしている。今、最後の一本が始まった。

「さげちゃん先輩ってなんであんな強いのか？」

空閑がなにげなく宇佐美に訊く。

「お父さんから剣術を習ったって言ってたよ」

「ほう。お父上から」

「そういう意味じゃ、遊真君と同じだね」

「……」

小南と酒場の戦いが佳境に入った。互いの呼吸が噛み合い、後戻りの効かない激しい剣戟を繰り返す。どちらかがどちらかを斬り伏せるまで仕切り直しはないだろう。

「いやあ、こなみは良い弟子と良いライバルに巡り合えたねえ」

宇佐美は保護者目線でしみじみとそう語った。

勝負がつく。

訓練室の扉がウインと開き、そこからウキウキで出てきた酒場が「よし勝った！ 次はお前が土下座だ小南！」と高らかに宣言している様を、空閑は不思議そうな目で見ていた。

3

玉粕の上階からガタガタガシャンというけたたましい音が響いた時、一階にいたのは雨取千佳だけだった。

時刻は午後一時。何事かと驚き、おっかなびつくり二階に上がるが

変化はない。では三階か？ 階段を登って廊下の角から奥を覗くと、普段みんなが過ごすリビング・ダイニングの一つ横の部屋の扉が開いていた。すると「ぐはあっ！」という声が部屋から聞こえる。酒場の声だった。よかった不審者じゃなかったと胸を撫で下ろす一方、酒場さんは何をしているのだろうかとう興味湧く。

「ぐはあ」ということは何か物を倒したりしてしまったのだろうか、だったら手伝った方がいいんじゃないかと考え、「大丈夫ですか？」と声をかけつつ扉に近寄った。

「へえっ!？」

すつとんきような声をあげる酒場。彼女は部屋の真ん中で倒れた書棚を持ち上げていた。「だ、だ、だ、大丈夫だ。ははは……。私としたことが、ちよつと本棚を倒してしまっただけでな。ああいや別にこの部屋に入ったのはただなんとなくで特に深い意味はないのだが」

一度書棚を地面に置き、挙動不審気味に手をわちやわちやさせる酒場。聞かれてもないことを答えているし、普段はまず見せないような愛想笑いをしている。怪しい。不審者よりも不審者している。しかし千佳には酒場がここで何をやっていったのか追求する種類の強かさを備えていなかった。

「あ、そうなんですか……」

「そうなのだ。実にそうなのだ」

酒場は何度も頷いた。

「……手伝いますか……?」

「ん!? あ、いや、ええと、その、そうだな、ああ、うん。大丈夫だ。一人でできる」

案の定というか、酒場は千佳の申し出を断った。千佳は「そ、そうですか……」と微妙な間合いを測りつつあとずさり、隣の居間に退散する。手伝われると困る事情がありそうだった。

何をするでもなくソファに座った。本当は自主的な訓練をするために玉粕まで来たはずなのだが、千佳の頭の中は酒場の奇妙な行動でいっぱいになってしまっていた。あの人はなんであんなところにいたんだろう。何をしていたのだろうか？

五分ほどして酒場が居間に姿を見せる。居間に千佳の姿を認めただ彼女は「よ、よう」と千佳に挨拶する。ぎこちなさ満点だった。千佳も酒場の距離感に合わせて警戒しつつ「お疲れ様です……」と呟くように言う。

「……チカ。その……アイス食うか？」

キッチンに置いてある冷蔵庫の前でしばらく謎にゆらゆらしていた酒場は、千佳にそう訊いてきた。

それが口止め料だということを理解した千佳は、ほぼ反射的に「いただきます」と応答していた。無論、アイスに目が眩んだわけではない。季節は十二月。アイスを食べる時期じゃない。それは酒場との関係を修復する最も有効な手段が見つかったからだ。

「そうか！ 実はさつき私を買って冷凍室に入れといたんだがな、バナラとストロベリーとチョコミントがある。どれがいい？」

「えっと、じゃあ、バナラをいただきたいです」「そうかそうか！」

酒場は嬉しそうに何度も縦に頷いた。その笑顔は屈託なく、晴れやかだった。裏表を作れなさそうな人だなあと千佳は思う。酒場は冷凍室からそれぞれバナラ味とチョコミント味のカップアイスを取り出すと、スプーンを二つ引き出しから出してダイニングテーブルに移動した。それを見て、千佳もソファから立ち上がり、テーブル席に座る。

二人で仲良く「いただきます」を言い、季節外れのアイスを食べた。久しぶりのアイス（市販品）だったが、味は変わらず、美味しかった。「チカ。実はその……一つ、お願いしたいことがあるのだが……さっきの私の醜態、秘密にしておいてくれないか？」

食べ終わった後、酒場は何やらもじもじしながら千佳にそう頼み事をしてきた。その仕草が、普段の戦闘時からは想像しづらいもので何だか可愛く、千佳はにこりと笑いながら「はい。わかりました」と、酒場の頼みを受け入れた。結局酒場が隣の部屋で何をしていたのかは謎のままだったが、きつとそんなに大したことでもなかったのだろう——数日経った頃、千佳はもうそのことを思い出さなくなっていた。

第三話 酒場佳子③

1

一月八日、ボーダー隊員正式入隊日。

ボーダー本部の大広間にはこの日正式入隊を果たす多くの訓練生たちが集っていた。その中には、隊服の肩に猫の肉球のようなエンブレムをつけている四人組もいた。玉狛のC級隊員三人と、付き添いで来た修である。

「——君達は本日C級隊員……つまり訓練生として入隊するが、三門市の——そして人類の未来は君たちの双肩に掛かっている。日々研鑽し正隊員を目指してほしい。君たちと共に戦える日を待っている」
忍田しのだ本部長の言葉が終わり、嵐山隊あらしやまが登場すると、訓練生たちは一様にざわつき始めた。「嵐山隊……！」本物だ！」「嵐山さん！」などという反応がちらほらあがる。

「あーあー喜んじやって……素人は簡単でいいねえ」

歓声に混じって、すぐ後ろからそんな声が聞こえてきた。訓練生だ。後ろには訓練生が三人ほど固まって立っていた。何やら訳知り顔である。

「なあそれどういう意味？」と空閑が声の主に尋ねる。「なんだこいつ」「頭 白つ」と、別の声が言う。

「無知な人間は踊らされやすいって意味さ」先ほどの声が答えた。「嵐山隊は宣伝用に顔で選ばれたやつらだから、実際の実力は大したことないマスコット隊なんだよ」

と、彼は言う。「ボーダーの裏事情を知ってる人間にとってはこんな常識。知らなくてもちやんと見てれば見抜けるしな」

「ふうん。そうなのか」と酒場はすんなり頷く。だがそれと対照的に、空閑と修は懐疑的な表情をしていた。

「——さて。これから入隊指導を始めるが、まずはポジションごとに分かれてもらう。攻撃手と銃手を志望する者はここに残り、狙撃手を

志望する者はうちの佐鳥について訓練場に移動してくれ」

嵐山が訓練生たちに指示を出す。「一人で大丈夫か？ チカ」と空閑が千佳に訊くと、千佳は「うん、平気」と健気に答えた。千佳と別れ、空閑たちは嵐山について行く。その後はどうすれば正隊員になれるのか説明を受けた。それぞれが使用している訓練用の武器に割り当てられた武器ポイント——習熟度のようなもの——を「4000」まで上げること、それが正隊員になる条件とのことだった。

「お、さげちゃん先輩は最初からかなり高いな」

空閑が自分の右手の甲に表示されるポイントと酒場のポイントを見比べてみて言う。空閑のポイントが1000であるのに対し、酒場のポイントはなんとびっくり「3100」。4000まであとたったの900ポイントだ。

「そうだな。そういうえば林藤支部長が『小南に十本勝負で勝ち越したからポイントあげておくよ』とか言ってた覚えがある。あの時は何のことだかよくわからなかったが、これのことを言っていたのか」

「ふむ。こなみ先輩に勝ち越し……それが条件か」

「遊真は勝ち越せてないからな！」

へっへーんと空閑を揶揄する酒場。まじで嬉しそうだった。修と空閑は呆れと哀れみの中間あたりの感情から出た汗を頬にかいた。

だが、その後に行われた大型近界民との戦闘訓練では酒場が1・2秒の記録だったのに対して空閑が0・4秒と、空閑の方に軍配が上がった。

ちなみに、酒場がこの訓練をやったのは空閑の後なので、速い記録が出たというざわめきはあっても空閑のそれと比べると微妙に盛り上がりが悪っていた。

「ううう……！ 私の方が強いはずなのに……！」

と、酒場は本気で悔しがる。「まあまあ、空閑の方が体重が軽いので素早く動けるんでしょう」と修がフォローしようとするが、どうやらこれは逆効果で、「私がデブだとも言うのかお前は!？」と、しち面倒くさい絡みを仕掛けてくる。扱いにくい先輩だった。

「そんなこと言っていないですよ……！」 トリオン体の首を締められな

がら弁明する修。

「私はスリムだ！　ぱーふえくとぼでいだ！　痩せてて美人だと言え！」

「酒場先輩は……痩せてて……美人です……」

「よろしい！」

拘束を解き、どかっと修の尻を叩く酒場。修は「おわっ」とバランスを崩して前に二、三步出てしまう。トリオン体ゆえに痛みなどはほぼ皆無だが、何かしらの何かで訴えられても文句は言えないムーブをかます酒場だった。

「あれが迅の後輩……」

そんな様子を二階のギャラリーから見下ろす視線が三つ。A級三位、風間隊のメンバーがそこにいた。

風間隊長風間蒼也は、酒場の後輩へのウザ絡みはさておき、空閑と酒場の戦闘訓練を振り返って「なるほど。確かに使えそうなやつだ」という評価を口にする。

「そうですか？」菊地原士郎は手すりにもたれかかりながらぶつぶつとひねた感想を呟いていた。「誰だって慣れればあのくらい……」

「素人の動きじゃないですね。やっぱ近界民か……」歌川遼は空閑の動きを見てそんな感想を述べる。「で、もう一人のが例の……」

「ああ」と風間は遼が言外に持たせた含みを肯定する。

「注視しておけ。迅の予知では奴はまだ何の行動も見せないとのことだが、用心するに越したことはない」

「やっぱリスキーじゃないですか？　早めに始末するべきですよ」

菊地原が風間に言うが、風間は首を横に振る。

「あれは決定事項だ。酒場佳子を処分するのはまだ早い」

2

「ねえ、あの人は誰なの？」

酒場が少し遠くに離れた時を見計らって、木虎藍は修を小突いて質問した。

「あの人って、酒場先輩のことか？」

『酒場』っていうの？ 見たことないけど、あれもあなたのもともとの知り合い？」

「いや。酒場先輩と初めて会ったのは玉狛支部だよ」修はそう言った後、小声になって「……近界民ではないぞ」と付け足す。木虎は「ふうん」と頷いた。

「明らかに戦い慣れしてる動きよね」

「ああ。お父さんが剣術家らしくて、手ほどきを受けたとか聞いているよ」

「へえ……」

木虎は酒場の様子を目で追う。「彼女もあなたたちの隊に入る予定なの？」再び修に訊く。だがそれに答えたのは修ではなかった。

「いや。あいつは俺たちの隊に入る予定だ」と、烏丸京介が答えた。

「か……か、か、か、烏丸先輩……！」

木虎がどもりつつ彼の名前を呼ぶ。「おう木虎。久しぶりだな」と挨拶した京介は修に視線を向け、「悪いバイトが長引いた」と謝る。

「どんな感じだ？」

「問題ないです」と修。「二人とも、かなり目立ってますけど……」

「まあ目立つだろうな」

空閑と酒場の周りには訓練生が集まってちよつとした人ばかりになっている。二人はともに他のC級隊員から「俺たちと組もうぜ。強者同士が手を組めばより上を目指せる」と誘いを受けて、ともに断っていた。

「な……!?!」

「三雲くんと組むんだろう？」と、嵐山が二人に問う。空閑は頷いたが、酒場は首を横に振った。

「いや、私は小南たちのチームに入る」

「へえ、そうなのか」

酒場が玉狛第一部隊に編入されるというのは前々から決まっていたことらしい。ということは、酒場専用とも言えるような特殊武器もいずれは製作されるのだろう。

入隊式後初となる合同訓練においても、空閑と酒場は圧巻の成績を見せた。ともに満点なのは当たり前で、戦闘訓練の他、機動力を計る地形踏破訓練においては空閑一位の酒場二位。隠密行動訓練でも空閑一位に酒場二位。探知追跡訓練では酒場一位の空閑二位と、全ての訓練において玉狛二人はツートップを飾った。

「なぜだ、なぜ勝てない……!」

相変わらずの酒場の負けず嫌いが発動するが、空閑はもう慣れたもので、適当に対処した後、嵐山隊の時枝充とともにC級ランク戦の口ビーへと向かった。そこでランク戦のやり方を教えてもらい、C級の新3バカからポイントを塗り取る。一通り終わって自販機で飲み物を選んでみると、空閑の手からお釣りがこぼれ落ちる。床を転がった銭は、向こう側から歩いてくる誰かの靴に当たって止まった。

三輪だった。隊服ではなく、学生服を着ている。心なしか前に会った時より疲れているような、追い詰められているような雰囲気を感じていた。

「我が物顔でうろついているな……近界民……」

彼は空閑を睨んで言う。

「あんたは……『重くなる弾の人』」

と、名前を知らない空閑は三輪を武器の特徴で呼んだ。

そこに「どこに行っていたんだお前〜!」と迷子になりかかっていた酒場がふらりと現れて空閑に絡んできた。突然の乱入者に三輪は驚く。一通り空閑にうだうだした後、酒場は三輪に気づいてこう言った。

「お、三輪君。奇遇だな」

酒場は当然ながら三輪の名前を知っている。

「さげちゃん先輩、知り合い?」

「ああ。クラスメイトで隣の席だ」

「な、三輪君」と同意を求めてくる酒場。三輪は反応に困るが、結局

は頷くしかなかった。

三輪は足下の小銭を拾うと、一瞬だけ恨みでもあるようにそれを睨むが、何も言わず空閑に返す。そして自分も自販機に小銭を入れて飲み物を購入した。

「元氣ないね。前はいきなりドカドカ撃って来たのに」

「ドカドカ？」

酒場が訊く。「おれがボーダーに入る前のゴタゴタで戦ったんだよ」

「ふうん。三輪君で強いのか？」

「強かったな。腕をもがれた」

自分のすぐ横で自分の話をされるのは率直に不快だった。三輪はさっさとその場から立ち去ろうとした時、「おっ！ 黒トリの白チビじゃん！」と新たな人物が登場する。カチューシャをつけた男子高校生、よねやようすけ米屋陽介が陽太郎と雷神丸を連れて自販機前の階段を降りてきた。

「がんばつとるかね？ しよくん」

米屋に肩車されている陽太郎がキラーンと星を出して言う。「そういやボーダー入ったんだっけか！」と、米屋は嬉々として空閑に絡んできた。

『「ヤリの人」とようたろう……？ なんて一緒にいんの？』純粹に空閑が問う。

「クソガキ様のお守りしてんだよ」「陽介はしおりちゃんのイトコなのだ」「ほうしおりちゃんの。玉狛と本部は思ったより仲が悪くないのか……？」「しおりちゃんとりまるは一年ちよつとまえまで本部にいたからな」「今もたまに本部に来てるし」「へえ オサムと似たような感じか」

そこで初めて米屋は酒場を見て言う。「で、あんたはどちらさん？」

「私か。私は酒場。玉狛の訓練生だ」と、酒場は肩についた玉狛のエンブレムを米屋に見せる。米屋は納得したようにゆっくりと首を上下に振った。

「あー、噂の転入生か。あんた三輪と同じクラスだろう？」

「そうだ。君は誰だ？」

「米屋陽介。秀次といっしょに隊組んでるモンだ。よろしく」

「三輪君の仲間か。よろしく」と答える酒場。「今日はこれから防衛任務でもあるのか？」隊員が二人本部にいることから出した予想のようだが、それは外れていた。

「いや。俺は暇だけど」米屋は三輪に目を向けて言う「秀次、おまえはなんか会議に呼ばれてなかったっけ？」。

そこは三輪にとってあまり立ち入られたくない話題だった。

「……風間さんに体調不良で欠席すると言つてある」

「ふむ。体の調子が悪いのか」得心がいったように空閑が言うが、「ちがうちがう」と米屋が余計な修正を入れる。

「近界民をぶつ殺すのは当然だと思つてたのに、最近まわりが逆のこと言ひ出したから混乱してんだよ」

「あーそっか。お姉さんが近界民に殺されてるんだっけ」

「……！」三輪は思わず振り返り、空閑を睨む。「なぜそれを……!？」

空閑が口を開く。しかし三輪の問いに対して、返つてきたのは回答ではなく提案だった。

「仇討ちするなら力貸そうか」

「……!？」

一瞬、理解ができない。近界民が近界民の仇を討つ手伝いをする？

どうということだと、本気でわけがわからなかった。

「おれの相棒が詳しく調べれば、お姉さんを殺したのがどこの国のトリオン兵か、けっこう絞れるかもよ？ どうせやるなら本気でやったほうがいいだろ」

「……」

空閑の話をそこまで聞いて、ようやく意味がわかった——言葉の意味がわかったというよりは、近界民と玄界の民の「近界」への理解の差を認識した。

近界民には「近界民」という集団の括りが存在しないのだ。確かに近界民が「我々は近界民だ」と自称するのは、宇宙人が「我々は宇宙人だ」と自称するのと同じ違和感がある。空閑は「国」と表現したが、

近界民たちの集団的な帰属意識はおそらく「どこの国の人間」かどうかが最大なのだろう。

そんなようなことを三輪は認識する——本来なら理解などしたくもない事実だったが、優秀な三輪の頭脳はそれがわかる。故に、自分の憎しみをどこにぶつけければ良いのかわからなくなる。

「ふざけるな……！」

感情が爆発し、単純な言葉になって噴出する。「お前の力は借りない……！ 近界民は全て敵だ……！」

それは矜持であり、意地であり、誓いであり、弱さだった。それだけ絞り出すと、三輪は空閑の前から去る。

「おい秀次、どこ行くんだ？」

「……会議に出る」

振り向むことなく米屋に答える。酒場がいつになく真剣な表情で自身の背中を見つめていたことに、三輪は気づかなかった。

「そうか……三輪君も復讐心がモチベーションなのか」

三輪が去った後、酒場の独り言が漏れ聞こえて空閑は「？」と彼女の方を見る。

「三輪君『も』って？」

「ああいや……」

酒場は少し困ったように喘ぐが、結局は軽く空閑の問いに答えた。「私もそんな感じだな。まあ別にそんな大したあれじゃないんだが、きっかけはそうなんだ」

「ふうん」

空閑は頷きながら、しかし事前に聞いている情報と何か矛盾が起きているような感覚がして、それが何か考える。酒場は確か今年度の十月に三門に越してきたはずだ。家族が近界民に殺されたとは考えにくい——ああいや、三門に住んでいた親類が殺されたり、三門に持っていた土地や不動産が近界民によって破壊された可能性は考えられるか。あと、三門以外の地域に開いた近界の門によって親しい者に犠牲が出たケースもある。レアケースではあるが、全くありえない可能性ではない。

黙り込んだ空閑に「どうした？」と酒場が声をかける。「ん、大丈夫」と空閑。二人の会話がひと段落したのを見計らって米屋が口を開く。「そーいやオレと白チビは勝負する約束だったよな。ヒマならいつちよバトロウぜ！」

「ほほう、そんな面白そうな約束を取り交わしていたのか」酒場は興味津々の表情で空閑と米屋を見比べる。米屋が笑っているのに対し、空閑は不思議そうな顔をしていた。

「正隊員と訓練生って戦えるんだっけ？ かざま先輩は戦ってくれなかったけど」

「ポイントが動くランク戦は無理だけど、フリーの練習試合ならできるぜ。風間さんはプライド高いからガチのランク戦で戦いたいんだろ」

オレは楽しげりやなんでもいーんだと言いながら米屋は空閑たちを対戦ブースへ急ぎ立てる。陽太郎と雷神丸と酒場も一緒にそちらへ向かった。

第四話 酒場佳子④

1

「あの白チビはさあ、うちの隊四人がかりでの攻撃を一人で凌いだんだよ」

「ふうん。そうなのか」「だから戦ってみたかったんだよなあ」「確かにあいつはかなり強いぞ。なんせ私の後輩だからな」

C級の対戦ブース。

酒場は通信越しに米屋と喋りつつ手元の機械を操作し、彼に対戦を申し込む。空閑とやるはずだった米屋だが、残念ながらその望みは叶わず、なぜか酒場と対戦することになっていた。詳しいことは省くが、空閑はA級隊員緑川駿みどりかわしゅんをボッコボコにした後、修とともに迅に呼ばれて会議に行ってしまったのだ。仕方なしに、なかなか強いと噂の酒場と対戦することにした。

「十本勝負でいいのか?」

米屋が酒場に確認する。酒場がその形式で米屋に勝負を挑んだのだ。「ああ」と酒場。「いつも小南と十本でやっているからな」

「小南に鍛えられてんのか。じゃあ期待できるな」

「逆だ逆。私が小南を鍛えているんだよ」

「へえ。言うじゃん」

お互いに住宅地を模した仮想空間に転送される。転送位置は車道の真ん中。彼我の距離はおよそ三十メートル。酒場の得物はスコープオンで、米屋の得物は弧月(槍)。ともに実力者なのは言うまでもないが、リーチでは圧倒的に米屋が有利。ただ、酒場は既にボーダー内でも屈指のスコープオン使いになっている。

機械音声の「ランク外対戦十本勝負開始」という合図とともに酒場はゆったりと歩いて米屋との距離を詰め始める。米屋は軽く槍を構えて酒場を待った。

スコープオンを使う攻撃手はほぼ例外なくスピード型。どこかで

速度を上げて有利な位置取りを狙うはず——と米屋は読み、的中する。酒場は距離十五メートルほどで右に飛び、民家の塀を踏んで壁に着地し、跳ね返る。そのまま直線的に鋭く飛び込んできると思いきや、踏み台にした民家の塀を使ってふわりと跳躍。切り揉み状に回転しながら空中からスコープピオンを伸ばして米屋の首を狙う。

塀を使った曲線的な動きに対応しそこねた米屋は反撃の機会を逸した。だが酒場の攻撃からは危なげなく身を守る。相手の武装がスコープピオン一本ということでシールドは使わず、身を引いて対応した。間合いを取られて困るのは酒場の方だ。地上に着地すると、またもや高く跳躍するフェイントをかけてから今度は低く斬り込む。このフェイントは米屋には通じず、攻撃の軌道上に槍の反撃が置かれる。酒場は攻撃を断念し、横にすれ違うことで攻撃を躲す。しっかりとコントロール可能なスピードで動いているようだ。

場所が入れ替わり、攻守も逆転する。米屋は高速で槍を突き出し、酒場の急所を連続で狙う。これを酒場は完全に受けきれず左肩を負傷。米屋の間合いから出ようと後退する。そこへ米屋は深く踏み込み、会心の一撃を入れる。右脇に深傷を負う酒場。反撃としてスコープピオンを振るい、米屋の脚を傷つけるも、致命傷には至らずトリオン体の中枢部分を抉られてダウンする。

「やられたあー！」

ブースの黒いベッドにボスンと転送された酒場は、頭を抑えてのたうちまわる。「くそ、強いな。槍相手は戦いにくい……だがもう理解した」

「はっはっは。いーだろ、槍」

笑う米屋だが、内心では予想以上の酒場の実力に驚いていた。これが入隊一ヶ月の隊員の戦闘力か？ 冗談キツイ。既にA級レベルだ。

二戦目、二人は民家を間に挟んだ位置に転送された。米屋は後退しつつ後ろの家の屋根に飛び乗る。すると酒場も米屋の前の民家の屋根に乗った。

お互い横方向に移動しつつ間合いをはかる。この時の主導権は米屋が握っている。得物の差だ。これがどうしても影響する。酒場が

攻撃を食らわせるには、米屋の攻撃を掻い潜って間合いの内側に入る必要があった。

ガキンと刃をがち合わせてぶつかると、屋根という不安定な足場だが、お互いバランスを崩さず、しっかりと刃に体重を乗せている。米屋が一步後退し、二段突きを繰り返すと、酒場は攻撃を嫌って屋根から降りる。米屋も追って屋根から跳ぶ——そこにドンピシャでスコアピオンが投擲された。

「うおっ!？」

完全に反応が遅れたが、構えていた槍が運良くスコアピオンを弾く。「だめか」と酒場が呟いた。リーチの差を強引に潰そうとしたようだ——確かにそれは米屋の意識の外から攻撃できたが、失敗した。

スコアピオンの再生成まで数秒、酒場は丸腰だ。好きに叩ける。着地した米屋は猛然と酒場に突きを入れる——その突きを、酒場は完璧に読んでいた。

身を横にずらし、柄を掴む。米屋の引き手に合わせて力を込め、柄を捻り、米屋から槍を奪う。「トリガー臨時接続」「まじか」米屋はぼやき、距離を取ろうとしたが胸を槍に貫かれる。

投槍。

またしても酒場は武器を飛び道具として扱った。

「米屋ダウン」

機械音声が米屋の敗北を告げる。黒いベッドに落とされた米屋は「くあゝつ」と唸った。悔しそうだが、口元は明らかに笑っている。楽しそうでもあった。

「最後の突きは軽率だったな。焦って飛び込んだしまった」

「そうだな。おかげで大技が決まった」

通信越しに酒場の声が答える。口調こそ冷静だが、声色には隠しきれない嬉しさが乗っていた。

三戦目は米屋の勝ち。順当な経過を辿った順当な勝利のように見えた。酒場は一度も米屋を崩せず敗北した。しかし四戦目は酒場が勝つ。攻防の読み合いを酒場が制し、足で槍を蹴っ飛ばしてスコアピオンを差し込んだ。順当に進めば米屋が有利だが、一つ崩れれば酒場

が勝利をものにする——そんな勝敗の法則が見えてきた。

五戦目はこれまでで最も白熱した攻防の末、酒場が勝った。やはり米屋の間合いの内側に入れたのが大きい。弾幕のような激しい槍の連撃を掻い潜り、脚に一発、次いで腕を斬り落とし、最期の足掻きとして米屋が放った槍の投擲も防ぎ、首を落として勝利した。酒場側も片腕と片手を失った薄氷の勝利だった。

六戦目は米屋が勝った。終始槍の間合いを堅持して、酒場を近づけさせなかった。最後の最後で米屋のフェイントにかかり、酒場は敗北した。米屋はこの戦いを無傷で制したが、「神経使わされてんな」と疲れ気味にぼやいた。

そこから二戦は立て続けに酒場が勝った。屋内戦に持ち込めたのが大きかった。九戦目に米屋が一戦取り返すが、十戦目はまたもや酒場が勝つ。トータルでは六対四となり、酒場の勝利となった。

「負ける気は更々なかったんだがなあ」

対戦ブースから出てきた米屋は、いつものシニカルな笑みを湛えながらそう言った。米屋としては不本意な結果だろうが、酒場の実力を知る小南や空閑などからすれば、むしろ善戦した方だと言うだろう。

「私も負ける気などなかったさ」酒場は胸を張って言う。

「だろうな……。あんた——酒場さん？　ものは相談なんだけど、もう十戦付き合ったりしてくれたりしない？」

「構わないぞ——ああ、ただちょっと待ってくれ。先にちょっと二、三戦、訓練生とランク戦やっていいか？　もうすぐで正隊員に上がれそうなんだ」

2

三浦雄太が対戦ブースに来た時、そこは妙なざわめきに包まれていた。どうしたのだろうかと思いを見渡すと、知り合いを一人発見したので近寄る。

「小荒井君、なんかざわついてるけど何かあったの？」

「三浦先輩！　それがすげーんすよ！」小荒井は興奮した調子で説明

する。「米屋先輩が訓練生とやって負けたんですよ！」

「ええ!?」あの米屋が!? 雄太は驚きを隠せない。米屋陽介といえばA級七位三輪隊のエース攻撃手だ。その実力はボーダーでも屈指である。それが訓練生に敗北した? どんな奇跡が起こった。

「で、その訓練生、ついさつきC級をこぼす抜きしてB級に上がったんです」

「何その人、カナダ人？」

「いや日本人だと思いますけど。いきなりどうしたんですか」

「ごめん、自分でもなんでカナダ人なんて言ったのかわからない……」
「そうですか——まあいいや。あれですあれ。あの人」

小荒井が指差した画面には二つの名前が表示されていた。どうやらこの二人が今五本先取をしているらしい。一方には米屋とある——小荒井は先ほど米屋が負けたと言っていた。では再戦中だろうか。もう一方の名前はなんだろうと視線を移した時、雄太は本日二度目のサプライズを経験した。

——酒場佳子。

「酒場さん!」

酒場さん!? え? ホントにあのクラスメイトの酒場さん!? あの、最初転入して来た時はミステリアスな雰囲気で格好良い感じだったけど英語の時間に dangerous をダンゲロスと読んだことで面白ずっこけキャラが定着した酒場さん!?

「知り合いですか?」

「え、うん。……クラスメイト」

「マジすか!? え、じゃあオレちよつとあの人に挑戦したいんですけど、取り次ぎ頼めます?」

「え……」正直雄太は酒場とあまり接点がない。接点はないが、酒場は誰にも壁を作らず我をぶちまける性格だということを知っている。いきなり話しかけてもまあ大丈夫だろう——というような計算を一瞬行ったら後「いいよ」と言う。

「やった!」

小荒井が喜んでジャンプした直後、酒場と米屋の勝負がつく。勝者

は米屋。五勝四敗という白熱したバトルだった。

「あーくそお！ やられた！」

酒場は髪をわしゃわしゃとかき混ぜながら元氣よくブースから飛び出て来た。「完っ全に裏をかかれた。うあー……」

「いやー、ようやつと決め台詞が言えたわ」と満足そうに言いながら、米屋も隣のブースから出てくる。米屋と言えば「……と、思うじゃん？」というセリフである。これが刺さるシチュエーションが試合の中で到来したらしい。酒場に合わせてオプシヨントリガー「幻踊」を使わない分、通常より裏をかく手数が少ないのが響いていた。

「あの、酒場さーん」

頭を掻き筆りすぎて山姥のような感じになっている酒場に、雄太は遠慮がちに声をかけた。「酒場さん？」

「ん？ お、三浦くん。なんだこんなところで、奇遇だな」

雄太に気づいた酒場は髪の中に手を入れたまま、でも手を動かすのはやめて雄太の方を見た。寸前までものすごく悔しがっていたはずが、今はけろつとしている。

「何か用か？」

「用っていうか……ええと、酒場さんと対戦したいって人がいるんだけど、どうかな？」

「対戦」と酒場は雄太の言葉を繰り返す。「おおいぞいいぞ。やろう。誰だ？」

「オレです！」

小荒井は威勢よく手を挙げた。「小荒井登のぼるって言います！ よろしくつす！」

「よろしくつす」

酒場は真顔で挨拶を返した。

小荒井はスコールピオン一本しか持たない酒場に合わせて孤月一本で挑んだ。五本先取の対戦結果は5―0。圧巻であった。

「めっちゃ強えー！」

「うん。本当に強いね……」雄太は驚愕の感情をもつてうなづく。まさか酒場が——美術の時間に最後の晚餐を描いたのは誰かと聞かれ

て、ベートーベンと答えた酒場さんがこんなに強いなんて。

「酒場先輩、そろそろオレにも稽古つけてよ」と、今度は緑川が酒場に勝負を申し込む。酒場はまた二つ返事で承諾し、お互いにスコープオン一本のみで五本先取。これは5―2で酒場が勝利した。緑川がとつたのは最初の一本と四本目。「うーん、勝てない……」と唸る緑川に、酒場は「お前は速いけどわかりやすんだ」と言葉をかけた。

「もつとフェイントとか緩急つけろってこと？」

「んん、まあそうだな。慣れられたのを見たら裏扱をじゃんじやか切っつけていけ——でもまあ、戦場で会う敵は大体一見さんだから、普通は初見殺し一個覚えていれば良いのだが」

酒場さんが緑川に助言をしている。あの酒場が——返された生物のテストをまじまじと眺めた後、「へえ、カメにも肺つてあるんだな」とかなんとか呟いていた酒場さんが。

「おー！　なんか強え新人がいるとか聞いたから来たけどやっぱ酒ちゃんじゃねーか！」

新たななるキャラクター——もとい新たななるクラスメイトが現れる。向こう側の通路からやって来た仁礼光が、辺り憚らず大声で酒場を呼んだ。

「あれヒカリ、なんだその格好。なんか頭良さそうだな」

「オペレーターの制服だよ。さつきまで仕事してたからさ。早いところジャージになりたくてしよーがねー」

「ほほう、オペレーターの制服か。いいな。私もオペレーターになれはそういう感じになるのか」

「やめとけやめとけオペなんて。こまつちいことしこたま覚えさせられんぞ。アタシでも音をあげかけたし」

「……おいヒカリ」と、それまでずっと光の横で黙っていたギザギザの青年が口を開く。「俺をここまで連れて来たワケをさつさと言え。んでふざけた理由なら帰る」

「あー忘れてた。酒ちゃん、こいつカゲな。ウチの隊長。酒ちゃんこいつと戦ってくれ」

「はア!？」カゲと呼ばれたギザギザの青年——かげうらまさこ影浦雅人は目を見開い

てヒカリを見る。初耳だったらしい。

「ふむ、全然構わないぞ。私は今ノリに乗っているのだ。さあ、どこからでもかかってこい！」

「……オイ、なんだあの変な女は」

「アタシの友達を変な女とか言うな。仕事中に敵が来ねえつまんねえってぼやいてたから連れて来てやったんだよ。心配すんなって、酒ちゃん強いに決まってるから」

「帰る」

「おいちよつと。カーゲつ、おい！」

「なんだって防衛任務明けに模擬戦なんかやんなきゃなんねーんだ。こっちは疲れてんだよ」

そう言つて広間から立ち去ろうとする影浦だったが、酒場が得意げに言い放つたセリフ「なんだ私の実力に恐れをなしたか」を聞いてピタリと動きを止める。

「テメー今なんつった」

『「なんだ私の実力に恐れをなしたか」と言った」

「ふざけてんのか？」

「私はいつだって本気で生きている。で、どうした？ やるのかやらののか」

影浦が酒場を睨むと、酒場はふふんと笑みを浮かべて余裕の表情で影浦を見つめ返す。影浦はふーっと大きなため息を吐くと、気怠げに踵を返して対戦ブースに向かう。

「気が変わった。お望みどおりバラしてやるよ」

3

スコープオンは孤月と比べて、軽くて持ち回りが便利という以外に「自在に刃の形を変えられる」という利点がある。普通の短剣、ナイフとして使うだけでなく、小型の刺又のようにして相手の刃を絡めたり、鞭のように伸ばしたり、腕や足から生やしたりすることが可能な武器なのだ。この特性の理解度——スコープオン一般の熟練度にお

いて、酒場はどうやっても影浦に劣る。

「酒場ダウン」

初戦、伸びる刃によって胸を突かれ、仮想空間から対戦ブースのベッドに投げ落とされる酒場。「……強いな」と静かに呟いた。

一方、対戦相手である影浦は奇妙な感覚に陥って首を捻っていた。

「なんだアイツ……？」

酒場の攻撃には、意志が感じられない。

というのは酒場にやる気がないとかそういう話ではなく、影浦のサイドエフェクトに起因する感想だった。「感情受信体質」と呼ばれる特異な体を持つ影浦は、人の感情の乗った視線を感じる事ができる。つまり戦闘時には、達人が「気配」を察知して敵の攻撃を躲すのと同じようなことができる。攻撃より先に攻撃の感情を感じ取り、的確に防御して反撃。それが影浦の強さの一因なのだ。

しかしこの変な新人は、刃に一切の感情を乗せることなく攻撃を仕掛けてくる。

奇怪だ。そして避けにくいことこの上ない。

「東のオッサンかよ……」などと呟く影浦。ここまで感情を殺した攻撃をしてくる奴なんて東くらいしか知らなかった。のちにもう一人、下手すれば酒場以上に殺戮武人じみた好敵手と出会うことになるのだが、それはまだ少し先の話である。

第二戦が始まると、酒場は一気に影浦との距離を詰めた。スコープオンの扱いとそれによる間合い管理のノウハウで劣るのなら、そもそも間合い管理をしなければ良い、という決断に踏み切ったらしい。超近距離でのブレードによる斬り合いならば酒場の方に一日の長があるのとみたのか。

だがこの試合も影浦が制する。単純な対一の腕前において、影浦はボータートップクラス——いや、ともすれば総合一位の太刀川すら食うかもしれない。戦闘センスが飛び抜けているのだ。

第三戦、酒場はまたもや影浦と距離を詰めて待ったなしの剣戟を繰り広げる。お互い一步も引かず、かと言ってお互い一撃も当たらない不思議な時間が斬り結んでから八秒ほど続いた。埒が明かないと影

浦が一步距離を取ろうとした時、酒場がひゆかかかと片手で短く二段突きを繰り出す。避けようとしてさらに後ろに下がったところに合わせて踏み込む。影浦が小指の腹から出したブレードで横に払うと、酒場はそれを跳んで躲し、空中からスコープオンを投げて影浦の腹を挟った。

「トリオン供給機関破損。影浦ダウン」

「うおおスゲエー！ カゲから一本取った！」

両手を上げてはしゃぐのはブース前の観戦スペースで席に座って大画面を覗いていた光。その横に（なぜか）座らされている雄太も、改めて酒場の強さに目を見張る。まさか影浦ともまともに戦えるとは。「捉えた」

にいつと笑った酒場は続く四戦目、またしても影浦に勝利する。今度はさらに距離を詰め、スコープオンの斬り合いというよりはもはや殴り合いつかみ合いの喧嘩に持ち込んで影浦を転ばし、喉元に刃をブツ刺した。「ヤロウ……！」という影浦の怒りが爆発し、五戦目は影浦が取った。

「にしてもアイツ……」

六戦目も連続して勝利した影浦には、やはり酒場と戦う時に奇妙な感覚があった。攻撃に感情が乗っていないだけではない。なんと言うかこう、普通の攻撃手とは何かが違うのだ。こうやって戦っていると、強いのはわかるが、それ以上に、本職の攻撃手ではないということがうっすらと読み取れてくる。

七戦目、酒場は再びスコープオンの投擲による奇襲を狙うが、影浦はこれに完璧に対応。一点読みが外れ、酒場は敢えなく両断された。影浦の勝ち越しである。この後酒場が大いに悔しがったことは言うまでもない。「ぐおお負けた！ くそお！」とのたうちまわる酒場を見て、雄太は「ああ、確かに酒場さんだ。間違いない」と安堵したという。

「——な、酒ちゃん強かっただろ？」

隊室への帰り道、光はゴキゲンで何度もそう言って影浦の肩を叩いてきた。「いい加減にしろ」と言っても「いやー、あのスコープオン投

げはやばかったわ」などとしみじみ感想を語る始末。いや、確かに一度目、あのタイミングでのスコープオン投擲は完全に意表を突かれたが。

「アイツ、何者だ？」

「アタシのクラスメイトだよ。十月ぐらいに転入してきたんだ」

転入生。ということは三門の出身ではないのか。「どうした？ 興味出たか？」と嬉しそうに追求してくる光を押し返し「ちげーよ」と言う。そう言いながら、しかし向こうが挑んでくるのならば受けて立ってやるのもやぶさかではない——影浦はそう思っていた。

第五話 酒場佳子⑤

1

ボーダー本部内、ちよつとした売店もあるラウンジで「空閑！ 三雲！」と人目を憚らず大声で呼びかけてくるのは案の定、酒場だった。それを見た忍田本部長は「じゃ、私はこれで。今日はどうもありがとう」と言つて立ち去る。忍田とすれ違つて修たちの方に歩み寄つて来た酒場は、忍田の背中を不思議そうに眺めながら「あれは誰だ？」と二人に訊いた。

「シノダさんだよ。本部長の」

「しのだ……？ あああれか、入隊式の時に演説してた」

忍田本部長の顔が頭に入っていなかったのかこの人は——と、修は頬に冷や汗をかく。大物なのか、馬鹿なのか。多分馬鹿なんだろう。

「ほう。で、本部長さんとなんの話をしていたんだ？」

「おれを正隊員にしてあげてもいいよって話」

「ほほう!? じゃあ空閑もトリガーフル装備で戦えるようになるな！」

酒場は目を輝かせる。「空閑『も』ってどういうことですか？」と修が訊くと酒場は「ふふふ」と謎の笑みを浮かべ、じゃじゃーんと得意げに右手の甲を二人に見せた。そこには武器ポイントが表示されている。

「4043……!? 先輩、正隊員に上がったんですか!？」

「そうだ。これでようやく本気の小南とも戦えるようになる」

「おお、やるなさけちゃん先輩」

「ふはははは。しかも聞いて驚け、私はただ正隊員に上がっただけじゃないぞ。勢いそのまま、正隊員連中を蹴散らしてやったのだ」

「本当ですか？ すごいじゃないですか!」

「そうだろうそうだろう。褒めろ。もつと私を褒めろ」

影浦に惨敗したという事実は後輩二人には伏せておく。「部分的に

嘘だな」と空閑にはバレているのだが、酒場には知る由もない。

「よねや先輩とも戦ったの?」

「ん? おう、勿論。あいつ滅茶苦茶強かったぞ」

酒場が今日戦った者の中で、酒場に勝ち越したのは米屋と影浦の二人だ。米屋の実力の高さが窺える。

「槍相手に剣で挑むのは昔から苦手なんだよ。まだ克服できてなかったな」

槍術士なんかと試合でもしたことがあるのだろうかなんて修は想像する。剣と槍が向き合えば、普通は槍が勝つだろうとは思うが。剣道三倍段なんて言葉もあるし。

「はー疲れた。ちよっと飲み物買ってくる。あそこは安いか?」酒場は向こうにある紙コップ型型の飲み物を出す自販機を指差して言った。

「あ、はい。飲み物買うにしても普通の自販機より安いです」

修からそう教えられた酒場は「なら、使わない手はないな」と言わずに歩いていく。

「さげちゃん先輩、おれが正隊員に上がったって勘違いしてるな」空閑は酒場の後ろ姿を見ながら言った。

「ああ。あとで訂正しないと……」

そのうち酒場は右手に紙コップ、左手になぜかカップラーメンの容器を抱えて戻って来た。「おいカップ麺が売ってたぞ」と嬉しそうである。「給湯室どこだ?」

「あつちの角ですね」「どこ」修の指差した方に視線を向ける酒場だが、見つけられないようで、キョロキョロと首を動かす。確かにこの給湯スペースは柱の影になっているので少々見つけにくい。

「あそこです。あの、今訓練生の子が出て来た……案内しましょうか?」

「頼む」酒場はうなずいた。

「空閑も一緒に行くか?」

「いや、おれはここにいろよ」空閑はちゅーつとカップからストローでジュースを吸いつつ、ひらひらと手を振った。

「そうか。じゃあ先輩、あっちです」

「よしきた」

修と酒場の後ろ姿を眺めながら、ストローから口を離す空閑。

「……シノダさん、なんであんな足早に立ち去ったんだろうな」

『サカバを避けた風に見えたが』

耳元までマイクを伸ばしたレプリカがそう答える。

「やっぱりそう見えたか？」

『確信は持てないが、その可能性が高い』

「なんでさげちゃん先輩を避けたんだろ……」

『サカバはシノダを知らなかったようだ』

「うん。あれはホントだった。だからシノダさんがさげちゃん先輩を避けたって予想が正しいとすれば、シノダさんが一方的にさげちゃん先輩を知っていたってことになるな」

本部長が一訓練生の顔を覚えていて、かつ、避けた。不可解だ。釈然としない。酒場の方が忍田に何らかの苦手意識を持っていて、対面するのを恐れているというのならわかるが、この場合は逆である。ぱつと理由が思いつかない。

「さげちゃん先輩って何者なんだろうな」

『素人ではない、というのは明白だ』

酒場の剣術は一朝一夕で身に付いたものではない。あれは長い年月をかけて積み上げた実力だ。少なくとも空閑と同じか、それ以上に年季が入っている。

酒場は今、修の横に立ってウキウキでカップラーメンにお湯を注いでいた。その後ろ姿からは、空閑を凌ぐ実力者の面影など見えない。酒場はお湯を注ぎ終わって、カップを慎重に持ち上げる。こちらを振り返ると空閑の視線に気づいたのか、彼女は悪戯坊主のように笑った。

「サンキューだ三雲。案内してくれた礼に、一口わけてやる」

酒場は空閑の座っている席へ帰る道のり、修の方を向いてそんなことを言った。

「え？ いや、大丈夫です」

「遠慮するな。うまいぞ」

「いや……ええと」

困る修。だがこの前のコーラの一件を思い出して、遠慮するとまた面倒臭いことになりそうだと思い直す。「……じゃあ、いただきます」三分経つなり、酒場は割り箸を割って修に渡して来る。修はそれを受け取り、カップの汁に先端を浸した。

「二口だぞ、一口」

不安げに横から言ってくる酒場。あんまり多く食べられるのが嫌らしい——器が小さかった。修はゆっくりとカップ麺特有のちぢれ麺を持ち上げる。いい匂いがする。小腹が空く時間帯だったのもあり、修の目にはそれがとても美味しそうに映った。ずるずると麺をすする。何のひねりもない醤油味。久しぶりに食べたカップラーメンだったが、うん、ちゃんとうまい。空閑と酒場にじつと見られるのが気になったが、まあ味がわからなくなるほどのプレッシャーではない。

「ご馳走様です」

「よー」

修から容器と箸を譲られた酒場は「いただきます」と言うなり、待ってましたとそれにありつく。良い食べっぷりだった。もしカップラーメンをどれだけ美味しそうに食べられるかの大会なんかが開かれたら上位入賞間違いないだろう。まあまあな美形だし、CM起用されるかもしれない。

「……それ、うまい？」

耐えきれなくなつて空閑が酒場に訊いた。酒場は麺をすすりながら頷く。そして汁をすすずと飲み、「はあ」と満足げにため息をつく。

「おれも買おうかな」

空閑は席を立った。美味しそうな匂いに釣られたのだ。「かつぶらーめん」なるものが果たしてどんな味なのか気になつて仕方がな

い。

「作り方はわかるか？」修が訊く。

「んー、多分。お湯を入れるんだよな」「そうだ。カップの内側に薄く線が引いてあるから、そこまでお湯を入れたら蓋を閉じるんだ」

「そして三分待てば出来上がりだ」

口にあるものを飲み込んだ酒場が言った。容器の中の麺はあらかた食べ尽くしてしまったようだ。あとは汁が残るのみ。酒場はぐびぐびと汁を飲む。

「しよっぱくはないですか？」

修は少し心配そうに言った。

「うん。しかしなんか残すの勿体ないと思ってしまっただなあ、これが」

あらかた飲み干した酒場は軽くなった容器をテーブルに置き、横に置いていたほうじ茶を飲む。

「あーうまかった。やっぱ久々に食うカップ麺は格別だな」

「久々って、いつ以来なんですか？」

「そうだな……半年ぶりか？ あ、いや、引越してきた日の昼飯がカップ麺だった。とすると二ヶ月ぶりぐらいか」

「……酒場先輩って、前は東京に住んでたんですよね」

「ああ。東京と言ってもあれだがな、八王子の方がだ」

八王子の方と言われても、東京に住んだことのない修からすればいまひとつピンと来ない。「田舎の方ってことですか？」

「田舎ではあるが……それだけでもない。微妙なレベルの都会がまあまあ大きい駅ごとにあるというか——んん、『地方』と言うのが一番イメージ通りか？」

「地方……ですか」

「そう。地方都市」

東京なのに地方都市。よくわからない。

「正確にはあれだ。私が住んでいたのは日野だ。立川と八王子の間だな。のんびりしたところだった」

「そうですか」と頷く修。「日野」という地名は聞いたことがあった。

たしか新撰組のなんちゃらに縁があるとかで……。

「長く家を空ける時期もあったが、やっぱりあそこが私の地元という感覚だな」

「長く家を……。それはまたどうしてです？」

「んー？ んー……。秘密だ」

酒場は悪く笑って言った。立ち入ってはいけない話題に触れてしまったかと修はドキリとする。そうこうするうちに空閑が戻って来た。

「こんな感じでいいの？」

空閑は両手で抱えたカップ麺の容器を二人に見せる。中にはちやんとお湯が入っているらしい。

「おう。大丈夫だ。あとは三分待て」

「……」

空閑は何か言いたげな視線で酒場を見上げる。それに気づいた彼女が「どうした？」と問うた。

「さげちゃん先輩ってさ」と、口に出す空閑。いつそ「近界民ですか」なんて訊いてみようと思ったのだ。嘘を見抜くサイドエフェクトを持つ空閑ならば、それだけで酒場の正体がわかるところだ。

だが、酒場の眼を見つめているうちに馬鹿らしくなった。何となく、彼女は近界民ではないだろうなと瞬間的に思い直した。

「やっぱなんでもない」と空閑は言う。「なんだおい、気になるじゃないか」と突っ込んでくる酒場だったが、空閑はうまく誤魔化した。

3

「正隊員昇格おめでと〜！」

玉狛の三階。

宇佐美がぱーんとクラッカーを鳴らして酒場の昇進を祝った。それに続いて修、遊真、千佳もぱぱーんとクラッカーを鳴らす。色とりどりのテープが空中を舞った。

「さげちゃん先輩おめでと〜！」

「おめでとうございます！」

「おめでとうございます酒場先輩！」

皆口々におめでとうと酒場に声をかける。部屋に入ってきた瞬間クラッカーを浴びた酒場は、最初仰天した顔になって硬直していたが、状況を理解するに連れてはあつと笑顔になり、「おおお！ ありがとう！」と年下三人＋宇佐美に抱きついた。

その場には京介、小南、レイジもいたが、クラッカーは持っていなかった。宇佐美がケーキ屋までケーキを買いにいったついでにレジ横で売っているのが目に止まり、衝動買いたしたパーティーグッズなのが、レジ横には四つ入りのがあと一袋しか売ってなかったのだ。

「入隊後四日で正隊員は最速記録だろうな」

「順当じゃないすか？ 最近の小南先輩にも勝ち越してますし」

「勝ち越してないから！ 全然互角だし！ いやむしろあたしの方が白星多いしー！」

「ほほう？ 嘘はよくないぞ小南。昨日も最終的に私が勝ち越した」

「昨日『は』でしょ！ 一昨日はあたしのが勝ってるから！」

「……（汗）」

「はいはい、どっちが強いかは後で模擬戦やって決めてね。今はケーキ食べよう！ ケーキ！」

「しおりちゃん おれこれがいい」

「待て陽太郎！ 今宵の主演は私だ！ 私が先に選ぶ！」

「……（汗）」

「ふむ、この『めん』みたいなのに白い粉が乗ってるのは何だ？ しよっぱいの？」

「それはね遊真くん、麺じゃないよ。モンブランって言って……」

「ああああ陽太郎！ それ取るな！ ショートケーキは私の！ ちよ待……いちご食べんな！」

「……（汗）」

いつも通りの賑やかさをもって、酒場の昇進祝いはつつがなく進行していく。わいわいがやが言いながらケーキを食べた後、小南が「佳子！ 勝負よ！」と酒場に果し状を叩きつけるように言う。陽太

郎にいちごを先に食べられて、どことなくしなびていた酒場だったが、それを聞いて口角がにいつとつり上がり、腰に手をあてて胸をはって堂々たる口ぶりだ。

「いいだろうー！」と言い切った。

「さげちゃん先輩、おれも挑戦させてもらえる？」

「もちろんだ。私は誰の挑戦でも受けるからな！」

「挑戦って、あたしが格下みたいな言い方しないでくれる!？」

酒場たちが立ち上がると慌てて宇佐美も立ち上がる。「まってまって。その前にトリガーセットしなくちゃ」

「トリガーセット？ ああそうか。いよいよ訓練用から卒業というわけだ」

酒場はポケットからトリガーを取り出してまじまじと見る。「これにも世話になったな……」なんて、感慨深く呟いた。

「いいなーさげちゃん先輩。もう正規のトリガーか」

「お前はもつとずるいの持つてるじゃないか。ていうかなんでそんな強いトリガーを持つてるんだよ空閑。前々から気になっていたが、お前何者だ？」

酒場がそう言った時、にぎやかだった部屋の空気が止まった。

少しの静寂。

「……あれ？ 酒場先輩、聞いてないんですか？」と京介が言った。

「え？ うん。なんだ、みんなは知っているのか？」

一同は互いに顔を見合わせる。どうやら酒場以外はみんな空閑の事情を知っているらしい。その時レイジが何か言おうと口を開いたのだが、それより早く空閑が「さげちゃん先輩、おれが近界民だって言っただけだったっけ？」と酒場に訊く。

少しの沈黙の後、酒場は「え？」とだけ驚きの声を小さく漏らす。

「おいおい冗談はやめてくれ。近界民ってお前、あれだろう？ あの怪獣みたいなやつだろう？」

「いやいや、あれはトリオン兵。兵器。門の向こうに住んでいるのは普通に人間だよ」

「……え？ そうなのか？」

酒場はきよとんとした顔で皆を見渡す。空閑たちはむしろなぜ酒場がこんな当たり前のことも知らないのだろうかといった表情で首を傾げていた。

「もしかして、誰も酒場先輩に説明してなかったんですか？」

「ふむ。そうだったのか」

「いやでもその辺の事情はふつう正隊員に上がってから知るものでしょ。佳子が知らなかったのは驚きだけ」

「そうだよ。わたししてつきり誰かが教えてくれてたんだらうって思ってたんだけど——うわあごめんね酒ちゃん！ 説明しとくべきだったね！」

あわわわという効果音を発しながら宇佐美は部屋の角からホワイトボードを引っ張ってくる。慌てすぎて、ソファの角にボードがぶつかって倒れかかる。「うわあっ!」——皆、咄嗟に宇佐美を助けようとするが間に合わない。その場にいた誰もが、まもなくやってくるガシャンという騒音に備えたのだが、不思議になことにホワイトボードは倒れなかった。

それは迅の手によって支えられていた。

「迅さん！」

「迅さんありがとう……！」

「間一髪だったな」と笑いながら、迅はボードを立て直す。そして周りを見渡した。

「迅、あんたどこ行ってたのよ。みんなもうケーキ食べ終わっちゃったわよ」

「迅さんとボスのは冷蔵庫にありますよ。今食べます？」

「おー、サンキュー。けど今はいいや。酒場さんがどんなトリガーの構成にするか興味あるからね」

「なに、もしかして迅も佳子と対戦希望？ だったらあたしと遊まの次だからね」

「安心しろ迅さん。順番はすぐやってくる」

「待つて待つて、まず近界民の説明とかした方が良くない？」

宇佐美が提案するが、迅は「うーん」と首を捻った後、「まあ、それ

はまた今度にしよう」と言った。

「さ、行こうぜ」

酒場と宇佐美、そして小南と空閑を連れ立って部屋を出ていく迅。そんな彼の後ろ姿を眺めながら、修が呟く。

「迅さん、なんか変じゃなかったですか？」

それに京介が「ああ」と頷いた。

「迅さん、なんか隠してるな」

「……」

レイジは部屋の出口と京介たちを見比べてため息を吐く。

「……まあ、迅のやることだ。何か意図するものがあるんだろう」

4

酒場先輩は何者なのだろう。

整った容姿、独特の喋り方、浮世離れた印象に反して意外に俗っぽく、ジャンクフードなんかを好んで食べる。そういった見かけや性格の影に、修の知らない何かが見え隠れするのだ。

空閑をも超える剣の腕は、本当にただ父親から剣術を教わって培ったものなのだろうか。

一体なぜ、酒場はつい先ほどまで空閑の正体を知らなかったのだろうか。

彼女について思考する時、そこには常にいくつかの謎が付き纏う。その謎を明らかにすべく、玉狛の地下室に降りて迅に尋ねようとしていた。

迅のいる地下室へ続く階段を降りていると、空閑と迅が何やら会話しているのが漏れ聞こえてくる。

「さげちゃん先輩って何者なの？」

空閑が迅にそう問うたのは小南と酒場が一对一をやっている最中、宇佐美がトイレで席を立ったタイミングだった。修は地下室に入らず、扉の裏にそっと近づいて二人の会話を盗み聞く。いや、別にこんなことする気などなかったのだが、迅と空閑の醸し出す刺すような雰

囲気が、修を中へ立ち入らせるのを躊躇させたのだ。

「明らかに素人じゃないよね。強すぎるし」

「お父さんから剣術を習ったって訊いてないか？」

迅は答えを口にせず、逆に空閑に問う。

「しおりちゃんからは聞いた。けど本人の口からは聞いてない」

「……鋭いね」迅は苦笑する。

「迅さんはなんか知ってるんでしょ？」

迅は何も答えない。表情は笑っているが、内心ではあることについてひどく悩んでいた。空閑には嘘を見抜くサイドエフェクトがある。煙に巻くのは本来とても難しい。

迅は困ったように頭をかく。

「ん〜……。おれとしては、なるべくみんなを巻き込みたくないんだよね。秘密を共有するってことは、重荷を背負わせるってことだから」

「仲間を完全に信頼できないまま大規模侵攻を迎えるのも、それはそれでリスクだと思うけど」

空閑は酒場先輩を信頼しきれていないのか……？ 修は驚く。普段の様子を見ていると、空閑は小南と並んで特に酒場と仲が良いはずだが。

「さげちゃん先輩は味方なんだよね？」

もっとはつきりした質問を空閑が迅にぶつける。それに対する迅の反応はなんだかあまり要領を得ないものだった。「んん〜……」と、言葉になりきれしていないものを漏らす。

酒場は良い先輩だ。

いや、面倒臭い感じで絡んでくるのは正直嫌だし、腕は立つがどこか頼りない先輩だとも思っている。しかし彼女はれっきとした玉豹のメンバーだ。仲間だ。

……仲間じゃないのか？

「敵なの？」

空閑が訊く。迅は少しの沈黙の後、「少なくともこの大規模侵攻では、彼女はボーダーの隊員として動いてくれる」と答えた。

「ふむ。大規模侵攻『では』——か」

空閑と同じ場所に、修も引つ掛かりを覚えた。まるでその後は敵にまわると言わんばかりの口調ではないか。

「ねえ迅さん——」空閑が訊く。「——さげちゃん先輩って何者なの?」先ほどと同じ質問をする。やめろ、答えなくてかまわないと修は願うが、迅は観念したように口を開く。「酒場さんは——」やめてくれ、頼む。何も言わないでくれ。

修はそこから動くことができない。部屋に踏み込むことができなかった。どうにか逃げず、その場にとどまるだけで精一杯だった。

「酒場さんは密偵だよ」

迅が言った。

言ってしまった。

「彼女はこちらの世界のどこかの組織からボーダーに送り込まれた諜報員だ」

静寂が辺りを包む。

小南と酒場の戦う音が、はるか遠い場所にある気がした。

言うまでもないことだが、ボーダーの武器は通常の兵器とは比べものにならないほど高性能だ。銃型トリガーや剣型トリガーはもちろん、トリオン体、トリオン兵、内部通信、緊急脱出システム、グラスホッパー、カメレオン、テレポーター……。どれをとっても現代の戦争に決定的な革新をもたらすには十分すぎる。界境防衛機関ボーダーは世界中の軍事組織にとって、垂涎もののオーバーテクノロジーが詰まった夢の武器庫なのだ。幾人も諜報員がボーダー内部への潜入を試みている。

酒場もその一人だった。

「……」

空閑もしばらく沈黙していたが、やがてぽつりと疑問を口にする。

「どうして密偵だってわかってるのに捕まえないの?」

「最初はすぐボーダーから追い出そうと思ったんだけどね」迅は既に笑みを表情から消していた。「酒場さんは今回の大規模侵攻で素晴らしい働きを見せてくれる——おれのサイドエフェクトがそう言った

んだ」

酒場は長期的なスパンの潜入を試みているらしい。だからこそボーダーに入つてまもない頃は諜報活動を本格的に行わず、ボーダーの信頼を得るために精力的に仕事を果たす。少なくとも大規模侵攻までは、酒場は真面目にボーダー隊員として働くことが迅にはわかっていた。

予知——未来視のサイドエフェクト。

彼女を入隊させておけば、大規模侵攻での被害がぐつと抑えられる。だから迅は酒場をボーダーに入隊させた。

「彼女は戦力としてこの上なく優秀だ。だから現状、まだ泳がせている」

「でも、ずっとそうしとくわけにはいかないでしょ」

「ああ。だから今回の大規模侵攻が終わったら、酒場さんには記憶封印措置をかけてボーダーから放逐する。それが城戸さんたちの最大の譲歩だった」

城戸としては、どれだけ追っ払っても後から後からやってくる各国各組織からのスパイ連中への見せしめとして今回の件を使おうとも思っているようだ。酒場へかけられる処分は相当重いものになるだろう。

「まあ安心してくれよ。いざと言う時はおれが……」

迅は入り口の方を見て喋るのをやめる。空閑は迅が突然止まったのを不思議に思い、迅の視線の先を見ようと振り返った。

そこには修が立っていた。

「……オサム」

修は深刻な表情をしていた。今にも倒れそうな風体だが、どうにか崩れ落ちず、姿勢を保っているといった感じだ。「……迅さん」修は口を開く。

「酒場先輩は敵なんですか？」

修は尋ねた。

酒場のあの態度は演技なのか？

さつき酒場が、クラッカーを鳴らした修たちに抱きついて言った

「ありがとう」は、嘘だったのか？

それを——それを全部迅はわかっていたのか？

「酒場さんは敵だ」

迅は言い切った。

「最後はおれが斬る」

第六話 酒場佳子⑥

1

「あれ？ 修くんも模擬戦希望？」

宇佐美が戻ってきたことで、修たちはそれ以上の会話を断念する。

「いや、僕は……」何か言い訳をしなければいけないと思うのだが、咄嗟に言葉が出てこない。頭がまだぐわんぐわんと衝撃を受けていて、ちやんと働いていないのだ。

「いや、オサムは見物だつて」と横から空閑がフォローした。「そうなんだ。じゃ一緒にお茶飲みながら観戦しよう」

宇佐美はキラーンと目元を光らせ、机の下からポットと湯飲み茶碗を取り出す。トクトクトクとお茶が湯呑みに注がれている間、訓練室の扉が開いて酒場と小南が出てきた。小南は露骨に嬉しそうで、酒場は露骨に悔しそうだった。

「まあ私が本気を出せばこんなもんね」

「……くそう」

モニターの表示には勝敗の数が出ており、そこには7―3とあった。これまでのような孤月一本とスコープオン一本の勝負ではなく、シールドやサブのトリガーも解禁した装備で勝負をすると、酒場と小南ではこのような結果になるらしい。

「でも小南は双月使ってるんだろ？ 通常トリガーで三本引けるんなら十分でしょ」

迅が言った。彼の表情にはいつもの薄い笑みが戻っている。

「そうだそうだ。なんだあのハルバードみたいな武器は。受け太刀のしようがないじゃないか」

「ぐっ、仕方ないでしょ！ あれが一番使い慣れてるんだから」

「ええ……小南、コネクター使ったの……？」

宇佐美が若干身を引く。小南の専用トリガー「コネクター接続器」は、メインとサブに搭載した双月(斧)を一つの大きな戦斧に合体させる代物だ。

その破壊力は黒トリガーを除けば、ボーダーのトリガーの中で最大である。

「あとあれ……炸裂弾メテオラだったか？ あれ強いな。避けにくいっただりゃしない」

「酒ちゃんも弾トリガー装備する？」

宇佐美が訊くと、酒場は「んん？」と声をあげつつ振り返る。「弾トリガー……？」

「うん」

酒場は顎に手を当ててしばし沈黙する。「……じゃあ、ちよつとだけ使ってみようかな」

「オツケー。どんなのがいい？」と言ってもまず説明が先か。えっとね、弾のトリガーはいま小南が使ってたような、四角いキューブを出してそれを割って射出するタイプと、銃の形をしたトリガーからずただだつて弾を撃ち出すタイプがあるんだ。どっちにする？」

酒場は少し悩んだ後、「とりあえず全部試させてくれ」

「りようかい。弾の種類もいろいろあるんだけど——最初は通常弾アステロイドにしとこうか」

宇佐美が酒場のトリガーをカスタマイズしている間、修は酒場を観察する。彼女はいつもと全く変わらず、美しき風貌で宇佐美の手元の作業を見ていた。そのうちに修の視線に気づき、「おうどーした」と声をかける。

「いや、別に……」と躲す修。特には怪しまれなかったようで、酒場は「そうか」と言つて視線を宇佐美に戻した。

「はい完成！ 試してみて！」

宇佐美から手渡されたトリガーを「ありがとう」と言つて受け取った酒場は訓練室に入っていく。小南もなんとなくついていった。

訓練室の内部は先ほどまで格ゲーのトレーニングモードのような殺風景な仮想空間だったが、今はよきよきと人型的の三つ、二〇メートルほど離れた位置に生えていた。宇佐美が気を利かせてくれたようだ。

『じゃあまずは射手トリガー——キューブを出すトリガーから』

「オーケー」

宇佐美のアナウンスに従って、酒場は手元に白いキューブを展開する。本当の初心者はキューブの展開の時点で苦労することもあるのだが、スコープピオンを手元に出すのと同じ感覚をイメージした酒場は、難なくこの段階をクリアできた。

まあまあ大きいキューブが酒場の手元に出現する。

『じゃあそれを割ってみて』

「割る……こうか？」

ここでもイメージの操作によって酒場はキューブを8つに分割する。パツクリと割れたキューブは、ふわふわと酒場の手元の周りを漂う。

「どうやれば射てるんだ？」

「それを的にぶつける想像をすればいいのよ」小南がアドバイスした。酒場は「ふむ」とうなずき、その通りにしてみる。すると漂っていただけのキューブが矢のように発射され、的のある方向に飛んでいった。

だあん到着弾。しかしまともに的中したのは一発のみで、その一発を食らったものは平然としている。残りの弾は全部七十メートルほど先の訓練室の壁に衝突し、微かな傷を残す。

「難しいな……それにしても威力低すぎないか？」

「威力調節がうまくいってないのよ。射程に振りすぎ。このトリガーは威力、射程、弾速を任意で調整できるの」

「そうなのか」

今度は威力30、射程40、弾速30にちゃんと調節して弾を射ってみる。一度目で慣れたのか一つの的に全射的中した。的は粉々になった。

『おおすごい』

「へえ、結構やるじゃない」

小南と宇佐美からお褒めの言葉をもらい、酒場は嬉しがる。「いやあ、やっぱり私天才だからな」

「はいはい。じゃあ次、アサルトライフル突撃銃型出して」

酒場は手元に突撃銃を横したトリガーを生成する。当然だがこちらは空中に浮かんだりせず、ずしりと重い。それを両手で抱えた酒場は、ゆったりとした動作で銃口を的の方に向ける。

『安全装置を外して引き金を引いたら撃てるよ』
「了解」

酒場は顔を傾けて安全装置の位置と項目を見る。SAFEとASTEROIDの二項目があったので、ASTEROIDに切り替えると改めて狙いをつけて引き金を引いた。ズガガツ、ズガガガツと弾が発射され、右から二番目の的の肩あたりにピンポン球ほどの風穴が空いた。的の真ん中からは程遠いが、当たりは当たりである。

「おお、強い」

酒場はすぐに撃つのをやめて呟いた。

「これ、弾は重力に左右されないのか？」

「そうよ」

「弾はトリオンが切れるまで射ち放題？」

「そうね」

「すごいな」

酒場は感動しているようだった。

最後は拳銃型の試し撃ち。酒場が拳銃型のトリガーを起動すると、腰にホルスターごと自動拳銃が生成された。

「なるほど、こうなるわけか。ガンマンごっこできるな」

酒場は仕舞われている銃のグリップに手を近づけ、小南ににやりと笑いかける。銃を抜くと、一通り自動拳銃の握り心地を確かめた。その後右手だけで構えると、的に狙いをつけて一発撃つ。

弾は的を全く傷付けず通過し、はるか彼方で大気と反応して消滅した。「大外れ」と小南が揶揄する。「ふん」と酒場は言い、今度は両手持ちでもう少し慎重に狙いを定め、二発続けて撃った。

一応、的中する。今度は人型の下半身——人間で言う腿のあたりがバコンと砕けた。

「ふむ……。なかなかだな」

「何が『なかなかだな』よ」酒場の頭をぺしりと叩く小南。「中心から

外れすぎじゃない」

「大丈夫だ。問題ない」

酒場は動じずにうんうんとうなずく。『もっと近くで撃つてみれば？』と宇佐美が提案するが、「いや、いい。大体わかった」と辞退する。

「この最大射程は何メートルだ？」

「最大射程？ 有効射程は二七メートルくらいだけど……酒場さんのトリオン量なら、最大射程は大体四〇メートルだね」

「そうか……で、ちゃんと弾がまっすぐ飛んで、なおかつ再装填がいらない……」

何やらぶつぶつ呟いていた酒場だが、急に顔をあげると「拳銃型だな。これを入れてくれ」と言った。

「オーケー」と言った後、宇佐美はなんとなく酒場が撃った弾の弾道を解析する。これからの上達のため、記録をつけてあげようと思ったのだ。

射手トリガーの軌道はとても良い。ほどよく弾をバラし、的をバラバラに粉碎している。突撃銃型の扱いも中々のものだった。的の中心からは外れるたものの、最初からちゃんと当てている。拳銃型の扱いが一番苦手なようだが、あれはスコープピオンと相性が良いし、スコープピオンをメインで扱うなら問題ないだろう。

「……あれ？」

弾道の記録を見ていて、宇佐美は首を傾げる。

「どうかしました？ 宇佐美先輩」

「いや、偶然だと思っただけ——」

「さて宇佐美、トリガーのカスタマイズを頼む」

訓練室から出てきた酒場が宇佐美の前にトリガーを置いた。「あ、うん」と頷く。修の方をちらりと見るが、彼は酒場の方を向いていて、宇佐美に何かを尋ねたことなど忘れてしまったようだった。まあいいや、今はカスタマイズを優先しよう、このことはまたあとで話そうと宇佐美は思い直し、手元の作業に移った。

突撃銃の弾によってできたピンポン球くらいの穴を、拳銃の初弾が通過しているなんて——珍しいが、どうせ偶然だ。最優先で報告すべ

きこことではない。

2

三門市の一角——警戒区域ギリギリの場所にある集合住宅。

二〇一号室の扉を開けつつ「ただいま」と機械的な言葉を口にした酒場は、奥の部屋から漏れ聞こえる会話のようなノイズに気づき、勝手に閉まるものと放置していた扉の取手に手をかけて、そつと閉める。靴を脱ぐ時も音を立てず、気配を殺すようにして廊下を進み、靴を自分の部屋に置くと洗面所へ移動する。

「ええ……はい……。得られているのは一般に公開されているレベルのものだけです。はい……まだ待ちましょう……はい」

居間から聞こえてくる会話の断片。会話が一人分しか聞こえないし気配も一人分しか感じないのでおそらくこれは通信だ。そんな風に予想しながら手を洗った後、がらがらぺつとうがいをして洗面所を出る。酒場が居間の扉を開けた頃には、会話はもう終わっていた。

「おかえり」

窓のそばに立つ長身の女性は小型の通信機器をポケットにしまいつつ、酒場の方を振り向いてにこりと笑った。髪型は酒場と同じ黒髪のショートで、それなりの美人だが、顔つきは似ても似つかない。酒場のような堅い雰囲気はこちらにはなく、慈愛に満ちた優しい雰囲気がある。

「ただいま、『お母さん』」

酒場は再び挨拶をすると、それほど大きくないテレビ画面の前に置かれた、黄色い座布団に腰を落ち着ける。

「どうだった、今日は」

酒場が「お母さん」と呼んだ女性は酒場の横に移動した。

「今日は正式なトリガーをもらった」と、酒場は懐からトリガーを取り出して長身の女性に見せる。

「へえ……訓練用のはどう違うの?」

「『貸してみろ』とは言わないのか」

「私が手に取ったところで解析などできないでしょう。ボーダーのテクノロジーは未知そのものだから……で？ やっぱり訓練用の物より実用的なの？」

「ああ。複数個のトリガーが内蔵されている……。今日、シールドを初めて使った」

「シールド？」

「任意の場所に瞬時に展開できる盾だ。ある程度までの攻撃ならこれで防げる」

「へえ。相変わらず夢のような性能の武器だね。他には？」

「……」

酒場はそこで沈黙する。何か、口にしづらいものがあるというような雰囲気だった。

「どうしたの。何か問題でもあった？」

「……銃を……」小さな声で呟くが、聞こえない。

「？」

「銃型、トリガーを、入れてもらった」

酒場はためらいがちに言った。目を俯かせているが、時折ちらりと

「お母さん」の反応を盗み見る。

「銃は使わない約束でしょ」

「お母さん」の目が冷たい色に変わる。彼女は酒場の横でゆっくりと立ち上がった。

「……ああ」

「言ったはずだよ。剣ならいい、熟練していてもなんとでも誤魔化せる。でも銃はダメ。この国で、銃を扱える人間は目立つ。絶対に怪しまれる——特にあなたは」

「……」

「使ったの？」

「……試しに数発撃った」

「お母さん」が酒場の腹に横から蹴りを入れる。鋭い蹴りだった。酒場は軽く横に吹っ飛ぶ。「うっ——」と口を押さえ、逆流するものを胃に戻そうとする。しかし結局は吐き出してしまった。

「あなた、馬鹿だよね」

「お母さん」が言った。

「自分の立場わかってないでしょ。本来だったら去年の大失敗で処分されている身なんだよ？ この任務で芳しい成果を上げられなければ、いよいよ私も庇いきれなくなる。もう失敗できないんだからね？」

這いつくばって苦しんでいる酒場を見下ろしながら「お母さん」は言った。

「……」

「ねえ聞いているの？」と「お母さん」は座布団に座り直し、酒場の腿に手を乗せる。酒場は無言で頭を縦に振った。

「新たな情報は何か掴んだ？ 別に軍事技術に限ったことじゃなくていいんだよ。組織の内情とか……近界民のこととか」

「……近々、大規模な、近界民の侵攻がある、らしい」

「それは知ってる。普通にボーダーが注意報出してるから。他にはないの？」

「………ない」

酒場は腹部を押さえながら、弱々しい声で、それでもはつきりと「何も、ない」と言った。

彼女は倒れている間、己の吐瀉物をじっと見つめていた。

「お母さん」はつまらなそうに「ふうん、そう……まあ、まだいいかと呟く。

「少なくともその大規模侵攻まではきっちりボーダーとして振る舞ってね。頑張つて地球を守って、信頼と実績を積むの。トリガーの強奪とか、ハッキングとかはやるとしてもその後だね。わかった？」

「………わかった」

酒場の返答を聞いてうんうんと頷いた「お母さん」は、ぱつと明るい表情になって言う。

「じゃあそのゲロ片付いたらタご飯にしよっか。なんと今日は鍋だよ！ 佳子ちゃんの好物！」

「………ああ」

それは楽しみだと酒場は呟き、口元を拭いながら立ち上がった。

3

「——何も喋らなかつたな」と、風間は内部通話で呟いた。

「そりゃあんな上司が相手じゃ、まともに仕事なんてしたくなくなり
ますよ」

菊地原が言う。歌川は無言だったが、微かに頷いて菊地原への同調
を示した。

現在風間隊がいるのは、「酒場」という表札のかかった部屋の前——
つまりは酒場の家の前だ。本日、これまで奇跡的に隠し切れていた空
閑の正体がついに酒場に露見したということ、
「人型近界民の存在」
という情報が外部に漏れることを危惧し、風間隊が酒場の監視に抜擢
された。

いや風間隊だけではない。迅とレイジも遠方から——「狙撃地点」
から酒場家の動向を確認していた。酒場のトリガーには盗聴機能が
付けられている。これによって、迅やレイジ、風間隊は酒場家内部の
会話を盗み聞いていたのだ（この場合、風間隊がいるので盗聴器など
なくとも問題ないが、常に風間隊が酒場をマークし続けられるわけ
はないのは当然の事実として存在する）。

「嫌なものを聞いたな」とレイジが言った。

「……」迅は何も言わず、風刃を握りしめていた右手を眺める。そして

「もう今日は、酒場さんは何も喋らないよ」と無感動に言った。

「警戒を緩めていい」

未来視の能力を持つ迅の言葉は信憑性が高い。「なら、監視人数を
減らすか」

レイジは酒場の家から目を離すことなく言った。

風間隊が帰るか玉狛が帰るかで少し揉めたが、結局は玉狛の二人が
帰る運びになった。風間隊はもう少し監視を続け、酒場たちがどこか
ら派遣された工作人員なのか突き止めるための情報を集めるらしい。
八時まで粘り、その後は二宮隊に交代するとか。

「やはり、ウチで預かったのはまずかつたんじやないか」

玉狛までの帰り道、レイジが横を歩く迅に向かつて喋りかける。

「レイジさんもそう思う？」

「……少なくとも、遊真と会わせたのは失敗だったな。『向こうの世界』にも人間がいて国があるという情報は、トリガーテクノロジーの恩恵に預かりたい者たちからすればこの上なく有益だ」

人がいるのなら取引ができる。誰もがそう考える。向こうの世界にも人がいるとわかった時、近界民の技術を吸収したいこちら側の勢力は、ボーダーという組織をトリガー技術を独占する集団だと揶揄し、排撃しようとするだろう。ボーダーは向こうの勢力だけではなく、こちらの世界の勢力とも敵対しなければならなくなる。

そしてもしボーダーが敗北し、こちらの世界の国と近界民との貿易が始まった時、向こうの世界の国が求めるのは穀物などの食糧品、生活必需品——そして、人間だ。

おそらくこちらの世界からは人間が売られる。

近界民は常に人間を欲している。それは戦力であり、兵力だ。はるか昔から彼らはこちらの世界の人を攫っていた。こちらの世界の倫理観によればそれは禁忌中の禁忌だが、ただ「いけないことだから」というだけで近界民との貿易を打ち止めるには、「トリガー」は魅力的に過ぎる。

そこにはきつと、最悪のシナリオが待っている。

「……そうだな」

迅は呟く。

ただ、迅が玉狛に酒場を引き入れたのにも理由があった。予知能力を持つ自分の目の届く場所に酒場を置いておいた方がやはり安全だろうという以外に、もうひとつ——責任感から来る理由があった。酒場をボーダーに入れたのは迅だ。であれば、いざという時は迅が酒場を処分しなければならない。

彼女を利用しているのはおれだ。

だから、いざという時はおれが彼女を斬り捨てなければならない。

あるいは贖罪として、迅自身が彼女に斬られる未来も——

「迅」

レイジに呼ばれて迅ははつとする。「ん？ なに？」と平静を装って返事をするが、レイジには通じない。

「一人で背負いすぎだ。酒場を使っているのはボーダーの総意だろう。お前だけの責任じゃない」

「……ああ」

迅は頷く。レイジの言葉で少し気持ちが楽になる。

だが、最後は自分で始末をつけるという迅の思いが揺らぐことにはなかつた。

第七話 酒場佳子⑦

1

翌日——朝八時二十一分。

バス停から高校の校門までの坂道を、酒場は鞆を抱えて歩いていた。

頭にあるのは昨夜のこと。なんとなく蹴られたお腹に手を当てる。痛みなどつくにひいているが、それでも蹴られた時の感触は覚えていた。

「……」

なぜ、伝えなかったのだろう。

近界民がボーダーにいるという情報は、酒場の上司にとって非常に有益なはずだ。「お母さん」に聞かれて、開示しない理由など見当たらない。なぜ私は昨日、何も言うことができなかったのだろうか？ 不思議だ。蹴られたことに反発して意地悪したとか、そういうことでもないと思うのだが。私はそういう奴じゃないと思う——なんていうふうに自己分析する酒場。

「——酒場先輩」

「ん」

後方から声をかけられてそちらを振り向く。制服姿の京介が早足で酒場に追いついてきた。

「おはようございます」

「ああ。おはようございます。どうした？ 何か用か？」

「用はないですけど……ただちよつと前に見えたので」

「なるほど」

つまりはなんでもないコミュニケーションをとり近づいてきたということか。こういう時、酒場は咄嗟に話題を振ることができない。基本的に話下手なのだ。密偵としては致命的ではないかとも思うが、もともと酒場はこういういった潜入工作のために育てられた人材で

はない。

「そういえば先輩、昨日銃型トリガーも装備したんすよね。今まではスコープオン一本で戦ってたのに。なんでですか?」

京介から振られた質問に酒場がギクリと体をふるわせる。やばいやばいやばい。怪しまれた? 京介にしてみればなんてことのない、ただの話題の一つとして訊いただけなのだが、酒場が固まっているのを見て不審に思い、「どうしました?」とさらに訊いてくる。

「へっ (裏声) !? いや、ベベベ別にどうもしてないが?」

「いや、明らかに動揺してんじゃないすか」

壊れたオーディオみたいですねと言われて酒場はいよいよ狼狽する。どうしよう、なんか言わないと。なんか言って誤魔化さなくては。

「ん、ん、銃なー? えーとな……うん。いや、実は私この前『明日に向かって撃て!』を観たんだよ。それでガンマンてカッコいいなーって思ってた」

「へえ……そりやまた古い映画を」

お、いけるか?

正直これ以外の言い訳を思いつけなかったので、京介が信じてくれて本当によかった。

「なんでしたっけ、強盗二人組の話ですよね」

「そうそう。まあざっくり言うと、ワイルドバンチ強盗団の最期を描いた話だ。といっても『ワイルドバンチ』とは違うぞ。あれとはまた別の映画だ」

「へえ……」

京介はあまり興味なさそうに頷いた。「ガンマンですか……。早撃ちの名手ならボーダーにもいますけどね」

「いるのか? そんなやつが」

「代表的なのが弓場隊の弓場さんです。回^リ転^ボ式^ル拳^パ銃^ー型トリガーの使い手で」

「回^リ転^ボ式^ル拳^パ銃^ー型なんてものもあるのか」

ボーダーの武器は多彩だなあと驚く酒場。まあ、一番驚いたのは小

南と戦った時で、それ以降はボーダー隊員の戦闘スタイルにも結構慣れてきたのだが——今時、手斧二刀流で戦う戦士がいるなんて。仕込み刀や鉤爪、手裏剣の使い手なんかは酒場の知り合い(ボーダー外)にもいるが、斧はさすがに見たことがなかった。

ちなみに、小南が本気を出す時は斧が連結して一本のハルバードみたいになる。今まではこちらがスコープオン一本だったので手加減していたらしいが、昨日はハルバード+炸裂弾スタイルで初めて手合わせしてボコボコにされた。ずるいと思った。そう京介にこぼすと、「まああのスタイルの小南先輩に、通常トリガーで真つ向から挑んで戦える人がそもそも数えるほどしかいませんし」と返ってきた。

「とりまるはその数えるほどの中にいるのか？」

「いませんね。秒でぶった斬られます」

「謙遜するなよ。お前A級だろ」

「してませんよ。まあ多少距離があれば話は別でしょうけど……小南先輩機動力あるんで、すぐ追い詰められますね」

「そうなんだよな……。あいつあんなデカい得物持つてるのにめっちゃくちや動けるんだよな。あれずるい」

「でもコネクター使ってるってと防御ガラ空きなんで弾の攻撃が通りますよ。当たればの話ですけど」

「ああそうか。ほんじゃ今度やる時は銃で……ってアホか！」
「!？」

突然大声を出した酒場に、京介は驚いて身を引く。「どしたんですか？」我に返った酒場は「え!?! あっ」と焦り、わちゃわちゃと手を動かす。

「あ、あのあれだよあれ。わたし銃とかまだ慣れてないから、狙いとかつけらんなくてさ」

昨日あんだだけ鋭いキックを貰ってにおいて、もう忘れかけている。危ないところだった、銃は使っちゃいけないのだ。

「ああなるほど……でもそんなキレることないでしょ」

「そうだな、あははすまん」

誤魔化すように笑う。ほとほと自分は潜入任務に向いていないな

と思った。

「あ、そうだ。私、明日の午前に初の防衛任務に行くんだが、なんかコツとかあるか？」

この話を続けるとまたボロが出そうだと思ったので、話を変える。「え？ 急ですね。いつ決まったんですか？」京介は怪訝そうに訊いた。

「今日の朝、迅さんから連絡が入ってな。午後、一緒に防衛任務やらなにかって」

「迅さんが誘ったんですか……？ へえ……それはまた……」

「なんだよ。どうしたとりまる、いきなり寡黙になりやがって」

「……迅さん、もしかして酒場さんに気でもあるんですかね」

『き』？ なんだそれ」

きよとんとしている酒場の顔をまじまじと観察する京介。改めて言うことでもないが、酒場は美人だ。容姿が整っている。で、彼女は大人しめな見た目のわりになんか快活だ。迅の好みのタイプと言っても過言ではないだろう——いや、全部京介の勝手な想像だが。

ただ、迅の酒場に対する態度は他の人間と比べて明らかに違う。レイジによると、酒場を玉狛へ配属するような人事に頼んだのも迅だという話じゃないか。怪しい。いやー怪しい。

「迅さんが酒場さんのこと好きなんじゃないかってことです」

「……………!!?!」

目を丸くして腕で口元を隠して、ずだだだだつと二メートルほど後ずさる酒場。

「うそだあ!?!」

「前から思っていましたけど、酒場先輩ってかなりのオモシロ属性ですよね」

下手すれば小南以上。

「いや、でも、そんな、私なんか、まさか——」

「まあ俺の考えすぎなんでしょうけど」

「なんだよ……びっくりしたじゃないか……」

『迅さんは先輩に惚れてますね間違いない』とか言った方がよかつ

たっすか?」

「……んー……それも……困る」酒場は難しい顔をして押し黙る。

「私は戦士と結婚する気はないんだ」

「結婚で。二、三段階すつとぼしてないすか」

「一生を添い遂げられない奴と付き合つてどーすんだよ」

なんだかかなり凝り固まった価値観のような気もするが、悪いものとは思えないので、京介はただ「へえ……」と頷くしかなかった。気まずくなったので「まあそれは良いとして」と強引に話題を変える。

「いや、その話もうちよつと詳しく聞きたいのだが——」

「防衛任務のコツの話ですよね」「……おう」

「トリオン兵は警戒区域の外に出ようと移動するので、それを追うか待ち伏せるかして狩つてく流れです。なので必然的に場所を変えながら戦う必要があります」

「ふうん、なるほど」

「でもまあ迅さんがフォローに入ってくれるなら、あんま何も考えず適当に暴れて問題ないと思いますよ。あの人、多分ボーダーで一番援護うまいんで」

「そうか。じゃあ遠慮なく暴れてやるよ」

酒場はひひひと露骨に悪く笑った。

この辺で二人は校門にたどり着き、校舎に入る。それぞれの下駄箱がある場所へ別れ際、「じゃな」と軽く右手をあげる酒場に、「ええ、また」と京介は挨拶を返した。

その様子を京介に気がある女子たちが目撃し、「誰よあの女!」「二年生!」「ボーダーの人!」くそおとりまる先輩とあんなに仲良くしやがって!」「しかもなんて美人なんだ羨ましいー」などと勝手に盛り上がるのはまた別の話。

最初の防衛任務だし、ちよつと余裕をもって迅と落ち合おうと思つた酒場は、三時間目の授業が終わるとすぐに学校を出た。どこまでも

澄み切った一月の晴天の下、酒場はフラフラと鼻歌混じりに警戒区域の方に歩いていく。一度玉狛支部に寄って、暇をしていた林藤支部長にトリガーをちよつとカスタマイズしてもらった後、軽く昼食を摂り、迅との合流地点であるボーダー本部に向かった。

「やあ、今日は良い天気だなあ」

とぼけた独り言。呑気が服を着て歩いていると言っても過言ではない。基本的に酒場は密偵向きの人間ではなかった。だからこそボーダーに潜入できたとも言えるが。

「……あれ？」

警戒区域の外縁、ボーダー本部に続く直通通路のある場所にまでたどり着いた酒場は、突然の空気の変化を感じ取って空を仰ぐ。なんだろうと考えていると、地鳴りのような低い轟音とともに空が急激に黒ずみ始めた。

直後、空間にいくつもの黒い穴が空く。間違いない、近界からの「門」だ。それも一つや二つじゃない。夥しい数の門が開通し、トリオン兵の群れがそこから降ってくる。地獄の入り口が開いたかのような圧巻の光景だった。

大規模侵攻の始まり。

酒場にもそれがわかった。

空を埋め尽くす門の群れに酒場が圧倒されていると、ピリリリとポケットに入れていた端末が鳴る。ボーダーから支給された小型端末。かけて来たのは迅だった。朝の京介との会話を思い出した酒場は躊躇しながら通話ボタンを押すと、耳もとに当てて「わ、私だ」と言う。

『酒場さん、悪いんだけど本部の南西側に回ってきてくれるか？ もうすぐ忍田さんから合流ポイントが提示されるはずなんだけど』

当然ながら、それは事務的極まりない用件だった。ドギマギした分の氣勢を削がれるが、まあそりやそうだろうと思いい直す。

「構わないぞ。そこで迅さんと合流するのだな？」

『いや、おれは基地西側のカバーをするから、酒場さんと合流はできない。他の隊員と組んでトリオン兵を迎え撃ってもらいたい』

「西側をカバーって、迅さん一人でやるのか？ 大丈夫か？」

はっはっはと迅は笑う。

『実力派エリートなもんでね』

「そうなのか」

『そっちがやばくなったらヘルプ行くから、それまで頑張ってトリオン兵を撃滅してくれ』

「やばくなることなどないと思うぞ」

『おっ、頼もしいな……。それで、もしメガネくんたちがピンチになったら、フォローをお願いしたいんだけど』

「三雲たちが？ わかった。任せろ」

『それじゃよろしく。……。なあ酒場さん、ひとつ訊いていいかな』

「なんだ？」

迅は少しためらったように沈黙する。だが、やがて意を決したように口を開き、酒場に質問を投げかけた。

『酒場さんは、ボーダーに入隊して良かったと思う？』

「……」

今度は酒場が沈黙する番だった。

数秒、お互い何も喋らない時間が続く。気まづくなった迅は、「といてもまだ入って数週間だからわかんないよな。まあとにかくお互いがんばろうぜ」とごまかして、強引に通話を終えてしまおうかとも思った時、酒場からの答えが返ってきた。

「良いかどうかは、よくわからない」

『……………』

「——けど、ボーダーに入ってから毎日はけっこう楽しいな」

『……………そうか』

「まあそんな感じだ。じゃあな迅さん、お互い頑張ろう」

酒場は通話を切る。地響きがやってくる方向を見据えると、自分のトリガーを取り出して目の前に掲げた。

「トリガー起動」

そんな眩きとともに酒場の体は生身からトリオン体へと換装される。高校の制服姿ではなくなり、玉狛支部のエンブレムが入った

ジャージ姿になった。デザインはC級隊員のそれだが、実力はすでにA級。酒場佳子のボーダーとしての初陣であり――
そしておそらくは、最期の出撃だった。

第八話 大規模侵攻①

1

新型トリオン兵、ラービット。

それが今回の戦場における鍵だ。

二足歩行の形態で人間より一回りほど大きいサイズのこのトリオン兵は、トリガー使いの捕獲を目的として設計されているという。性能は他のトリオン兵と比べても段違いで、一個体がそれぞれボーダーのA級隊員に匹敵する戦闘能力を持っている。

鈴鳴第一部隊もまた、基地南西部でそのラービットと交戦を開始した。

圧倒的な戦闘性能を誇るラービットをボーダー側は警戒し、正隊員までもが食われることが危惧されていたが、この部隊に関してはそれは杞憂だった。

ラービットが明らかに攻めあぐねているのだ。

「――」

ボーダーの攻撃手ランクにおけるナンバー4、村上鋼むらかみこうを擁する鈴鳴第一は接近戦において鬼のような実力を発揮する。防御に徹する村上を崩すのは、たとえラービットといえども至難の技だった。

ラービットの右腕の薙ぎを、村上は左のレイガストでガード。そのまま右の孤月でラービットの腹に突きを入れる。飛び退くラービット。横から隊長の来馬辰也くるまたつやがアサルトライフル型トリガーの連射で追撃。ラービットは両腕で体をガードする。

劣勢ではない――だが優勢でもない。来馬は戦況をそんな風に見ていた。

本部からの命令は東隊のもとへの集合。しかしこのラービットに足止めされていて満足に動けないのだ。じりじりとした焦燥感を覚え始めた頃、「オレがやつを引きつけます」と村上が言った。

「来馬先輩は太一たいちと一緒にB級部隊に合流してください」

「え……!? おまえ一人でどうするんだ……!?」

「A級が着くまでやつを相手にします」

村上は両手の武器を交互に消し、レイガストと弧月を左右持ち替えた。村上が防御よりの立ち回りをする時の持ち方である。来馬は迷ったが、今は一分一秒でも時間が惜しい。決断は迅速に行わなければならぬ。

結局、来馬は村上の腕を信じてこの場を託すことにした。

「……わかった。でも無茶はするなよ」

「大丈夫、己の分は弁えています」

短く言葉を交わした後、来馬はラービットの手前に狙いを定めて連射する。アスファルトがひっくり返り、土埃が舞う。「太一、行くよ！」と内部通話で叫ぶと、太一とともに戦線から一気に離脱した。

それを追いかけようとするラービットに、村上がスラスターで距離を詰めて仕掛ける。鋭い一撃だが、ラービットは分厚い腕の装甲を盾にすることで耐えた。ギロリとラービットの眼が村上を見る。村上も一切物怖じせず真つ向から睨み返した。

分厚く重い両腕がラービットの盾であり、矛だった。食らえばただではすまない強烈なパンチを村上はバックステップで躲し、追撃の裏拳をレイガストで凌ぐ。時間にして三秒ほど激しく打ち合った後、お互いに距離を取った。間合いをはかりながら横にスライド移動して様子見。村上が道の途上にあるフェンスを飛び越えようと跳躍した瞬間を狙いすましてラービットが襲い掛かる。村上は跳躍を諦め、弧月でフェンスを斬って地に足をつけたままラービットのチャージを横に避けた。地面を抉るラービットの豪腕。普通の者なら攻撃の威力に恐怖を感じて踏み込む足が鈍るであろうその直後に、村上は隙ありと見て弧月を振りかぶる——左脚を斬りつけるが、決定打には至らず。反撃が飛んでくるのでレイガストでガード。返し技に旋空弧月。強力な攻撃を見舞う村上だったが、距離が近く、致命傷には至らない。

あと一発。

あともう一步追撃できれば倒し切れるのだが、その一步が届かない。無理に踏み込めば返り討ちに遭う可能性が高い。ラービットは

やはり非常に高性能なトリオン兵だった。

それから両者は四度激突するが、ラービットが仕掛けて村上が凌ぎ、反撃を与えようとしたところにギリギリのところで離脱される展開が続く。腕で弾かれて垣根に激突した村上は、悠然と佇むラービットを睨んで歯噛みした。

『鋼君、右後ろから増援！』

内部通話でオペレーターの今結花こんゆかが叫ぶ。村上が反射的に身を左に躲すと、すぐ横からラービットに向かって誰かが飛び出た。

誰だ？

村上は彼の者の背中を見る。女性だった。

白い隊服——訓練生か？

彼女はラービットの腕の薙ぎを跳躍で避けて、耳に当たる部位を二本とも斬り飛ばした。彼女の武器はスコープオン。ラービットの猛攻に一切捕まることなくすいすいと動き回り、右脚に一太刀入れるが、効き目が薄いことを確認して深く追撃せず、村上の横まで退く。

「ふむ。まあ悪くないな」

酒場はラービットを見据えてスコープオンを構えた。

「君は？」村上が訊く。

「私は酒場。酒場佳子だ」彼女は快活に名乗った。「昨日正隊員に上がったばかりなのでこんな格好だが、ちゃんと正隊員だ。安心してくれ」

「昨日……？」

なんだか胡散臭い物言いだ、彼女は両手にそれぞれ一本ずつスコープオンを構えている。訓練用ではない、正隊員用のトリガーを持っているのは確かだ。

「迅さんに南西地区を守れと言われてな。ここにいるのに鑑みるに、君もA級部隊か？ 他の隊員はいないようだが」

迅さんがよこした増援？ そう言われて彼女をもう一度しげしげと見てみると、隊服の肩に玉狛のエンブレムが入っているのに気がついた。そういえば、戦闘訓練で新記録を出した大型新人が玉狛に入ったとかいう噂があったような。

「……オレはB級部隊、鈴鳴第一の村上鋼。ウチの隊長と隊員一人をB級合同隊に合流させるため、障害だったこの新型を引き付けていた。君がA級隊員だつていうならこの場を任せたいけど……君、一人？」

「ああ」酒場はなぜか不敵な笑みを浮かべて頷いた。「そういうことならこいつは私に任せろ。村上君はB級合同部隊に合流してくれ」

そう言われても村上は困ってしまう。昨日正隊員に上がったばかりの新人に新型を任せるのは心許ないというか、普通に心配だった。

『酒場、さん？ 本当に大丈夫？』

村上と同じ気持ちを抱えていたらしい結花が酒場に回線を繋いで問いかける。いきなり喋りかけられたことにびっくりと驚く酒場だが、すぐに村上の隊のオペレーターが喋りかけて来たのだと理解し、「大丈夫だ、問題ない」と自信たつぷりに答えた。

余裕綽綽な酒場の態度が気に食わなかったのか、いやそれともただの偶然か、会話がその辺りまで進行した時、ラービットが突っ込んできた。村上と酒場はそれぞれ後方に飛び退いて避ける。ラービットの狙いは酒場のようだ。太い腕を振り回して彼女を追い回す。

フォローに入ろうとした村上だったが間に合わない。新隊員がやられる——と思った次の瞬間、酒場はスイングするラービットの腕を鼻先すれすれで躲し、勢いそのままバク転。足裏から生やしたスコープオンでラービットを顎の下から斬りあげた。

ラービットの顔に傷が入る。傷口から煙。好機。村上はスラストアーを起動し、ラービットの堅い右腕を付け根から斬り剥がそうと試みる。切断こそできなかったものの、防御姿勢に入っていた両腕のうち、だらんと右腕が垂れ下がった。

「よし」

そう呟くのと同時に、酒場はスコープオンをラービットの歯元に突き刺す。村上が削ったガードの隙間から、器用に奥まで刃を到達させた。それによって「目」が潰れたらしい。ラービットはゆっくりとその場に倒れ伏した。

「援護、感謝する」

酒場は動かなくなったラービットを横目で注視しつつ、村上に礼を言った。

「……うん」

内心、村上は驚いていた。先ほどのバク転蹴り、あれは誰もが簡単にできるような技じゃない。相手の脚が十全に機能していなかったとはいえ、あそこまで綺麗にカウンターを決められるものだろうか。曲芸染みた動きだった。

『どうだ？　すごいだろ、ウチのルーキーは』

その時、内部通話で村上たちに話しかけてくる者がいた。酒場をここに送り込んだ張本人、迅である。

「……迅さん」

『よう、鋼。単独でよく頑張ったな。このあとはB級合同に向かつてくれ。おまえが合同部隊にいますと、合同部隊内の被害が減るんだ』

「……！　B級合同部隊がやられるかもしれないってことですか？」

迅はその問いには答えなかった。『多分、B級合同部隊もかなり強い敵と戦うことになる。その時おまえがいると心強い』

「……」迅の予知能力については村上も知っている。彼には従った方が良さだろう。「今、東さんたちはどこにいる？」

『ちよつと待って。マップに表示するから』

「ありがとう」

結花が表示したマップを見る前に、村上は酒場の方を見る。酒場は微妙に所在なげな顔で村上を見ていた。

「君はこのあとどこへ？」

「んー……。千佳たち——訓練生のカバーに行こうと思う。なんかトリオン兵がやばいらしいからな」

2

大規模侵攻の開始時、修は中学の屋上で空閑たちと共に昼食を摂っていた。

基地周辺の空が暗くなり、無数に開く「門」を皆で目撃した後、緊

急召集の指令に従って出撃し、警戒区域内部に移動。空閑とともに区域内で正隊員の獲り漏らしたトリオン兵に対処した後、嵐山隊と合流する。その後は木虎と共に、避難誘導をしている千佳たちC級隊員のカバーに向かった。

そして現在、修は苦境に立たされていた。

モールモッドは修が倒した。木虎と新型トリオン兵ラービットの一騎討ちも、木虎が優勢のまま進行していた。脚を掴まれ叩き落とされたが、木虎は自ら脚を斬って拘束から逃れ、攻撃態勢に入っていた相手を逆に討ち取る。それはA級隊員としてのプライドに裏打ちされた日々の研鑽の賜物だった。そこまでは木虎と修だけでなんとか凌げていたのだが――

「――さあ、雛鳥を捕まえようか」

たった今、片脚を失った木虎の眼前に三体のラービットが出現した。

「新型が三匹!？」

修は叫ぶ。たった一体で木虎がやられかけたのに、これはあまりに理不尽な戦力差だ。

「ずっ……い……いくらでも出てくんじゃん!」

千佳の友達、夏目出穂なつめいずほもまた目の前の理不尽に憤慨して叫ぶ。

誰が見てもわかる。この状況、明らかにこちらが不利だ。各個がA級隊員と同程度の戦闘能力を持つラービット三体なんてどうやって止められない。何でこんな辺鄙な場所にこんな戦力を注ぐのだろう――？

その理由を悟り、木虎は戦慄した。

「逃げなさい早く!」木虎が叫ぶ。右手にスコピオンを生成。敵わないとわかっていながらも、一分一秒でも長く時間を稼ぐため、片脚ながら戦いを挑もうとする。

「こいつらの狙いはC級隊員よ!」

その瞬間、足元に違和感。アスファルトが割れたと思ったら、地中から無数の刃が伸びて――
刻まれる。

「……いっ……！」

先ほどのラービットはこんな能力を使ってこなかった。もしや、一体ごとに性能が違うのか？

「木虎……！」

「三雲くん！ あなたは本部へ連絡を——」そう言いかけた木虎をラービットが掴む。そして腹部から出した触手のようなものを木虎へ突き刺した。まずいと思つて即座に緊急脱出を試みる木虎だが、少し遅い。

木虎の体が白く光り始め、輪郭がぶよぶよと変形する。修の目には、木虎の体が溶けているように映った。

「ベ……ベイルア——」木虎がその台詞を言い終えることは叶わず、白い光のキューブになって、ラービットの腹に接收されてしまった。

目下最大の障害を排除したラービットたちC級隊員に狙いをつける。彼らにしてみればまさに獲り放題とか踊り食いといったところか。修が逃げ惑うC級隊員とラービットたちの間に立ち塞がるが、実力差はいかんせんどうすることもできず、なすすべなく吹っ飛ばされる。空中を舞った修の体は、近くの民家のベランダを突き破った。

「メガネ先輩……！」

夏目が修を呼ぶ。千佳も心配そうに修の方を見上げていた。「だ……大丈夫だ！ ぼくに構わず逃げろ！」

修がそう叫ぶまでもなく、他のC級隊員たちはパニックになって統率も戦術もなく逃げ出していた。出穂も千佳を振り返り、「マジでヤバイよこれ——逃げよチカ子！」と呼びかけるが、千佳はそこに立ち尽くしたまま動かない。

ラービットが近づいてくる。

「……チカ子!？」

「何やってる千佳！ 早く行け！」

千佳の頭にあるのは、先ほど木虎が捕まった光景。まずいことに、それが千佳の中で重なってしまったのだ——向こうに行つたまま帰ってこない兄と、トリオン兵に攫われた千佳の友達に。

「はあ……はあ、はア、はあ——！」

鼓動が早まる。

視界がぼやけて狭くなる。身体が震える。足が竦んで動かない。トラウマが千佳をがんじがらめに縛っていた。攫われる。

攫われてしまう——それだけが千佳の心を埋め尽くす。思考が最悪の地点で止まる。もはや千佳は何の抵抗できず、ただ食べられるのを待っているだけの、蛇に睨まれた蛙だった。

ラービットが近づいてくる。

「千佳！」

瓦礫から抜け出した修は千佳を助けようと動き出す。が、遅い。それでは間に合わない。ラービットは千佳までほんの数メートルの距離にいた。動かない千佳にゆっくりと近づくと近づくラービット——腕を千佳に伸ばそうとした時、ラービットの脳天に狙撃銃アイビスの弾が直撃する。

ガキンという音がしてラービットがのけぞった。その衝撃音で千佳は恐怖の硬直から抜け出す。後ろを振り向く。そして誰が千佳を救ってくれたのかを知った。

「チカ子に手え出してんじゃねーぞこんにやろー!!」

出穂だった。

出穂がトリガーを起動し、アイビスを展開して撃つたのだ。

出穂はもう一発、ドオンと弾を撃ち出すが、これはラービットの分厚い腕の装甲に阻まれる。アイビスの火力を以てしてもラービットの腕は抜けないようだった。やはり尋常でなく硬い。ラービットは標的を千佳から出穂に変えて飛び出す。勇しき訓練生の抵抗は一瞬で終了してしまった。弾の再装填が間に合わない出穂をたやすく捕らえ、ガパリと腹を開けて出穂を飲み込む態勢に入る。

「わっちよっ、タンマ！ キモいキモいキモい！」

じたばたと暴れる出穂だが、腕の拘束から逃れられない。肩に乗せていた猫をどうにか逃がす。千佳が思わず名前を呼んだ。「出穂ちゃ

——」

「チカ子逃げろ！ 走れ！」

出穂が叫んだ。

「逃げろ千佳！」

修も叫ぶ。二人の声が——否、ここまでずっと千佳を守ってくれた者たちの声が、ただひたすら「逃げろ」と、千佳の頭の中で反響する。逃げなければいけないのか？ 友達を置いて、仲間を盾にして……私はずっと逃げなければいけないのか——？

——そりやもちろん戦闘員でしょ。

誰かが言った。

——この先近界民に狙われたときのためにも、チカは戦えるようになつたほうがいいだろ。

入隊した日、空閑はそう言つて千佳の背中を押した。それはともすれば千佳を平和な場所から危険な場所に連れ出してしまったのかも知れないが、しかし、空閑はあくまで千佳の背中を押しただけ。戦わなければならないと——戦いたいと決めたのは空閑ではなく、千佳自身だつた。

今度こそ——

『トリガー臨時接続』

千佳は出穂の落としたアイビスを拾い、構える。

そしてスコープを覗く。見つめるは出穂を掴むラビット。

あるいは——自分自身の運命かもしれないなかつた。

今度こそ、友達はわたしが助ける！

引き金を引いた瞬間、巨大な爆発音が響き、さきほど出穂の撃つた弾とは比較にならないほど強力な弾丸が撃ち出された。

それはかつて本部基地の外壁に風穴をあけた一撃。

後に「玉狛の大砲」と呼び称されることとなる、トリオン怪獣の咆哮。

片腕を前に出して防御姿勢を取っていたラビットだったが、そんなものは千佳の前では障子紙同然。弾丸は腕ごと本体を貫通し、破壊する。衝撃の余波によってラビットの拘束から解かれて投げ出された出穂が「どわあ！」と言つて地面に転がった。

「こらチカ子！ アタシも吹っ飛ばす気か！」なんてコミカルに怒る。

「ご、ごめん」と千佳は謝った——その時だ。体の半分以上が粉々になり、もはやガラクタ同然のはずのラービットの腕が微かに動いたのは。

それに気づき、トリオン兵のコアである「目」を破壊するのは、本来だったら修がやる役割のはずだったのだが——此度は違った。

ラービットが動き出した直後、コアは投擲されたスコープオンによって碎け散る。異変に気づき、対処しようと一歩踏み出しかけていた修は、それがどこから飛んできたスコープオンなのか確認しようと振り返る。

「……………」

修は戦慄する。

そこに、酒場佳子がいた。

「よう、三雲。千佳」

酒場はいつもと変わらない表情のまま、軽く右手をあげてそう言った。

3

酒場佳子。

空閑や千佳の数週間前に玉狛支部に配属された新隊員。ついこないだ三門市に引っ越してきたという高校生。新入りながら実力は高く、剣一本の勝負では米屋や空閑に勝ち越し、小南とも互角に渡り合う。

そしてその正体はボーダーの技術を盗みにやってきた密偵。

修の——敵。

「酒場先輩——」

千佳が安堵したように彼女の名を呼ぶ。「助けに来た」と酒場は言った。

助けに来た？ 本当か？

……いや、本当なのだろうと修は思い直す。彼女はこの大規模侵攻で大活躍をしてくれると迅は言っていた。少なくとも今は心強い味

方なのだ。大丈夫、恐れるな。彼女は味方だ。

「もうすぐレイジさんたちが到着するらしい。それまで凌ぐぞ」

「は……はい！」

修は酒場と並び、レイガストを構える。その所作には幾分かぎこちなさが残っていた。

空を飛ぶ型と白い型のラービットが空中と地上の二方から襲ってくる。空を飛ぶ型が砲撃してくるが、くるりと避ける酒場には当たらない。回避行動の直後、酒場は地上を突進してくる白いラービットと不安定な体勢で激突した。ふるわれるラービットの豪腕——だが、酒場は体を地に伏せて横に転がることでそれを回避する。すぐさま起き上がり、今度は傍の民家の壁を利用して三角飛び。砲撃が民家を破壊するが、これも酒場には当たらない。

千佳が空中のラービット目掛けてもう一発撃つ。当たれば撃墜間違いなしの必殺大砲だが、ラービットはそれをひらりと躲した。仲間の一体を破壊した威力を見て、防御するのは得策ではないと学習したのだろうか。

「アステロイド！」

修が通常弾を数発、空飛ぶラービット目掛けて撃つ。命中したが、大したダメージにはならなかったようだ。ラービットはぎろりと修を見て、急降下で迫る。

シールド
「盾 モード！」

レイガストを広げてラービットのチャージを受ける修。衝突した後も勢いを殺せず、数メートル後ろに押されるが、今度は吹っ飛ばさず、堪え切れた。

「ナイスだ三雲」

修と睨み合う状態にあったラービットの脚を斬り崩して酒場が言う。その隙に白いラービットがC級の方へ向かおうとするが、酒場が片方のスコープピオンを投げて牽制。そして千佳の砲撃。白いラービットを後ろに下がらせた。

酒場という助っ人により現在はラービットたちを押し返しているが、木虎を回収する余裕がまだできなかった。酒場は強いが、C級隊

員を守りながら戦わざるを得ず、それが枷となっていて満足に動けないようだ。

戦況が動いたのはボーダー最強の部隊が到着してからだだった。

脚を斬り落とされた飛行型が上空に逃げた時、後方からの射撃がそれを撃ち落とす。ラービットは体から煙をあげて後方に倒れた。誰がやってくれたのだろうかと振り返った修の瞳に、突撃銃型のトリガーを構えた京介とレイジが映る。

「待たせたな、修」と京介が言った。

「……！ 烏丸先輩！ レイジさん！」

ずっと苦しかった修の表情が笑顔になる——そのすぐ横を通り抜けて、向こうから迫る白いラービットに突撃する影。ショートカットの髪型には見覚えがないが、「メテオラ」と呟いた声には聞き覚えがある。

小南だ。

「佳子、離脱して。メテオラぶち込んだから」

「……ん!？」

白いラービットと酒場は激しく近距離で戦っていたが、小南の指示が聞こえた酒場だけが横に飛ぶ。直後、弾着。酒場の影から突如現れた炸裂弾に対処しきれず、ラービットは派手に攻撃を喰らった。

「おい小南！ 私を殺す気か!？」

「あんなら余裕で避けたでしょ」

「まあ余裕だったが……それはそれとしてもうちよつと早く警告しろ！」

見栄を張りつつ怒る酒場。

言い合う小南と酒場を尻目に、「おい、敵はまだ死んでないぞ」とレイジが警告する。確かに、京介たちの銃撃を浴びた飛行型も、小南のメテオラを受けた白い方も立ち上がった。だいぶダメージを負っているようだが、致命傷は入っていないらしい。

「気をつけてくださいー！」全員に聞こえるよう修が叫ぶ。「捕まるとキューブにされます！ 木虎がやられました！」

「わかってる」と京介が応じる。「正隊員も一人やられた。今、本部の

エンジニアが解析を進めているところだ。幸いというか厄介というか、正しい解き方をしない限り傷一つ付かない代物らしい」

「手加減しなくても大丈夫ってことね」

小南は京介の報告をプラス思考に捉えた。

「木虎は玉狛第一が助ける。修、お前はC級をフォローしろ」

「敵の新型は二体——飛行型を優先して処理する。小南と酒場が前衛、俺と京介が後衛だ」

「了解した。小南、私の足を引っ張るなよ」

「どの口が言ってるの。あんたの方こそ遅れんじゃないわよ？」

「……ちよつと待ってください！ まだあの門を開けるやつが——」

臨戦態勢に入った玉狛第一部隊に修が声をかけるが、時すでに遅し。

門が開く。黒くて円い空間が、修たちの前に展開する。

「転送完了」

門の向こうで誰かが言った。

「——戦闘開始です」

第九話 大規模侵攻②

1

「いやはや——子供を攫うのはいささか気が重いですな」

「これが我々の任務です。ヴィザ翁」

門の向こうから現れたのは「人型近界民」と呼称される存在だった。黒いマントを羽織った二人の男。そのうち一人は白髪の老人で、好々爺然とした出で立ちからは底知れない実力が垣間見える。もう一人は若い青年——いや、少年と言ってもよいかもしれない。老人よりわずかに背が低く、外国人風の外見。茶髪で、高い鼻と真面目そうな凜然とした目つき。整った容姿をしているが、普通の人間にはない異形の形質を両耳の後ろに備えていた。

『角つき』……！』

修が呟く。

少年は耳の後ろ回りから二本の角を生やしていた。

修はレプリカの言っていたことを思い出す。今回の大規模侵攻における攻め手の候補は四つの国。豊かな海洋資源を持った海洋国家リーベリー、特殊なトリオン兵に騎乗して戦う騎兵国家レオフォリオ、雪原の大国キオン、近界最大級の軍事国家である神の国アフトラトル。この内特に可能性が高いのはキオンとアフトラトルであり、アフトラトルには頭に角（正確にはトリオン受容体）を埋め込むことで強化トリガー使いを生産する技術が存在するという。

「自分が目標を捕らえます」

両方の耳元から後ろに向かって角を生やした少年が口を開く。

「ヴィザ翁には援護をお願いしたい」

「よいでしょう」ヴィザと呼ばれた老人の方が応えた。

「しかし目標も強力なトリオンの持ち主だという話だ。用心しなさいヒュース殿」

「注意します」ヒュースと呼ばれた少年はトリガーを起動する。

「――殺してしまわないように」

少年の周りに無数の黒いガラスの破片のような物体が漂い始める。それは次第に繋がり合い、触手のようにうねうねと動き始めた。

『もはや疑問の余地はない。相手はアフトラトルだな』

レプリカが言った。

「気をつけてください！ あいつらの角は……」

「支部長たちに聞いてるわ。角でトリオンを強化した怪人なんですよ？」

「ああ、そういえばさつき林藤支部長がさつきそんなことを言っていたような……」

修は作戦会議に呼ばれた時、レプリカから直接聞いていたので知っていたが、小南や酒場たちも「角つき」についての情報は共有しているようだった。

レイジは彼我の戦力に鑑みて方針を決める。敵は新型二体に人型近界民二体。対してこちらは小南、京介、レイジといういつものメンバーに加えて修と酒場がいる。人型の戦闘力は未知数だ。全面衝突をするよりも先に、新型を片付けてしまった方が得策か。「酒場、小南」レイジは攻撃手二人の名前を呼んだ。

「3分やる。新型を片付けろ」

「……!?」驚いたのは修だ。木虎をも食った新型複数体相手に、小南と酒場だけで向かわせるのか？ 修の心配をよそに、小南と酒場は不敵に笑う。

「1分で充分よ。あたしたちが戻るまでにやられないでよね」

小南はそう言ってラービットに向かう。酒場も後に続いた。

「奴ら装甲が硬いからな。私が隙を作るから、お前あのハルバードでかち割れ」

「はいはい。間違っても捕まったりしないですよ」

「それはこっちのセリフだ」

二人は軽口を叩き合いながらラービットに斬りかかった。

玉狛支部のトリガーは本部のものとは作りが少し異なる。

本部のトリガーが大人数での運用を想定し、継戦能力を重視して規

格化されているのに対し、玉狛のトリガーは使用者の特性に合わせた一点ものとして製造されている。小南のトリガーのコンセプトは火力重視。「接続器」というトリガーで二つのトリガーを連結し、一撃の威力を極大まで高めている。防御を捨て、トリオン効率を度外視した短期決戦型が小南の得物——酒場がハルバードと呼んだ大戦斧の正体だった。

二刀スコピオンを手にした酒場と双月(斧)を装備した小南は、ものの数十秒で手負いの二体を破壊する。両断されたラービットの腹から木虎のキューブが転がり出てきた。

「マジ……!?! ホントに瞬殺じゃん!」と、出穂が驚きの声をあげる。千佳も修も驚いていた。「ダメージがあつたとはいえ、あの新型を……!」

「木虎ちゃんのキューブは回収したわ!」

「了解。よくやった」

『人型の背後から奇襲するから、フォローをよろしく頼む』

「わかった」

ヒュースの防御を崩すべく、京介は銃弾を通常弾から変化弾アステロイドに切り替える。反射盾に跳ね返されるだけだった弾の軌道が急に変わり、多角的に襲ってきたことでヒュースは咄嗟に対応し損ねる。「くっ——」曲がる弾丸だと? 多少ダメージを食いながらも破片を散らして盾を広げた。変化弾に狼狽している隙を狙い、小南が双月を振りかぶってヒュースに突っ込む。

が、それはもう一人の人型近界民、ヴィザによって防がれた。双月の間合いの内側に割り込み、手に持つ杖で双月の柄の部分を受けて小南の勢いを止める。見事というほかない受け太刀だったが、ヴィザが止められたのは小南一人だけ。「ヒュース殿、もう一人来ます」「わかっています——!」反対側から酒場がヒュースに襲いかかった。こちらにはヒュースが黒い破片を展開して自力で攻撃を受け止める。だがそのために、今度は京介たちへ向けておく意識が散漫になった。

レイジと京介の銃撃。たまらずヒュースは横に飛び退く。致命傷は避けたが、少なからずダメージを負ってしまった。

「……！」

「少々分が悪いようです」

ヒュースの隣に降り立ったヴィザは、酒場と小南を注視しながら言う。ヴィザもヒュースも自分たちがやられるとは微塵も思っていないが、これでは雛鳥の捕獲に移れない。

「私が抜いても良いが——ここは雛鳥の群れが近すぎますな。できれば奥の手としてとっておきたい」

「……では、援軍を要請しましょう」

2

玄界外縁部——アフトクラトルの遠征艇。

二本の黒い角を生やした男女が座っていた。

女の方が男に言う。

「ヴィザ翁とヒュースから援軍要請です。トリオン兵の群れを向かわせて構いませんね？」

「……」男の方はしばし考えをまとめるように沈黙した。

あの場にはアフトクラトル側の最高戦力——ヴィザがいる。戦力で劣っているとは考えられない。単純な戦力差を埋めるための増援要請ではないかと男は理解した。

ヒュースからの報告と撃破されたトリオン兵たちのデータから見るに、「向こう側」の戦力は五人。内四人が手練れ。手練れと言ってもヴィザが全力を出せば瞬く間に全滅させることができる程度。だがヴィザが全力で戦闘を行うには雛鳥の群れが近すぎる。せつかくの金の雛鳥を傷つけてしまう恐れがあった。だからこそ増援要請だ。

敵戦力の分断を誘うためのトリオン兵による市街地への攻撃は当然として行うが、それ以外にもう一つ、なにか手を打つ必要があるだろう。

「ランバネイン」

男は南部の戦場で暴れまわっている、自身の弟の名を呼んだ。

「ヴィザたちの援護に向かえ」

『了解した。この兵は放置していいな?』

「ああ」

短い通信を終え、女にも「トリオン兵を市街地へ向かわせろ」と指示を出す。「了解しました」と女は言い、計器類を操作し始めた。

徐々に歴史が狂い出す。

3

基地南部。

「あ」と緑川が声をあげる。「あいつ移動始めたよ」

「まじか」と言ったのは出水公平^{いずみこうへい}。「行き先は玉狛か?」

「やべえじゃん、追いかけてようぜ」肩に槍を抱えた米屋が言う。三人は揃って廃墟の立体駐車場から飛び降りた。

彼らが追うのはB級合同部隊と睨み合いを続けていた人型近界民——ランバネイン。ランバネインは飛行機能を使い、地形を無視してヴィザたちのもとへ飛び立っていった。

「飛べんのかよ!」出水が叫ぶ。いくらトリオン体の脚力があるからと言えども、飛ぶ相手に地上を走って追いつけない。

「緑川、足止めいけるか?」米屋が緑川に訊いた。緑川は機動用トリガー「グラスホッパー」を持っている。だが彼の表情は微妙だった。「あそこまで距離空いちやうとムリだね。玉狛にはちよつと我慢してもらうしかないよ」

4

基地南西部。

玉狛の面々はアフトクラトルの精鋭二人を相手に優勢を築いていた。

ヒュースは京介とレイジが抑えている。基本は銃撃で動きを制限するが、時々どちらかが近接トリガーに持ち替えて崩しを狙う。だが踏み込みすぎず、方針はあくまで撤退戦。ヒュースにとっては戦いに

くい相手だった。

「ほっほ……」

ヴィザは小南と酒場、二人の攻撃手を相手に刃を交える。この二人の猛攻を受け切るのは至難の技であるはずだが、彼はさして難しそうにもせず凌ぎきっていた。

「達人だな、ご老体」

「油断しないでよ。こいつのトリガー、なんかやばい感じするから」

小南が言う。

「さて、どうしたものか……玄界の戦士はやはり侮れない。まさかここまで劣勢を押し付けられるとは」

「そうだろうそうだろう。やはり侮れないだろう」酒場は嬉しがるが、小南はむすつとした表情のままヴィザを見据えて「何言ってるのよ」と吐き捨てるように言う。

「さつきから本気出さずのらりくらりしてるくせに」

「いえいえ。私は常に真剣ですよ」

老人がそう言った直後、後方から大型トリオン兵が家突き破って現れる。

派手な倒壊音。

警戒レベルを引き上げる二人だったが、それはそのまま小南たちを無視して市街地の方へ進んでいった。

「敵地での戦闘ではやはりこれが効く」

老人が言う。「さあ、どうされますかな？ お嬢さん方」

「……」

このための時間稼ぎだったのか。

小南は歯噛みする。

『雑魚トリオン兵が南西方面に集まっている。このままじゃ市街地の被害が大きくなっちゃうよ！』

宇佐美から通信が入った。そんなことわかってるわよと喚きたくなる気持ちを小南はぐつと抑える。

「どうする隊長？」

酒場がレイジに訊いた。

「もう少し待て」レイジが言う。確かに南西方面に誰かを向かわせる必要があるが、今ここからは戦力を割けない。もうすぐ敵増援が到着するという報告を受けていたのだ。

「米屋たちが来ているから、そのまま向かわせる」

「――！ 左上空から敵です！」

修が叫ぶ。見ると、確かに目視できる距離までもう一人の人型近界民がやって来ていた。

早い。

もう到着したのか。

「ははあ、あれがヴィザ翁をも苦しめていた戦士たちか」

ランバネインは挨拶代わりに二、三発狙撃を加える。雛鳥の群れには当たらないように、戦闘員のいる位置を狙って撃ち込んだ。

それはレイジたちにとっても見えている攻撃だったため、全員難なく回避する。だが陣形は崩れた。ここぞとばかりにヴィザが玉狛の隊員たちを抑え、ヒュースが破片で即席のレールガンを作り出して射出する。それは後方にいた千佳の肩にヒットした。

「千佳!?」修が振り向く。油断した。千佳の肩には黒いガラスの棘のようなものが埋め込まれていた。

「捕えました」

ヒュースが言う。空中を浮遊する黒い破片に引つ張られるように千佳が浮いた。「千佳！ 掴まれ！」とつさに修が千佳の手を繋ぎ、反対の手で近くの垣根を掴むことで千佳を引き寄せる。

「京介！」

「了解！」

レイジに呼ばれた京介は弾丸を再び変化弾に切り替える。ヒュースは黒い破片によってつくられた反射盾を薄く広げることによってそれを防いだ――そこに、レイジのスラストーナツクルが叩き込まれる。

薄くなった盾をぐしゃりと粉碎し、ヒュースの頬を殴るレイジ。ヒュースは数メートル吹っ飛び、地面をゴロゴロと転がる。その拍子に千佳を引つ張る力が途切れた。

そこへ再び狙撃が来る。今度は二発。正確にレイジを狙ったもの

だった。京介が民家の屋根にエスクードを張って一発の軌道を逸らす。もう一発はレイジ自身が再びスラスターを噴射することで回避した。

「……なるほど」レイジはヒューズの盾を殴り壊した際に腕に突き刺さった黒い破片を見て、ヒューズのトリガーの特性を理解する。

「やつのトリガーの仕掛けがわかった。磁力だ。あの反射縦の欠片の一つ一つが磁力のような、引き合い反発する力で操作されている」

「磁力……！」

千佳を引つ張ったのもそれか。

「京介、修。C級を連れて全速で基地に向かえ。雨取をやつの磁力の射程に入れるな」

「いいんすか？ 数の有利がなくなりますよ？」

「もう全員でジリジリ退ける状況じゃない」レイジは言った。「その二人は俺と小南が足止めする——それから酒場」

「なんだ？」

「お前はあの狙撃手につけ。あいつが千佳たちを狙った時は対処を頼む」

「了解した」

酒場は彼方の民家の屋根に降り立った男を目で捉えると頷いた。

「本部、こちら烏丸。南西部のC級を連れて基地へ向かいます」

『了解だ。付近の隊員は可能な限り、三雲・烏丸両隊員を援護しろ！』

5

『付近の隊員は可能な限り、三雲・烏丸両隊員を援護しろ！』

「——だつてさ。どうする？」

南西部に高速で移動しながら、緑川が出水たちの方を窺う。

「つってもさつき、トリオン兵の群れを片付けろってレイジさんに頼まれたんだよなあ」

米屋は頬を掻いた。

「2—1で分かれようぜ。雑魚トリオン兵の方に一人向かわせて、残

りは玉狛の応援に行く」と出水が提案する。

「じゃあ雑魚敵は緑川、頼む」米屋が言った。「えーなんでだよ。オレも人型と戦いたい」「機動力が一番あんのはお前だろ?」「シューターは援護向きだしな」「……」「悪いな緑川。今度なんか奢ってやるから」「あ、そう? じゃあ焼肉食べたいなく」「ここぞとばかりに足もと見るなーおまえは」「しゃーねえ、戦功出たらな」「やった!」

緑川はグラスホッパーを起動すると、二人から別れて南西のトリオン兵たちが進行する方面へ飛んでいった。

6

雛鳥の群れが逃走を始めたことで、ランバネインはヴィザたちの援護につくか、雛鳥を追うかの二択を迫られる。機動力に優れるランバネインはヴィザたちと違って比較的容易に雛鳥を追うことができるが、ランバネインのトリガーは雛鳥の捕獲に向かない。大暴れ特化、撃ち合い勝負と火力勝負に主眼を置いて製造されたのがランバネインのトリガー「雷の羽」^{ケリドーン}なのだ。ならばヴィザたちに加勢するか? ランバネインはひとまず、ヴィザと斬り結ぶ斧使用に向けて射撃する。

その弾はしかし、標的に届く前で斬り落とされた。

「!?」

酒場が弾丸にスコープピオンの刃を当てて強引に止めたのだ。

両手に持つスコープピオンのうち、一本がそれによって壊れる。

レイジに言われてからずっと、酒場はずっとランバネインの動きを見ていた。彼の面倒を見るのは酒場の仕事だ。狙撃を防いだ酒場は、地上に降り立つなりランバネインとの距離を詰める。ランバネインは再び飛行機能を噴かして上空に離脱した。刃の間合いの外に出ると、連射で酒場の足を止める。

「くそ……!」

射撃から逃げながら、酒場は悔しがる。あと一步のところだったのに。

酒場はちらりと右の腰元を見た。そこには何も装備されていないが、出そうと思えばいつでも銃型トリガーを生成することができる。

銃を使うか？

一瞬そんな考えが思い浮かぶが、却下する。銃を使つてはいけな
い。「お母さん」の言う通り、私が銃を使えばきつと一発で怪しまれ
る。

落ち着け、熱くなるな。ナイフだけでも私は十分すぎる戦力になっ
ているじゃないか。これ以上役に立とうとする必要はない。

私の目的は近界民から平和を守ることじゃない……それを忘れる
な。

酒場の表情は息苦しそうに歪むが、本人にそれを確認する術はな
かった。

ランバネインはもう一度射撃を試みようとするが、追ってくる酒場
に対処する必要があるので落ち着いて狙いをつけられない。雑な攻
撃になってしまう。

「狙撃だー！」

酒場がレイジに報告。ヒュースと戦っていたレイジは一旦距離を
取つて狙撃をやり過ぎす。ここぞとばかりにヒュースが追撃をかけ
るが、守りに徹したレイジは容易に崩れない。

『ランバネイン、お前は先に雛鳥の群れを追え』

その時、アフトラトルの側に隊長からの通信が入る。

「俺がか？　しかし俺のトリガーは捕獲には向かんど」酒場の剣戟か
ら逃れつつ、ランバネインは応答した。

『ラービットを向かわせる。お前は戦闘員を排除しろ』

「……なるほど、了解した」

ランバネインはまたもや空を飛んで移動する。慌てたのは酒場だ。
「くそ。おい、C級狙いか!？」酒場は彼を走つて追いかけるが、悲しい
までに速度に差がある。「とりまる！　三雲！　そっちに空飛ぶ人型
が行くぞ！」酒場にできるのは、内部通話をONにして叫ぶことぐら
いだった。

悠々と空を飛ぶランバネイン——それを、突如として地上から発射

された追尾弾の群れが襲う。

「……」ギリギリで躲すランバネイン。だが、弾は予想以上に深くランバネインを追ってくる。数が多く、シールドで止めきれない。仕方なしに建物を使って弾を凌ごうと高度を下げた。

「ようやくと追いついたぜ」

出水はニヤリと笑って嘯いた。

弾を射ったのは出水だった。地上から強化^{ホー}追尾弾^{ネット}を使ってランバネインを狙ったのだ。

背の高い建物の密集する地域。屋上から跳んだ米屋がランバネインの首を狙うが、シールドによって邪魔される——しかし米屋の槍は、ただの槍ではない。

『幻踊弧月』

ぐにやりと曲がった刃がランバネインの首を狙う。ランバネインはギリギリでそれを回避するが、わずかに掠ってトリオンの煙が傷口から吹き出る。

「米屋君！」

「おー酒場。正隊員用のトリガーもらったんだな。今度またいっちょよバトロウぜ」

酒場がランバネインに追いつく。ランバネインは一瞬、ここで彼らと戦闘に入ろうか迷うが、結局は隊長——ハイレインの命令を優先させる。もたもたしていると雛鳥に逃げられてしまう恐れがあったからだ。

飛行機能が一旦途切れ、地上を走るランバネイン。この十数秒は比較的無防備になってしまう。案の定、射撃の雨がやってきた。

『変化炸裂弾』

弾道を変化させ、ビルの隙間を縫うように射線を走らせる出水。ランバネインはシールドを展開してそれを止め、弾の来た方向に向けて反撃するが、残念ながらそちらに出水はいない。弾道を自由に設定して曲げられるのが変化弾の特徴だ。

変化炸裂弾着弾時の爆発に紛れて酒場と米屋が襲いかかった。米屋が右前方から、酒場は左前方から。回り込むように斬り込んでくる

二人に対処するため、必然的にランバネインは止まらざるをえなくなる。反撃として前方に弾を乱れ撃ちするが、二人は建物の影に隠れることで難を逃れる。

「射線が通らんな……」ランバネインはぼやく。障害物もおかまいなしの高火力射撃を見舞う彼でも、壁向こうの標的に狙いは定められない。だが、それは戦闘からの離脱を狙う彼自身にとっても都合だ。再び射撃で目眩しをすると、狭い路地を走り抜けてまず出水の射線から消える。酒場と米屋が来るが、再生した飛行機能を噴射させて一気に逃げ切りをはかった。

「——ウ、らァー！」

酒場が追いつがる。建物の壁を蹴り上がり、飛行するランバネインに一撃を見舞う。それはシールドによって防がれたが、酒場の攻撃に続いて繰り出された米屋の二撃目は別だった。

『旋空弧月』——

槍の穂先が一瞬増大し、長い斬撃となってランバネインの右足を斬る。プシューと音を立ててトリオンが漏れ出した。「チツ——」離脱のコストに足一本。まあ、飛行するのに支障はない。

「逃すかー」とさらに酒場が跳ぶが、「待て待て待て！」と米屋が酒場の腕を掴んで止める。直後、酒場の鼻先をランバネインの弾丸が掠めた。

酒場はびつくりして鼻をさする。

「焦んなよ。機動力勝負じゃどうしても向こうに分がある」

「だが……このままあいつを行かせれば、三雲や千佳たちが危ない……！」

喚くように言う酒場。米屋にしてみると、彼女のその反応は意外だった。こいつはこういう感情も表に出す人間なのか。

「喋ってる暇があるなら走ろうぜ」横から出水が出てきて言う。「向こうには京介がいるんだ。ちよつとの間は大丈夫だろ——」

その時だ。

後方から緊急脱出の軌道線が一本空に伸びたのは。

「あの方向は——」

『レイジさんが緊急脱出！』宇佐美からの報告が入る。『おじいちゃんの方が黒トリガーだったみたい！ 小南も片足やられて撤退中！』

「黒トリガー……」

「まじかよ」

玉狛の二人がやられた。

ということは、足止めされていたあの人型二人もC級隊員の追っ手に加わるということだ。磁力使いと黒トリガー……そして空飛ぶ狙撃兵。

運命が変わろうとしていた。

7

同じ頃、修たちは基地本部へ続く連絡通路入り口まで辿り着いていた。修がボーダーのIDを使って入り口を開けようとするが、タッチパネルをいくら押しても反応がない。扉が開かなかった。

「……ダメです！ ドアが開きません！」

「ええーなにそれ!? どうなってるの!?」「組織の裏切り……!?」「巧妙な罠か！」

「宇佐美先輩、これなんで開かないんですか？」

騒ぐC級を横目に京介が宇佐美に尋ねる。しかし宇佐美も理由がわからず困っていた。『うーんそれが……本部と通信つながんないんだよね。通信室に何かあったのか……さっきのイルガー特攻でどこか壊れたのかな?』首を傾げつつ予想を口にする。

「烏丸先輩、どうしますか？」

「ここが無理なら別の連絡通路を試すか……直接本部に向かうしかないな」

その時、千佳がピクリと何かに反応して顔をあげた。その表情には恐怖の色が浮かんでいる。南方の空を見ると、彼女は怯えた声で追っ手の到来を告げた。

「追いかけてくる……! 三人! すごい速さで……!」

「どうということだ?」

「サイドエフェクトです。千佳は敵が近くのを感知できるんです」修が京介に説明する。

「……マジか。レイジさんが緊急脱出してまだそんな時間経ってないぞ」

上空の彼方に見えた黒い点がみるみる大きくなって、やがて黒い三人の人間の姿となる。

『気をつけろ。老人は黒トリガーだ』

レプリカが京介と修に忠言する。それもただの黒トリガーではない。レイジと小南、精鋭を謳う玉狛第一部隊員の二人を瞬く間に突破してみせた黒トリガーだ。あるいは誰一人として彼には勝てないかもしれない。

「ほっほ、追いついた。さすが最新鋭のトリガーですな」

件の好々爺は呑気に同僚のトリガーを褒めていた。

「恐縮です」

「では初段は俺が——ヴィザ翁は戦闘員を、ヒューズは雛鳥の捕獲を頼む」

キイインという甲高い音とともに、左腕に大筒のような狙撃銃を生成したランバネイン。修たちに照準を合わせつつ段取りを確認する。

「心得ています」

まず降ってくるのはランバネインの狙撃。それはボーダーの狙撃銃とは比較にならない速射性能を持っている。これには京介が対応した。エスクードを展開して狙撃を止める。次いで老人と磁力使いが地上に降りてくる。「迅さんたちとの合流地点までC級を連れて行け！」京介が修に叫ぶ。余裕が消えかかっていた。

切り札である「ガイスト」の使用に踏み切ろうかと京介が思い悩んだ時、今度は左の上空から何か物が凄い勢いで降ってきて、すぐ横の民家に派手な音を立てながら激突する。

両陣営、それがなんなのか警戒した。敵か味方か、それとも他の何かか。

皆の注目が集まる瓦礫の山から、「あだだだ……」と、場違いな声がかか。

聞こえてくる。腰をさすりながら出てきたのは玉狛支部の実力派エリートだった。「これ勢いつきすぎじゃない？ レプリカ先生。間に合ったからいいけど……」

「迅さん!？」 修が叫ぶ。

「こいつは……?」

怪訝な顔をする磁力使い。迅はズボンの汚れを軽く払うと、名乗りをあげる。

「はじめましてアフトラトルのみなさん。おれは実力派エリート迅悠一。悪いがここからは、おれが相手をさせてもらう」

『弾』印^{バウンド}

ヴィザたちの注意はどうしても迅に注がれてしまう。故に、超高速で空中から斬り込んでくるもう一人に気づけない――

「――右から奇襲だ!」

ランバネインが叫ぶが、遅い。

遊真の超加速キックはもの見事にヴィザを捉えた。杖剣で受けるヴィザだが、勢いを殺し切ることはできず、衝撃でヴィザの足元のアスファルトが割れる。

「おっと間違えた。『おれが』じゃなくて『おれたちが』だった」

迅は飄々と嘯いた。

「空閑……」 修は彼の名を呼んだ。「遊真君!」「おちび先輩!」「あいつは、『C級の白い悪魔』!」

空閑が帰ってきた。

修にとって最も頼れる仲間であり、修の知る限り最強のトリガー使いが助太刀に来てくれた。この時の修の昂揚感筆舌に尽くし難いものがあった。

『強』印^{ブースト}、二重^{ダブル}

間髪入れずヴィザに追撃を叩き込む空閑――だが、これは避けられた。お互いに距離を取って仕切り直す。

「あ、しまった」空閑はおもむろに呟いた。「警戒区域の外で戦っちゃダメなんだった」

「気にすんな。なんせ非常時だからな」

迅が言った。

「いきなりこれとは……いやはや……。なかなか羨のいい少年だ」

ヴィザはそう呟きながら、余裕ある仕草でマントについた汚れを払う。大したダメージを食らっていないようだった。

睨み合う両勢力。口火を切ったのはランバネインだった。

民家の屋根に降り立ったランバネインが迅を狙い撃つ。それに合わせて、ヒュースも再びレールガンを生成して空閑の方に発射した。

迅も空閑も危なげなく弾を躲すが、ヒュースの狙いは空閑ではなかった。それは後方の千佳を狙ったものだ。千佳に向かって一直線に飛んで行った破片の弾丸はしかし間一髪、修が腕を伸ばして代わりに食らう。「ナイス、メガネくん」と迅が修を褒めた。

「修くん大丈夫!?!」

「大丈夫だ！ 逃げるぞ！ やつらはおまえを狙ってる！」

「そっちは頼むぜ京介、メガネくん。連絡通路は使えない。直接基地を直指してくれ。トリオン兵に気を付けろよ」

「了解！」

迅に京介が頷いた。

「ああそれと——」と迅が言いかけた時、ランバネインの狙撃がやってくる。これ以上はおちおち喋ってらんないなど、迅は口を閉じて戦闘に集中した。予知で弾を回避しながらエスクードを起動し、後続の狙撃を防ぐと共に道にバリケードをつくる。

「壁、ですか……」

ヴィザが何かしようとするが、「動くな」と空閑が先に仕掛けていた「鎖」印を起動。トリオンの鎖でヴィザをがんじがらめにする。

「チツ——」戦闘態勢に入るヒュース。だがそれをヴィザが言葉で制止した。

「ヒュース殿は雛鳥を追ってください。ここは私とランバネイン殿がお相手しよう」「しかし……」

「俺たちのトリガーでは、殺戮はできても捕獲ができないのでな」

ランバネインの言葉に、ヒュースは「……では」と頷き、逃げるC級隊員たちの方へ走り出した。

それを読んでいた迅は、ヒュースより一瞬早く動き出して斬りかかる。ヴィザは鎖を斬り、迅を止めようと動くが、先ほどレイジと小南にもらった左脚の傷の影響と、空閑が間に立ちはだかったのでフォローに回れない。自由に動けるのはランバネインだったが、迅がヒュースに射線を重ねたのでヒュースを巻き込む可能性が出てきた弾を撃ち込めず。代わりに空閑に狙いをつけて連射した。

「盾」印^{シールド}」

空閑はランバネインの攻撃を盾で防ぎ、斬りかかってくるヴィザの攻撃圏内から飛び退く。迅はヒュースの行手に足止めとしてエスクードを展開しつつ空閑の援護に入り、ヴィザと切り結んだ。対戦相手のスイッチ。空閑は「鎖」印でヒュースを狙った。ヒュースは破片を撒いて鎖を逸らす。空閑が追撃の「仕掛け」を起動しようとした時、またもやランバネインの狙撃が来る。土埃が派手にあがり、迅の視界も狭くなった。

ヒュースが抜け出す。空閑が追いつくがろうとするが、射撃が邪魔で止まらざるをえない。ヴィザにかかりきりの迅は、エスクードを使つての空閑の援護ができなかった。

「抜けられたか……」

迅はぐつと唇を結ぶ。サイドエフェクトによって、ヒュースをもう止められないことがわかったのだ。一瞬、悲壮な思考が深刻な表情となつて表に出るが、すぐに目の前の敵に集中する。せめて自分ができるとはしっかりとこなさなくてはならない。黒トリガーと狙撃兵を釘付けにしておかなくては、「最悪の未来」が現実になる可能性はさらに高まる。

こうなつた以上は他の者に託すしかない。

米屋や出水、京介や三輪、狙撃手組。

そして彼女に——酒場に託そう。

修たちの守護者は酒場だ。

全ての命運は、きつと彼女が握っている。

修たちの行手に無数の新型トリオン兵が現れる。

門を通って呼び出されたラービットたちが、C級隊員たちを捕獲せんと襲いかかってきた。

「この道はだめだ！ 迂回して別の道から基地に向かえ！」

京介が叫ぶ。皆、元来た道に戻り始めた。

殿軍を京介と修がつとめ、C級を逃す。宇佐美から送られてきた迂回路のルートに沿って進むかたわら、千佳はふと迅たちを残していた方角を見上げる。彼女は不安げな顔つきをしていた。それに気づいた修もまたそちらを見上げ、さらなる敵の接近に苦い顔をする。

彼方に見えるのは、先ほどから執拗に千佳を狙ってくる磁力使い。

「また……！」

「磁力使い……！」修の頬を冷や汗が伝った。迅と空閑の防御綱を抜けてきたのか。なんて奴だ。

襲ってくる敵はラービットの群れと人型近界民。京介がいるとはいえ、戦力差は雲泥の差。絶望的な状況だったが——そこに、わずかな光明が差し込む。

飛来する炸裂弾^{メテオラ}。

ラービットの群れが足を止める。何事かと思っていると、南方から次々とボーダーの隊員が姿を見せた。

「これがウワサの新型か」

「三雲、チカ。無事か？」

米屋と酒場。そして修の知らないシューター——肩にA級一位の隊章を入れた、脱色頭の少年だった。

「よー京介。先輩が助太刀してやるぜ。泣いて感謝しろよ」

「泣かないですけど感謝しますよ」京介は斬り結んでいた二体のラービットから距離を取りつつ言う。「C級を基地まで逃がします。迅さんの指示です。敵を引きつけてください」

「了解——アステロイド」

シューターの手元に巨大なトリオンキューブが出現した。その大きさに修は思わず目を見張る。シューターは二体のラービットに弾

の雨を浴びせ、気を引いてC級からひっぺがした。あれがA級一位の実力かと修は一瞬呆気にとられる。トリオン量、僕の何倍あるんだ？「気を抜くな修ー」京介が言う。「まだ数で負けてる！それに、もうすぐ磁力使いが来るぞー」

9

私は米屋くんたちと一緒に、C級隊員に迫るラービットを迎え撃つ。

そのうち一体の片耳を斬り飛ばしながら、横のラービットにもスコーピオンを投擲して足止めをかける。こいつらはC級隊員を——特に千佳を狙っているらしい。向こうの方から距離を詰めてくる磁力使いは、さつきから何度も千佳を捕らえようとしている。三雲が千佳の守りに入っているから完全に千佳が無防備というわけでもないが、それでも三雲だけに磁力使いの相手をさせるのはいささか無茶がすぎる。向こうのヘルプに行った方が良いな。

「——何をやってるの」

頭の中に、「お母さん」の音がバチリと響く。

「危険を冒してまで彼女たちを守る必要はないでしょう。あなたの任務を忘れたの？」

実際にあの人が私にそういうことを言ったわけじゃない。けど、あの人がならこう言うだろうなというセリフが脳裏で反響する。その度に私は弱い電流を食らったみたいに動きが止まってしまう。あの人は猟犬たる私の飼い主役で——あの人の声には、私はなかなか逆らえない。

手近なラービットに標的を変更し、スコーピオンを振るう。果敢に、苛烈に、どうにもやり場の見つからない苛立ちと焦燥感を刃に乗せて。防御一辺倒になったラービットを切り刻んでいく。私は瞬く間にラービットを一体解体した。

「はえーなおい」と、同じく横でラービットの相手をしている米屋くんに褒められる。いつもなら「そうだろう。次はもっと早いぞ」なんて

うそぶくところだが、今は軽口の時間すら惜しい。次なる相手を求めていた。

もつと速く、もつと強く。まだ全然足りない。もつと全力で戦わなければならぬ。

……なぜだ？

なぜ私は、こんなにも――

「千佳!？」

三雲が千佳を呼ぶ声がする。何だ、何が起こった。見ると千佳がまたしても宙に浮いている。磁力使いが千佳を攻撃範囲に捉えたらしい。「チカ子！・メガネ先輩！」千佳の友達の子が叫んだ。三雲と千佳が磁力の間合いに入ってしまったらしい。

まずいと思つて踏み出した足を「お母さん」が止める。「それはあなたの義務じゃないでしょ？」――ゆるやかなボールに包まれた気がして、私は一瞬動けなくなった。

ラービットが襲ってくる。

ギリギリで防御姿勢をとり、ラービットの豪腕を受ける。あえて自分から後ろに吹っ飛ぶことで衝撃を逃がした。「酒場!？」と米屋に名前を呼ばれる。ラービット二体相手に槍一本で立ち回っている最中だというのに、視野の広い奴だ。

ガシャンと派手な音を立てて、私は民家の二階に激突する。瓦礫の山に潰されると思ったが、トリオン体故に無傷だった。体の上に覆いかぶさる瓦礫の山から這い出つつ、三雲たちの方を見る。

やられたかと思つていたが、三雲と千佳は手を繋ぎ合わせ、トリオンを共有して巨大なトリオンキューブを生成してアステロイドを磁力使いに叩き込んでいた。まだやられていない。千佳のトリオンを使った尋常でない威力の射撃に磁力使いは一旦身を引くが、代わりに一体のラービットが修たちに迫る。とりまるも米屋くんも出水くんも、目の前のラービットに足止めを食らつていて助けにいけない。三雲と千佳はトリオン量にものをいわせてどうにかラービットを撃退するが、今度はその隙を縫って磁力使いが接近する。

助けなくては。

瓦礫の山から抜け出すなり、私は磁力使い目掛けて突っ込んだ。黒い破片を斬り落しながら、無理やり磁力使いのヘイトを溜める。「こつちを見ろ!」「——」目論見通り、あいつは破片の弾をこちらに飛ばした。鋭く速い弾だが問題ない。先ほどの空飛ぶ狙撃兵にも同じことが言えるが、狙いの正確な弾丸は迎撃しやすいのだ。立て続けに撃ち込まれる破片群をスコープピオンで斬り落しながら、距離を離さず隙を狙う。

「アステロイド!」

三雲たちの援護射撃。良い援護だ。磁力使いはそれを難なく回避するも、私への対処が疎かになる。隙あり。踏み込もうと思った寸前、横からレーザービットが来ているのに気づいた。私はしぶしぶ飛び退く。

敵を崩せない。

やはり数で劣っているのがでかい。C級を守りながらというのはこちら側の枷になっている。全員苦戦を強いられていた。ボーダー側の全員が死力を尽くして、どうにかこうにか総崩れを防いでいる——……今の所は薄氷一枚のところでもっているが、これから先、いつ決壊してもおかしくない。

私は自分の腰元に意識を注ぐが、「お母さん」が私を鋭い声で叱る。「銃を使うのは駄目だつてあれほと言ったでしょ。今度は蹴りじゃ済まさないからね」——ああわかってる、わかってるさ! いいから少し黙っていてくれ。

「——あ」

千佳が振り向く。

磁力使いから目を離れた彼女が気になり、私もちらりとそちらを見た。低階層の集合住宅の屋上に何かがいる。

「鳥……」

千佳は怯えた声で一言呟いた。

鳥——鳥だ。鳥が飛んでいる。それもただの鳥じゃない。目も鼻も無い、真っ白な光を鳥の輪郭に切り取ったような、奇妙な飛行物体。それらは屋上の上空を悠々と旋回していて、その中心に誰かが立って

いた。

不気味な男だった。

黒いマントをはためかせ、右の手のひらの上にダチヨウの卵くらいの大きさの、白く光る物体を乗せている——いや、浮かせているのか？ それは手の上でわずかに浮いていた。

耳の後ろに生える黒い角。高い身長と相まって、その風貌からほとんどなく竜を連想させる。

「……ヒュース、援護を頼む。金の雛鳥は俺が捕えよう」

「了解しました」

磁力使いが突如破片をバラけさせ、四方八方に射撃する。まずい。私はシールドを広げて身を守った。とりまるも三雲も米屋くんたちも同じようにして防ぐ。それほど威力が高くないのでやり過ぎすことに成功したが、奴らの目的はこうやって私たちの注意を逸らすことにある。

「攻撃が来ます！」

三雲が叫ぶ——その直後、白い鳥の群れが皆に襲いかかった。

鳥がぶつかつた者の体はぐによくよと変形し、やがて白いキューブへと変わり果てる。私は間一髪で鳥を避けたが、すぐそばにいたC級隊員がキューブに変わってしまったのを目撃して戦慄する。

「鳥にさわるな！」とりまるが叫ぶ。「キューブにされるぞ！」

キューブになったC級隊員たちをすぐさま回収しようとするとりまるだったが、磁力使いとラービットに邪魔をされる。そして再び、竜のような男からの攻撃がやってくる。鳥の次は魚の形の弾だった。

複雑な軌道を描く弾だが、「落とせねー速さじゃねーな」と米屋君は槍で魚を斬る。私も同じように魚をスコープピオンで切り刻もうとした。だが、それは罠だった。スコープピオンで魚を斬ると、魚に触れた部分がパコンという音とともにトリオンキューブになって、使えなくなってしまうのだ。

武器を失ったところにラービットの追撃が来る。私はぎりぎり回避できたが、二体に挟まれた米屋君はラービットの太腕に掴まれる。魚の群れが拘束された彼を襲った。やばいと思った米屋くんは

自発的に「緊急脱出！」と叫んで撤退。こちらの戦力が一人減った。
「メガネくん、女子連れて逃げろ！」出水君はそう叫びながら手元にトリオンキューブを生成し、「ハウンド」と叫ぶ。細かく分割した弾で魚の群れを落としていった。よし、ナイス。魚は君に任せたとやおうとした時、彼はその場にばたりと膝をついた。何だ？ 何が起こった？
理解が追いつかなかった私だが、私の足もとに這い寄ってくるトカゲの形をした弾に気付いてその場から飛び退くとともに、出水君はこれにやられたのだと悟る。

米屋君に続いて出水君もやられた。

戦力差がさらに大きくなる。

動けなくなつた出水君に悠々と近づく竜の男。カバーに入ろうとする私の前にラービットが立ちはだかる。「邪魔だ！」生成し直したスコープピオンで斬りかかるが、如何せん装甲が厚い。秒殺は不可能だった。

「アステロイド！」

出水君を助けようと側面から三雲が竜の男を狙つた。千佳のトリオンを使った巨大な弾は、しかし魚の群れの壁によつてあっけなく防がれる。アステロイドは慣性を失い、大きなトリオンキューブとなつてその場に転がった。

まずい、千佳と三雲が狙われた。私はとりまるに助けにいつてもらおうと彼の方を見る。とりまるはよりによつて磁力使いと戦つていた。三雲たちのヘルプには行けそうになかつた。磁力使いに加えてラービットがとりまるに攻めかかる。振り回される大ぶりな両腕を避けるとりまるだったが、そこへ黒い破片による斬撃が飛んでいく。これを避けきれず、とりまるは右の脇腹を負傷した。

とりまるもこのままでは落ちる。

ありつたけの焦燥感が急速に私の中に雪崩れ込む。私はどうすればいい？ どうするのが最適なんだ。どうすれば――

「――それで、もしメガネくんたちがピンチになったら、フォローをお願いしたいんだけど」

迅さんの言葉が頭に響く。

それは「お母さん」の言葉なんかよりずっと小さく遠い声だったけれど、確かに私の中に残っていた。

10

「……？」

ハイレインは首を傾げる。不思議だ。目の前で奇怪な現象が起こっていた。

眼鏡の射手がばら撒いた弾幕を避け、鳥の形をした「卵の冠」の弾は金の雛鳥に向かって飛んで行った。先ほどそこで膝をついている射手がやったようなホーミング特性のある弾に追われるのではなく、ただ遅い弾が撒かれただけの地帯ではハイレインの弾は防げない。金の雛鳥まであと少しというところまで迫った鳥たちだったのだが、雛鳥をキューブ化することは叶わなかった。

鳥たちは一羽残らず撃ち落とされた。

「……」

ハイレインは鳥たちを落とす弾が飛んできた方向を見遣る。道の向こう、三〇メートルほど離れた場所に、誰かが立っていた。

それは十七か十八歳くらいの少女だった——黒髪を短く切りそろえたボーイッシュな風貌。背丈は日本人女性の平均身長よりわずかに高い程度。玄界の雛鳥——ボーダーのC級隊員が着る白い隊服を身に纏っている。腰に提げるはガンベルト。銃はすでにホルスターから抜かれている。それは彼女の手元にあった。

酒場佳子は右手に銃を構えていた。

ボーダーの拳銃トリガーは個人によって多少その見た目を変えることができる。中身こそトリガーを射出するハイパーテクノロジーの粋だが、往年の名銃のフォルムに変えて使う隊員は少なくない。酒場が持つそれが何を模しているかといえ、かつて西部開拓時代に覇を唱えた回転式拳銃。

コルト・シングル・アクション・アーミー。

林藤のセツティングによって実現した、酒場の愛銃だった。

「……………私が銃を抜いた意味がわかるか」

酒場が言う。彼女の眼は鋭くハイレインを射抜いていた。ハイレインが黙っていると、彼女は続けて台詞を述べる。

「——貴様らの敗北が決定したということだ」

酒場は引き鉄トリガーを引いた。

第十話 大規模侵攻③

1

「抜いたか、あの馬鹿」
警戒区域内。

放置されて整備が行き届かず、あちこちが錆びていたりヒビが入っていたりする、今にも崩れそうな立体駐車場——その屋上に、年代物のインディアンバイクが停まっていた。四年前の大規模侵攻時に放置されたにしては整備が行き届きすぎている、というかエンジンがかかっていたままになっている。誰かがここまで乗り付けてきたということは簡単に想像がついた。だが、一体誰がこんな危険地帯にやってきたのだろうか？ ましてや今は近界民の大群が市街地にまで押し寄せて来ているのだ。こんな時にバイク一台だけで警戒区域内に侵入するなど正気の沙汰では無い。

バイクが停められている位置から十数歩離れた位置、つまりは柵も錆びてどこかに落ちてしまっている立体駐車場のへりに、黒のライダースーツを身に纏った一人の女が立っていた。レイジか迅、風間隊の誰かがいれば、それが彼女の声が酒場の母親のものと同じしていることに気づいただろう。

彼女は性能の良さそうな双眼鏡を目にあてて遙か彼方を見ている。そこから時は時折銃声や轟音、閃光があがっていた。そこはちやうど、修や酒場たちが戦っている地点。彼女の視界には、ガンベルトを腰に巻いた酒場の姿が映っていた。

「……まあいいか、ここで近界民に殺されるのも困るしね」女はふうとため息をつき、双眼鏡を目から離す。呆れたような、諦めきったような表情をしていた。くるりと後ろを振り向くと、停めていたバイクのシートに乗せていたヘルメットを手に取って被り、バイクに跨がる。

そしてすぐにエンジン音を上げて立体駐車場を降りていった。

「じゃあ私は、念には念を入れに行こうかな」

酒場の目的はボーダーの情報を盗み出すことにある。

必要以上にボーダーに貢献する必要はない。目立ち過ぎれば却って怪しまれる。出る杭は打たれる、ではないが、大きすぎる戦闘能力は災いと呼ぶ。だから酒場の母は、酒場に銃の使用を禁止した。

酒場は密偵だ。この大規模侵攻においても、自分に疑いの目が向く危険を冒してまで仲間を守る必要はない。たとえば千佳が攫われ修が死んでも、酒場の所属する組織には何の損害もないのだから。

嗚呼——だけど。

みんなと一緒に食べたケーキは、美味しかったな——

銃声はたった一度。

しかし横から酒場に襲い掛かろうとしたラービットは二体とも眼を撃ち抜かれ、機能を停止する。ガラクタと化したラービットが酒場の横に崩れ落ちた。

「瞬殺かよ……!」

出水は驚き目を見張る。

「酒場先輩……」

「行け三雲、千佳」

酒場が言う。彼女の視線はずっとハイレインに注がれていた。

「私がここであいつらを止める。お前たちはただひたすら基地を目指して走れ」

修は突然様変わりした酒場に驚く。いつものとぼけた感じはなりを潜め、刺すような威圧感を身に纏っていた。

これが本来の酒場佳子。

密偵としてボーダーに乗り込んだ戦士の、真の姿。

あまりの衝撃に声が出せないでいると、「……迅さんと約束してるんだよ」と、酒場はハイレインの方を見据えたまま修に向けて言った。「おまえたちがヤバくなったら助けるってな……まあ、当然のことと言えば当然のことだ。なんせ私は——」

——私はおまえたちの先輩だからな。

ちらりと修を見た酒場の眼を見て、修の硬直は解ける。

彼女はいつもの酒場だった。

うまく言葉に表現できないが、彼女はいつもの「酒場先輩」だったのだ。刺すような威圧感を纏っているが、それでも彼女は修のよく知る先輩のままだった。

彼女は味方だった——あるいは、味方になった。

それが、修にはわかった。

「……了解！」

喉の奥からどうにかそれだけ絞り出した修は、千佳を連れて走り出す。「あつ——」千佳は困惑したような目で酒場を見たが、結局は何も話しかけず、修について走って行った。

ハイレインは「ヒュース」と仲間呼びかける。「雛鳥が逃げる。追いつちをかける」

「了解しました」

京介をラービットに任せ、ヒュースは修たちを追うべく走り出す——その瞬間、左足に衝撃を食らってバランスを崩した。転がるように受け身をとった後、左脚のくるぶしを撃ち抜かれていることに気づく。

酒場から三〇と数メートル離れた位置。

そこは彼女の間合いだった。

「……！」

「お前たちはここで止める」

酒場が言う。

「——絶対だ」

彼女はぎろりとヒュースを睨んだ。その静かな迫力に圧きられて、ヒュースはわずかにのけぞる。

凄腕の銃使い。

トリオン体で走る人間の足先を、あれほど離れた位置から正確に射抜く技術を彼女は持っている。特に驚くべきは、彼女はヒュースをほんの一瞬横目で見ただけでそれを行ったということだ。「……なるほ

ど、これは少し厄介だな」

ハイレインは余裕の笑みを浮かべながら言った。

ハイレインは酒場に向けて魚の群れを送る。三十を超える魚群を全て撃ち落とすのは、さしもの早撃ちといえど不可能だろうとの目論みだった。実際それは合っていて、酒場は迎撃ではなく回避・離脱を選択する。シールドを出し、ターンで魚を避けながら背面撃ち。ハイレインに向けて一発。曲芸のような射撃だったが狙いは正確無比。ハイレインの脳天を撃ち抜くはずだった弾丸は、しかし魚の群れの壁に阻まれた。

「チィ——」

酒場は舌打ちをするが、ハイレインの攻撃も酒場に届いていない。この銃使いの前では、防御のために少くない量の弾をつぎこまなければならぬのだ。必然として攻撃に回す弾が減る。

ではラビットやヒュースとの連携によって攻めの手数を増やすか。

背後から酒場を襲うラビットだが、こちらには出水が対応した。「メテオラ」——炸裂弾を浴びせてラビットの視覚と聴覚を奪う。酒場は腕を捻って銃口だけを後ろに向けて発砲。ラビットの腕の付け根に弾をねじ込む。両腕が垂れ下がって防御のしようがなくなったラビットはガチリと歯を閉じてコアを守ろうとするが、猛接近した酒場はラビットの顎の下に銃口を突きつけ、引き鉄を引いて眼球を撃ち抜く。瞬く間に廃棄処分予定のラビットが一体増産された。

ヒュースが破片を飛ばして酒場を狙うが、酒場は飛来する破片をシールドとスコープオンで防ぐ。流れるような動作で銃を構えてヒュースに反撃。ヒュースは瞬時に盾を作り出すが、酒場を前にしてそれは愚作だった。特に、変化弾を警戒して盾を通常より薄く拡げたのが最悪だった。彼女はヒュースの盾を破壊するべく砲火ファイア。なんのことはない、一発で壊れないなら三発同時に同じ箇所スポット・バースト・ショットに、三発でもだめならさらに三発追加で撃ち込むまで。局点集中三連射撃は酒場が最も得意とする銃技だった。

「ぐっ……!?!」盾を壊され、右肩を撃たれてヒューズがのけぞる。
「エスカード」

京介が酒場の横に壁を生やした。側面から酒場に迫っていた魚の弾と、足元から寄っていたクラゲの弾がその壁に当たって弾ける。壁は表層から次々にキューブ化し、みるみる薄くなるが、辛うじて全ての攻撃を防ぎ切った。

「とりまる——ありがとう。助かった」

「酒場先輩、銃使えたんすね」

京介は酒場の隣に降り立って言った。狼狽する酒場。

「あ、ああ。ええとその、これはだな……黙っていて本当に申し訳ないと思っっているんだが、その——」

「無理に話さなくても良いですよ。誰でも秘密の一つや二つ抱えてるでしょ」

「……そうか……」

京介は無表情だったが、酒場はほっと安堵の顔になった。

「ここであいつらを倒す。援護頼むぞとりまる——あときみ……ええと、いでみつ君だったか?」

「出水だ出水。出水公平」出水は再びトリオンキューブを出しながら酒場の間違いを訂正する。「オレにも一枚噛ませろよカウガール。こいつには一発お返ししねーと気が済まねーぜ」

「ん、了解した……。では三人でこいつらを潰そう」

酒場と京介、そして出水は二人の人型近界民を見据えて武器を構えた。

3

「……予想以上だな」

酒場の戦いを見ていて、城戸きとは思わず呟いた。

彼女だけ明らかにレベルが違う。黒トリガーを相手に通常トリガーで互角以上の戦いを演じられる者など、ボーダー内部にも一人いるかどうかだ。ちなみにそのボーダー最強の剣士は現在、基地内部で

暴れる黒トリガー使いと交戦している。

迅には聞いていたが、酒場佳子の実力がこれほどまでに飛び抜けているとは思っていなかった。

「あの密偵、強すぎんか!？」

鬼怒田が仰天して言う。

根付は少々心配そうな顔をしていた。「この後身柄を拘束するとうことですが、はたして無事で済みますかねえ……?」

「予定は変更しない」と城戸は言った。

「この戦いが終わり次第、彼女の身柄は付近の隊員に拘束させる」

4

絶え間なく襲ってくる生き物の弾の群れは出水がハウンドで相殺する。回避に意識を注ぐ必要がなくなった酒場は狙いを定めてハイレインに銃撃を見舞った。魚群の隙間を器用に通して腰元に着弾させる。ハイレインも酒場の狙いを外すために動きながら戦っているのだが、あまり速く動きすぎると魚群の盾から抜けてしまうため、満足に立ち回ることができない。

ヒュースはどうか——彼も彼で苦戦していた。京介と一对一の勝負を繰り広げているのだが、これまでに受けたダメージが大きく、トリオンの漏出で今にも落ちてしまいそうだった。付近にいたらービットはあの銃使いに軒並み破壊され、稼働する二体は金の雛鳥を追うのに使ってしまった。不利な展開だ。

加えて、出水がメテオラで辺りの建物を一掃したことで、ハイレインたちにさらなる火力が集中する。

奈良坂透が京介と戦っているヒュースの頭を撃ち抜いた。

本部基地屋上からの狙撃。

「……!」

ヒュースが落ちる。トリオン体を維持できず、派手な煙をあげた。『命中。次はもう一人を狙って。出水君と酒場さんに合わせましよう』

オペレーターつきみれんの月見蓮が落ち着いた声で言った。

ヒュースが落ちて状況は三対一——いや、狙撃手がいる分さらにハイレイン側が悪い。

「ミラ。今どこに繋いでいる?」

ハイレインは攻撃を避けながら自らの腹心に通信を繋いだ。

「泥ポルボロスの王」を回収して、手筈どおり玄界の砦の前で待機しています」
「敵が思った以上に手強い。このままだと落とされる可能性がある。早めに回収を頼む」

「了解しました」

ハイレインは敵を見た。

ミラがワープゲートを開くまであと数秒。

ワープゲートに入るまで攻撃を凌げば離脱できる。

ハイレインを包囲し、猛攻を加えて防戦一方にさせていた酒場たちは、彼のすぐ横に空間をつなげる門のようなものが開いたのに気づいた。

空間の空いた奥に、黒い角の生えた女性の姿が見える。あの女が門を開けたのだろうか。

「逃げる気かよ!」出水が叫ぶ。

「ここで仕留める——援護頼んだ!」ハイレインとワープゲートの間に一発牽制を撃ち込むと、酒場はぐつと距離を詰める。魚群よりさらに細かい、蜂の形をした弾が酒場を迎え撃とうとするが、出水が誘導弾で半分ほど落とす。それでも抜けてくる蜂の群れが酒場に激突する寸前、京介がエスクードを酒場の足元に展開した。

生えるエスクードに乗って跳躍する酒場。

蜂の群れを置き去りにする。

突然の酒場の軌道変更に対応が遅れるハイレイン。だが彼が慌てることはなかった。「ミラ」「——はい」短く言葉を交わし、酒場の背後にミラのトリガーで小さなワープゲートを開かせる。

「酒場さんの背後にワープゲート!」

本部基地屋上から戦いの様子を俯瞰していた狙撃手、こでらしやうへい古寺章平が咄嗟に叫んだ。それは通信によって酒場にも伝わる。

古寺と奈良坂、そして当真とうまいさみ勇が狙撃銃イーグレットの引き鉄を引く。古寺と奈良坂はハイレイン本体を、当真は酒場の背後に空いた小型ワープゲートを狙って撃ち込んだ。

奈良坂と古寺の弾はハイレインの左足と右腕に、当真の弾は小型ワープゲートを通してミラの下腹部に当たる。

「隊長……！」

「——！」

脚を撃たれたことでバランスを崩すハイレイン。だが片足でもワープゲートまではあと一步。退避するのに支障はない。問題はこの一瞬、銃使いの攻撃をどう凌ぐかだったが——
それはすでに成功している。

「——っ!?!」

ハイレインは身に纏っていたマントを外し、酒場の方向へ投げた。

マントの裏と四方の裾を魚に啜えさせ、そのまま酒場へ突撃させる。突如として目の前を覆った黒布に銃撃を見舞う酒場——それは一発で払えるが、続けて撃った二発目三発目はマントの影に群れていた魚に当たる。寸前まで標的が見えなかったので、魚群の隙間を狙うことができなかった。酒場の最後の攻撃を凌いだハイレインは、そのままワープゲートに足を踏み入れ——

「——風刃、起動。」

——そして、斬撃を浴びた。

5

「命中」

三輪隊の作戦室、オペレーターデスクに座っている月見が呟く。

「黒トリガーの人型近界民を撃破。さすがね三輪君」

「……」

酒場たちのいる位置から三〇〇メートルほど離れた位置に立っていた三輪は、風迅を解除すると再び通常トリガーを起動する。

「俺の功績じゃない。褒めるのはやめてくれ月見さん」

三輪は感情の無い声で呟いた。

『酒場さん、だったかしら……。彼女、あなたと同じクラスなんですつてね』

「……」

『三輪君、ずっとあの子を避けていたって本当なの？』

「……仁礼からですか」

『ええ。この前のちよつとしたオペレーターが集まりでね。「隣同士なのに、酒ちゃんに対応が冷たいんだよなーアイツ」とかなんとか言ってたわよ』

「別に、避けていたわけではありません」

三輪は通常トリガーに換装して、酒場たちの方へ移動を始める。

「必要以上に馴れ合わないようにはしていただけです」

『どういうこと？』

「……すぐにわかります」

拳銃型トリガーに「鉛弾」を装備しながら三輪は言った。

6

指揮官がやられ、修が本部基地に無事たどり着いたことで、アフトクラトルの人員はそれぞれ撤退を始めた。迅や遊真と戦っていた人型近界民たちのもとにも、ワープ使いが姿を現して彼らを回収する。

「……？」

遊真が一か八かの大勝負をかけようと「弾」^{バウンド}印を壁に装填した時、相対する老剣士の傍の空間に円い穴が空いた。

「ヴィザ翁、撤退です。こちらへ」

「ほう。雛鳥に逃げられましたかな？」

ヴィザは遊真を見据えながら言った。

「……はい。隊長が撃破され、金の雛鳥が砦内に逃げ込んだため、金の雛鳥の捕獲はもはや困難になりました。他の場所でも玄界の兵が雛鳥の群れに到達し、ラービットによる捕獲が不可能な状態にあります」

「なるほど、了解しました。ではもう長居は無用ですな」

「……退くの？」

遊真が訊く。ミラは敵意をあからさまに見せて遊真を睨むが、ヴィザは温厚にうなずき、「そのようです」と答えた。

「名残惜しいが、勝負の続きはまたの機会に預けましょう。玄界の若き勇士よ」

「……」

ワープゲートの向こう側に消える老人を、遊真は黙って見送る。彼の言葉に嘘はなかった。アフトクラトルはどうやら本当に撤退するらしい。老人の背中とワープ使用の恨むような視線は、閉じるゲートの向こうに消失する。後には何も無い、瓦礫の山だけが残っていた。空が晴れる。開いていたゲートが閉じていく。

遊真はふうとため息をついた。少なくとも今日のところは、アフトクラトルは兵を退くようだ。戦闘終了。遊真は壁に描いた印を消した。

『オサムとチカは無事、基地の内部に着いた。一応は安全な状態に入っただろう』レプリカの子機が言う。本体は先ほど修たちのもとに増援として向かっていったのだ。

『この後はどうする？ 本部に向かうか、玉粕に行くか』

「うーん、本部に向かうかな。オサムたちに合流しよう」

「おっと、まだトリガー解除はしないでいてくれよ」

そう言いながらやってきたのは迅。彼と戦っていたあの狙撃兵もまた、ワープ使用に回収されたのだろうか。

「迅さん……どういうこと？ 残ったトリオン兵を片付けるとか？」

「いやいや、それはもう大丈夫。嵐山さんとか緑川とかに任せておいて問題ないよ。アフトクラトル側だって残存兵力はできるだけ回収しようとするだろうし」

迅は勿体つけるように言う。いまひとつ要領を得ない彼の態度から真意を察したのはレプリカだった。

『酒場を拘束するということか』

迅は仮面のような微笑の表情を貼り付けたまま「御名答」と呟く。

「正面から戦うの？ それより不意打ちとか、騙して拘禁とかの方がいいでしょ」

「ああ、そのつもりだったんだけど——多分、少し面倒なことになる」

第十一話 酒場佳子⑧

1

酒場の「母」が玉狛支部に現れたのは、迅と別れた遊真が本部に向かつて移動を始めた頃だった。

「すみませーん」

という女性の声が聞こえて、オペレーター室にいた宇佐美は「誰だろう?」と不思議そうに呟く。一方、隣にいたレイジはその声に聞き覚えがあった。声の主が誰であるかがわかったと同時に、レイジの警戒心は限界まで引き上がる。

あれは酒場の母親だ。

だが、なぜ来た――?」

思考をフル回転させて彼女がここまでやって来た理由を考える。酒場の様子を見に来たわけではないのは明白だ。彼女は毎日ボーダーでの出来事を報告書にまとめている。わざわざ危険をおかして玉狛まで来る必要はない。酒場を利用していることに気づかれた?

いや、もしそうなら迅が何か連絡を入れてくるはずだ――いやいや違う。駄目だ。迅は酒場の母を「視て」いない。昨日の夜はずっとカーテン越しに監視していたし、彼女は普段ほとんど姿を見せないから、酒場の姿は見えていても、迅は母親の姿を確認していないのだ。予知から漏れていたとしても不思議はない――いや待て、落ち着け。情報漏洩していない。もしバレていたら、酒場はあんなに敵と戦わず、この混乱に乗じて逃げ出しているはずだ。母親がここに来たのは別の目的がある。

混乱――まさか玉狛の隊員が出払っているのを好機と捉え、トリガーに関する資料を盗みに来たのか? それとも酒場が卓越した銃の腕前を披露したことによって、こちら側が酒場を疑い出すことを危惧して探りを入れにきた?

目的が何にせよ、危険人物には変わらない。

「宇佐美」

「はい？」

急に名前を呼ばれた宇佐美は、怪訝な顔をしてレイジを見上げる。
「陽太郎と雷神丸を連れて支部長の部屋へ行け。裏の非常階段を使うんだ」

「え、どうしたの急に……レイジさん？」切迫したレイジの雰囲気を感じ取り、椅子から立ち上がりつつ宇佐美は訊く。

「早く行け、そして支部長に伝えろ。『母親』が来たと——」

「こんにちは——」

オペレーター室に、酒場の母親が顔を出した。

彼女はバイクでやって来たのか、黒のライダースーツを身に纏っていた。フルフェイスのヘルメットを小脇に抱えているのが様になる、スタイルの良い女性だ。顔つきは娘とは違い、優しげな印象を見るものに与える。慈愛に満ちた微笑みがよく似合っていた。

聞かれたか？

レイジは口をつぐんで彼女を観察する。

「初めまして。私、佳子の母です——ちよつと勝手にお邪魔しちやつてすみませんね？ 佳子のやつに渡しておきたいものがあるんですけど、どこにいます？」

それに答えようとした宇佐美だったが、レイジが宇佐美の前に立つて先に答える。「佳子さんは今、防衛任務中でこちらにおりません。よろしければ我々が渡しておきましょうか」

酒場の母親は微笑みを崩さず、しかし一瞬だけ温度の乗っていない視線でレイジを射抜き——また元の優しい表情に戻る。

「あらそう。じゃ、お願いしちやおうかな」

「……彼女は、何を忘れたんですか？」

「家の鍵ですよ家の鍵。私今夜仕事だからいないって言っておいたのに、まったくあの子は……」と言いながら酒場の母親がポケットから何かを取り出そうとした時——

本部から通信が入った。

『——本部から玉狛へ。本部から玉狛へ。予定通り、一〇分後に酒場

隊員を処分する。彼女が緊急脱出した際の身柄の拘束はそちらに任せた』

「……」

レイジは沈黙する。

「……」

酒場の母親も沈黙を保つ。

ただ一人、宇佐美だけが「……え？　何？」と、わけがわからないといった表情で呟いた。

母親は呆れ返ったような表情をつくと深いため息をつく。肩をすくめ、「なあんだ」と投げやりに言った。

「わざわざ馬鹿のフオローをしに来てあげたのに……意味ないじゃん。まさか、とつくの昔にバレていたなんてさ——！」

ポケットをまさぐっていた左手——ではなく、右手のヘルメットの中に隠していた拳銃を取り出し、発砲する。

複数回に渡る銃声。整然と並べられていた精密機械が派手な音を立てて破壊される。

「キヤアツ！」頭を抱えて伏せる宇佐美。「陽太郎を連れて逃げろ！」と宇佐美に叫び、レイジは前に出て宇佐美の盾になろうとするが、女に銃口を突きつけられて立ち止まり、両手を上にあげる。「動くな」と一言だけ呟いた女は、レイジに銃口を向けたままゆつくりと入り口の方へ移動していった。

「いつからだ？　いつからわかっていた。どうやって私たちを暴いた」

女はレイジに問う。レイジは何も答えない。その問いに答えるのならば、迅のサイドエフェクトにも言及しなければいけなくなるからだ。敵対勢力に予知能力者の存在を教えることはできなかった。

「答えろ！」女は言う。「これは、あの子の失態か!?!」

「……！」レイジからの回答を得るより先に女は何かを察知して、今度は天井に向けて発砲する。レイジたちが怯んだ隙に素早く逃げ出した。

「おわっ!?!」

女は廊下側からこつそりと様子を見に来ていた林藤に向けても威嚇射撃を見せて突破する。すぐさまレイジが護身用トリガーを起動して追いかけたが、階段の踊り場で牽制の発砲。距離を取られる。レイジが警戒しつつ支部の入り口まで進んだ時には、彼女はバイクに乗って走り去ったところだった。もはや追いかけるのは不可能だが、彼女が玉狛支部から離れていったことは確認できた。

オペレーター室に戻ると、そこには宇佐美の他に陽太郎と支部長の林藤がいる。林藤は壊れた計器類を隅に追いやり、宇佐美を椅子に座らせていた。

「うそだ！」

宇佐美の横で陽太郎が怒っていた。地団駄を踏み鳴らし、時折大きくジャンプする。「ありえん！ そんなのうそだ！ いんぼうだ！」

「悪かった。本当に申し訳ない」

林藤は宇佐美と陽太郎に何度も謝っている。宇佐美はずっと俯いていたが、レイジが戻って来たのに気づくと顔を上げ、椅子から立ち上がってレイジの方に駆け寄る。

「酒ちゃんがスパイって、本当……？」

レイジは黙ったまま、宇佐美の眼を見続ける。

「レイジさんも知ってたの……？　ずっと、ずっと酒ちゃんを利用してたって……！」

宇佐美の眼には涙が溜まっていた。

2

黒トリガーの人型近界民を撃破した後、京介は皆と一緒に本部基地へ向かった。

移動中、黒かった空が青空に戻る。晴れ渡った空を見上げた酒場が「おい、空が青くなったぞ！」と、はしゃぐように叫んだ。

「とりあえずは戦闘終了か？」

足をやられたため、京介に背負われた状態の出水が周囲を見渡しなから言う。とりあえず目視できる範囲には、人型もトリオン兵も見当

たらない。「そうでしょう。残党狩りはあるかもしれませんが」と京介は言った。

基地の入り口に着くと、そこには修と千佳、そして出穂が待っていた。

「ようお前ら！ ヒーローの凱旋だぞ」

「酒場先輩！」

千佳が酒場の名を呼ぶ。「おお千佳！ よかったなー無事で！」と言うと、酒場は千佳を抱き上げぐるぐる空中で回した。千佳の無茶な扱いに「せ、先輩!？」と修が慌てるが、「なんだ、お前もやってほしいのか？ 仕方ないなあ」と酒場は勘違いし、千佳をおろすと修も同じようにグルグル回した。

「先輩!? ちょ、降ろしてください！」

「うわっはっはっは！ おろして欲しければ感謝しろ！ 私こそが前回の救世主なのだ！」

「してます、感謝してますから！」

相変わらずの様子を見ると、京介にも戦いが終わったのだなという実感が湧いてくる。

その時、ピリリリと着信音が響く。

「……お？ 私か」と気づいた酒場は修を降ろし、ポケットから小型端末を取り出して通話ボタンを押す。「もしもし、私だ——ああ、お母さん。珍しいな、なんだ突然……え？ なに？ なんだって？ 聞こえづらいぞ……」

通話の相手は母親らしい。そのままなんとなく通話中の酒場を眺めていた京介だが、背後に誰かが着地した音を聞いて振り向く。

「三輪先輩、お疲れ様です」

人型近界民撃破における最後の功労者、三輪だった。

「……ああ」

三輪は京介を見ると小さくうなづく。「ナイス斬撃だったぜ」出水がハイタッチを求めると、三輪は心底嫌そうな目で出水を睨むが、結局はそれに応じる。京介は意外だと思った。ああいうのは絶対やらない人間だと思っていたのだが。

「三輪先輩、ありがとうございます。おかげさまで千佳も無事です」
修が三輪に礼を言う。三輪はしばし立ち止まり、じつと修を見た。

「……お前も、だったな」

そう呟く三輪。なんのことだろう。修も最初きよんとしていたが、三輪が何を指し示したのか理解できたらしく、険しい顔になって「……はい」とうなずく。

うなずく直前、修は一瞬だけ酒場の方を見た。

「じゃあ手伝え」

三輪と修以外、二人が何の話をしているのかまるでわからなかった。出穂が「どうしたんすか？」とストレートに訊く。三輪は顔を背け、修は「ええと……」と困った顔をして言い淀んだ。

酒場はまだ端末を耳に当てている。

「うん——はあ?! バレてた?! 本当かそれは!」

その時だ。

三輪が酒場に向かって銃撃を仕掛けたのは。

3

響く銃声。

その場の誰もが仰天する。

酒場は間一髪、その場から飛び退いて三輪の銃撃を躲す。だがいまの今まで使っていた小型端末からは、極太の朱い角柱が生えて地面に落ちた。

「おいどうした三輪?」

出水が三輪に呼びかける——が、三輪は構わず酒場に向けて赤い弾を連射する。弾の名は「鉛弾^{レッドバレット}」。当たれば相手に重石をつけるトリガーだった。

酒場は三輪から距離をとる。距離をとりつつ、腰から銃型トリガーを抜いて反撃した。

「チツ——」

手元を撃ち抜かれて怯む三輪。完全に不意を突いたと思ったのだ

が、どうやら違ったらしい。今の電話で誰かが酒場に教えたのか？

「三輪先輩!?! どうしたんすか——」

「三雲——」

三輪は京介を無視して修の名を叫ぶ。

酒場を拘束しなければならぬ。

酒場を撃たなければならない。

酒場は密偵で、修たちに嘘を吐いていて、ボーダーの情報を狙っている。ボーダーにとっても社会一般にとっても悪だ。ボーダーは確かに彼女を利用したが、ボーダーの方から彼女を誘ったわけではない。これから行う記憶封印処置にしたって、隊務規定違反に則った処罰だ。違反行為を犯した場合は規定に従って処分されることには、入隊時に酒場だって同意したはず。

いくつもの理屈を自分に言い聞かせ、修はトリオンキューブを手元に生成する。そして標的たる酒場を見た。必然的に眼が合う。驚きと怯えの感情が入り混じった視線に射抜かれた。修の体がさらに重く、固くなる。それでもなけなしの義務感で、無理やりに動いて弾を撃ち出そうとする。

「修くんっ——」

千佳が修の腰に抱きついて止める。「千佳——!?!」分割した弾が暴発し、地面を傷つけた。

「どうしたの修くん!?!」「千佳、頼む！ 離してくれ!」「どうしたんすかメガネ先輩！ 近界民に操られてるんですか!?!」出穂までもが修に取り付く。

「違う——」

もしそうだったらどれだけ良かったか。

「やめてください三輪先輩——」と、京介がエスクードで酒場を三輪から守る。通常のシールドは無効化する鉛弾だが、物質化された壁であるエスクードには遮断された。「邪魔をするな烏丸!」三輪は酒場から目を離さないまま京介に怒鳴る。

「あの女は密偵だ！ 拘束して連行する!」

一瞬、時間が止まったかと思った。

「——密偵？」京介はその言葉の意味を確かめるように反芻する。「嘘だろ……？」出水は改めて酒場の顔を見ながら呟いた。千佳も出穂も酒場を凝視する。修もまた彼女を見た。

彼女の瞳は先ほどとは違い、諦めと悲しみの色に染まっていた。

「修、本当なのか？」

京介が修に尋ねる。修は重い頭を上下に振った。「メガネ先輩……」出穂は修を呼ぶが、その後どんな言葉が続ければ良いのかわからなかった。

「……修くん」

千佳も修の名を呼ぶ。修は千佳の顔を見た。千佳は困惑し、怯え、頼るような——祈るような表情で修を見つめていた。修は千佳から目を背ける。目を合わせることができない。

酒場を睨む。

トリオンキューブを出して分割する。八分割——弾を浮遊させ、いざ、悪しき密偵に射出する——

——ぎゅ、と、千佳が修の服の裾を掴んだ。

そんなに強くない、少し動けば簡単に引きちぎられてしまうくらいの弱々しい力で千佳は修を引き止める。それは自分が正しくないことをしていると知っている者の引き止め方だ。自分が正しくないこと知っていないながら、それでも修を止めなければならぬと思った、千佳の最後の抵抗だった。

彼女に引き止められた瞬間、修の中にあつた攻撃の意志が遂に消えてしまう。

——駄目だ。

できない。

僕には撃てない。だって——

酒場先輩は千佳を守ってくれたじゃないか！

千佳だけじゃない、先輩のおかげで多くの人が救われた！犠牲が減ったんだ！たとえ先輩がどんな悪者でも、それだけは事実だろう!?

僕は先輩に報いなきや駄目なんだ。後でどう叱責されようとも構

わない。彼女が救った命の中には、きつと僕もいるのだから――

「アステロイドッ！」

トリオンキューブを分割する。狙いは酒場先輩じゃない、三輪先輩だ。三輪先輩を妨害してまずこの場を鎮める。そしてその後で酒場先輩と話し合おう。彼女の事情も聞いて、解決策を見つけるんだ。大丈夫、先輩は今回の大規模侵攻で多大な貢献をしている。酒場先輩の戦術的価値は大きい。城戸さんたちだって、できることなら先輩には今後もボーダーにいてほしいと思っっているはずだ。大丈夫、やりようはある――っ!?

銃撃。

修が弾を撃つより早く、酒場の弾丸が修を木っ端微塵にする。「――っ!?!」なぜだ。修が誰を狙おうとしたのかくらいわからない人じゃないはずだ。逃走するにせよ修の妨害は酒場にとって好都合だったはず。なぜ酒場は修を撃った――?」

緊急脱出までの刹那、修は酒場を見る。

彼女は悲しげに笑い、唇だけを動かした。ありがとうと言った風に見えるのは修の気のせいだろうか。

青空に描かれる緊急脱出の軌道線。修は戦場から離脱する。

「嬉しかったぞ、二雲」

酒場は誰にも聞こえない声で呟いた。

「でもごめんな……きつとそれは無理だ」

世界はそれほど甘くない。

引き鉄を引いた罪は、そう簡単に消せないんだ。

4

『全隊員に告ぐ！ 直ちに酒場佳子隊員を捕縛ないし緊急脱出させよ！ 彼女には密偵行為を働いた容疑がかけられている！ 繰り返す、直ちに酒場佳子を捕縛ないし緊急脱出させよ！ 彼女には密偵行為を働いた容疑がかけられている――』

内部通話に響く忍田本部長の指令。だが、京介はそれでもまだ信じ

ることができずにいた——というよりは、酒場を疑うことができなかった。酒場先輩が密偵？ まさか、あの人がそんなわけ、そんなの……。

「まだまだだな三輪君」

三輪が右手で孤月を抜こうとした瞬間、酒場の銃が火を噴く。狙われたのは孤月を腰に結びつける小さなベルト。武器を弾き飛ばされた三輪は、ギリリと奥歯を噛み締めて酒場を睨む。

「酒場……！」

「山下先生には……そうだな、酒場は夜逃げしたとでも言っておいてくれ。机の中にあるものは別にいらぬから、全部捨てておいてくれると助かる」

そして発砲。

三輪は咄嗟にシールドを張るが、そんなもの酒場の前では障子紙も同然。三発連続で全く同じ箇所弾丸を当てて破壊され、致命傷を食らう。

緊急脱出。本部基地の方へ軌道が描かれた。

「にやろう——」京介の背中から腕を使って飛び降りた出水がトリオンキューブを手元に出す。「ハウンド」と言った瞬間、射出する寸前のトリオンキューブを撃ち抜かれて手元で暴発した。

咄嗟に固定シールドを広げて自身の身を守る出水。

「遅すぎる」

酒場はそう言うなり、シールド目掛けて弾丸を撃ち込んで撃ち砕こうとしたが、出水との直線上にエスクードが張られたのを見て寸前で撃つのをやめる。

「酒場先輩……」

京介は剣を抜いていた。

「なんだとりまる」

「密偵って……本当なんですか？」

もはや確認する意味はない。京介自身、思い当たる節はある。だがそれでも訊かずにはいられない。本人から直接聞かないと動けなかった。

酒場は露骨に悪く笑う。

「本当だよ」

「……！」

京介にも狙いを定める酒場だったが、寸前で射撃を止めてその場から飛び退く。直後、酒場のいた場所に上空からの狙撃が集中した。

「気づかれた……!?! なんて……?」

狼狽する古寺。当真や奈良坂も内心驚いていた。位置が割れてるとはいえ、完全に不意を突いたはずだ。影浦のようなサイドエフェクトでも持っているのか？

「つーかあいつ本当に密偵なのかよ？ 人型近界民とあんだだけ戦ってたんだぞ？」

当真はいまだに半信半疑のようだった。

「クロかどうかは俺たちの感知する問題じゃない。疑惑がかかっているのは事実なのだから、身柄を拘束する必要があるだろう」

「……ま、そりやそうか」

当真はニヒルに笑うと再びスコープを覗く。

「銃型の最大射程は四〇メートル……」酒場は宇佐美の言っていたことを反芻する。いや、午前中に林藤支部長にトリガーをカスタマイズしてもらった時、射程を削って威力と弾速を高めてもらった。ここまです使った感じだと三〇メートル強が最大だろうか。いずれにせよ、あの狙撃手たちにこちらの弾はどうやっても届かない。

逃げよう。

酒場は南西方面へ走り出した。

「待てー！」

出水が片手でハウンドを射つ。二七分割したそれらを上方と斜め上方からの二種類の軌道に分けて射出した。酒場はシールドを広く張りつつ逃走する。広がったシールドを狙撃手たちが狙った。

当真、奈良坂、古寺——放たれた三発の弾丸全てに、酒場は空中で自分の弾丸を当てて軌道をそらした。明後日の方向に軌道修正された弾丸は民家の屋根や路上に激突する。

「ビュー」と当真が口笛を吹く。「拳銃王だな」

アイビスの弾やシューターの放つ弾じゃない。イーグレットの弾を——それも三発ほぼ同時に放たれた狙撃の弾を、彼女は走りながら全弾撃ち落としたのだ。尋常の腕前でないことは確かだった。

5

ただひたすらに先ほどまで通って来た戦場を逆走する。逃げなければいけないと思つてとりあえず駆け出した私だが、どこを目指しているのかは自分でもわからなかった。「お母さん」との合流地点も決めていない。

走りながら考える。私が密偵だと、いつから気づかれていたのだろう。三輪や三雲の様子を見た限りでは、昨日今日でバレたわけではなさそうだった。

「知らず知らず、ボロが出ていたのかな……」

これまでの日々を頭の中で思い起こす。玉狛に來た最初の日、三雲たちの入隊、小南との激闘、入隊式、本部での正隊員たちとの練習戦……。

くそう。

もつとここにいたかつたなあ——

「『強』印、三重」

右上空から飛來する空閑に気づき、咄嗟に体を捻つて回避する。空閑の蹴りはアスファルトを抉り、ちよつとしたクレーターを空けた。話には聞いていたが、実際に空閑が黒トリガーを使つているところを見るのは初めてだった。その威力に頭で仰天しつつも、私の腕はいつものように反撃の手順をこなす。空閑は「『盾』印」と言つてシールドを張つた。側転気味に跳びながら弾丸を三発見舞うが、空閑の盾は三輪たちとのそれと比べるとかなり硬いようで、三発だけでは破壊することができない。

「『鎖』印」

空閑の手から伸びる光の鎖。見るからに頑丈そうだが、その程度の速さの鎖分銅では私を拘束することなどできない。鎖の先端に弾丸

を当て、そっぽを向かせる。

反撃したいが、またもや本部基地屋上から狙撃が飛んでくる。今度は二発。さつきより一発少ない。一人は移動中か？ 弾に弾を当てて撃ち落としながらそんなことを考える。「『錨』印＋『射』印、^{クインティ}五重」——空閑は立て続けに攻撃を放ってきた。こいつ、もうちよつと手心加えろよなどと内心舌打ちしながら赤い弾も全射撃墜する。処理しきれないかと思つたが、意外に弾足が遅くて幸いした。赤い角柱がゴロゴロ地面に転がる。赤い弾に角柱——三輪がさつき撃つて来たのと同じ弾か？

「やるね、さけちゃん先輩」

「そうか。勝てなそうだと思つたら退散してくれてもいいぞ……？」

空閑の盾に撃ち込みながら軽口を叩く。場違いなのだろうが、空閑がまだ自分のことを「さけちゃん先輩」と呼んでくれて嬉しかった。

横の路地から誰か来たのがちらりと一瞬見えたので銃撃。「うわっ!？」と声が聞こえるが、盾か何かに弾かれた音がしたので効果はなし。

「大丈夫、オレが防ぎます」——聞いた覚えのある声だ。この戦いの最初、一緒にレーザービットを倒したあの剣士か？ ということはB級の主力部隊も到着している——？

咄嗟に壁に貼りつく。直後、四方八方から射撃だの狙撃だのが見舞われた。たまらず横に建つてる民家に逃げ込む。スコープオンで窓を斬って侵入。それでも空閑はぴったり追ってきた。しつこいやつだ。「『強』印、^{フレースト}四重——^{クアドラ}」壁とか盾とか、あらゆる障害物を一切無視した巨大な一撃がやってくる。ギリギリで家から飛び出た私は倒壊に巻き込まれず済んだ。しかし屋外に出た矢先、また狙撃が来る。今度は方角が大きく離れた二方向。一発を躲し、もう一発はさつきのように弾に弾を当てて軌道を逸らすことで対応する。精密な射撃ほど落としやすい。息つく間もなく銃手たちに半包围される。おさげの少女と、なにかスポーツをやつてそうな爽やか茶髪青年、そして緑川より歳若そうなちびっ子。綺麗な包围陣形だが、そこは私から半径三〇メートル圏内。足を止めるのはご法度だ。一切手加減せず、ちびっ子とスポーツ青年の額に風穴を空ける。三番目に狙つた少女はフル

ガードで私の弾を防いだ。シールドの展開が間に合ったらしい。おかしいな、いつもはもつと速く撃てるのに——そして入れ違いに、盾を全面に押し出して突貫してくる剣士。間違いない、さつき共闘した村上君だ。盾の防御範囲から漏れる足先を弾で狙いつつ、ひたすら全力逃走を選ぶことで彼の剣から逃れる。

「ガイスト起動——『射撃戦特化』」

空中に跳んだ瞬間、悪い予感がして身を捻る。だが避けきれなかった。大きな弾に掠り、左手の指四本を吹っ飛ばされた。まずい、これでは超速での連射ができない。

「酒場先輩——」

とりまるだ。とりまるの射撃だった。

「——すみません、けど……。捕えます」

すかさず他の銃手や狙撃手の弾丸が飛んでくる。彼らは遠巻きにシールドを張りながら、あるいは建造物を盾にしながら私を狙ってくるが、銃口と眼は見えている。進路を塞ぐ銃手の銃口に弾丸をぶち込んで銃を暴発させて包囲網を突破。落ち着け、可能な限り反撃しながら警戒区域外まで逃げるんだ。

どこかから投げられて来た瓦礫から、空閑の鎖が生えてくる。ギリギリで回避するが倒れた方向がまずかった。そこは八方から射線が通っている。銃手の集中攻撃。シールドを張りつつ逃げるがまたダメージをもらう。背中と腿裏に数発——大丈夫、まだ走れる。そう思ったところに襲い来る鋭い剣閃。攻撃手が次々と私に斬りかかってきた。頭の後ろに寝癖をつけた少年剣士は手元に弾を当てて吹っ飛ばし、村上君の攻撃はギリギリどうにかスコープオンで凌いだか、三段目に控える大斧の一撃までは耐えられなかった。左脚を斬り飛ばされてすつ転ぶ。

「佳子——」

……小南。

お前はやっぱりずるい奴だ。

戦闘中にそんな顔しやがって。

ずるいだろう、そんなの撃てるわけないじゃないか。

「——ねえ、嘘なんですよ……？　とりまるみたいに、私を騙してるんでしよう……？」

何も答えない。

何も答えられなかった。

答えられるわけがないだろう。

こんな不誠実な奴は、何も語ることもなんてできない。

駄目だよ小南、私とお前じゃ最初から好敵手になんてなれなかったんだ。

ごめんな小南、頼むから泣かないでくれ。私はすぐに消えるから。

片脚で立ち上がろうとする私めがけて、空閑が超速で突っ込んでくる。『強』印、二重——」背面撃ちで空閑の右手を吹っ飛ばすが、奴は私の右脚を持っていった。両脚を失い、私は空中でぐるぐると回転した後どさりと路上に投げ出される。けどまだまだ、まだ私は死んでない——這いずって前へ進む。

ずるずると、前へ。

隙だらけのはずだが、空閑や小南が追撃してくることはなかった。いつのまにか銃撃も止んでいる。なぜだ？　無様な私に情けでもかけているのか——？

「酒場さん」

道の先に、迅さんがいた。

迅さんはまるで普段と変わらない風体だったが、いつもデフォルトで顔に貼り付けている軽い微笑をつけていなかった。迅さんの顔を見上げて私は察する。ああ、私はこの人の掌の上で踊っていたんだなと。きつと最初から私の正体は見破られていたんだ。

口を開こうとする迅さんを制して私は言う。彼は謝罪の言葉を述べるつもりだろうけど、やめてくれ。それは違うだろう。これが善悪を問うような問題じゃないのはわかっているはずだ。「いいんだ迅さん。重荷に感じる必要なんかない。私の世界じゃよくあることだ。戦士は有効活用しないとない」

迅さんは黙っている。「早く殺してくれ」と私は言った。

「……殺しはしない。あなたの身柄は本部に護送され、ボーダーに関

する記憶を全て封印した後ボーダーから除名される。それだけだ……命は奪わない」

「そうか」と私は言った。つまり此度の任務は失敗か。なるほど。「それは困るな」私は独り言のように呟く。去年の大失態によって後がない私だったが、起死回生のチャンスもとうとう活かせなかったか。

「じゃあその後、私はきつと私の上司たちに殺されてしまうだろうな——」

その時、迅さんの動きがわずかに鈍った。

私の最後の足掻きが読めなかつたわけではないと思う。最初に手合わせした時感じたのだが、迅さんはまるで未来でも見えているかのように攻撃を避ける。だからこの時の私の銃撃だつて読めたはずだ——いや、未来が視えたからこそ鈍つたのか？ 私がこの後どのような末路を歩むのか視えてしまったからこそ、対応が遅れたのかも知れない。ははは迅さん、密偵ごときに同情なんて。ちよつと優しくすぎるんじゃないか——？

なあ迅さん、教えてくれよ。私がボーダーに残る未来はなかつたのか？

そんな未来はありえないのか？

まあきつとそうなんだろう。私は本来いないはずの人間だ。これまでの方が奇跡だつたんだよ。泡沫の夢が弾けて消えただけのこと。仕方ないんだ。

嗚呼——それにしても、

ここに來てから、毎日ずっと楽しかつたなあ——

迅さんの動きが鈍る——とは言つても、わずかに鈍つた程度で実力派エリートを名乗る男が瀕死の私の攻撃に対応できない道理はない。迅さんは私の弾丸を避け、これ以上ないほど鮮やかに私の首を落とすとした。トリオン体を維持できなくなった私は、ボンと派手な音をたてて緊急脱出。玉狛支部で待ち構えていたレイジさんに取り押さえられ、必死に暴れた甲斐もなく身柄を拘束される。まあ銃も剣もない私の力はそんな程度のものだ。そしてそこから先の記憶は私には——ああ、いやいや違う。

そこから後の記憶だけでなく、そこから前の記憶も全部、私には無い。

| | | |
|---------------------------------|-------|--------------|
| 民間人 | 死者 | 0名 |
| | 重傷 | 7名 |
| | 軽傷 | 44名 |
| ボーダー レーター) | 死者 | 6名(すべて通信室オペ) |
| | 重傷 | 3名 |
| | 行方不明者 | 16名(すべてC級) |
| 隊員) | | |
| 近界民 る) | 死者 | 1名(近界民の手による) |
| | 捕虜 | 1名 |
| 第三勢力 | 捕虜 | 1名(記憶封印措置適用) |
| 対象) | | |
| 対近界民 ^{ネイバ} 大規模侵攻三門市防衛戦 | | 終結 |